女鑑



大日本淑女學會

會員募集

◉規則書進呈す

第四回新學期開始

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は専門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ヶ年完結とす

◉五月三十日まで入會金全免す

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉であります

本會機關雜誌 **姫百合** を發行し會員に限り進呈す

◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

▲報知新聞評　本講義録は高等女學校の全學科を知名の専門女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜録五十頁の附録あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小説あり凡そ天下講義録多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

冬と化粧

美人となる秘法

近來化粧の方法が盛んに研究せられる樣になりましたが、多くは白粉等の研究のみでして、どふしたならば美くしい化粧が出來るかと云ふ事を忘れられて居る有樣です、一體化粧の上から見れば、白粉は枝であつて其の下には根の物があるのです、つまり白粉を美くしくつけるには先づ完全な皮膚でなくてはなりませぬ、若しきたない皮膚に美れいな仕粧を仕樣としますのは、丁度ヨゴレタ「ヌメ」へ立派な畫を書かふとする如く、到底不可能の事で御座います、故に美つくしい化粧をなさりたい方は、まづ第一に皮膚を良くしなければなりません、之は極く譯もない事で、即ち常にローヤル水を用ゐて後白粉を御つけになる事を御忘れにならなければ、自然に好い皮膚と成つて美るはしい化粧が出來ます。

寒氣日増しに酷しく、今後人の皮膚はやゝもすれば荒れ易いのであります故、婦人方は固より殿方も常に注意して夫を豫防せねばなりません、夫れにはローヤル水を御使になるに限ります。

ローヤル水は此の外種々の特色がありまして、例ば脂肪分の多い爲めニキビの出來る人は、洗面の後にローヤル水を御使になれば非常の効があります、又脂肪分の少ない爲め皮膚のアレる方には適當の脂肪分を與へ、皮膚の營養を増す等、他の化粧水では見る事の出來ない多の効があります、故に世間でローヤル水を稱して萬能化粧水と申しますは偶然で御座いません。

◉定價　特大　一圓　大　五十錢　中　卅五錢　小　廿錢

郵税は十二錢販賣店は全國至る處の化粧品店洋品店小間物店賣藥店に在ります。

發賣元は東京銀座一丁目佐々木商店です。

女鑑　第拾八年第三號

目次

妻は飽くまで內寶たれ　伯爵　柳原義光
生活難と職業の趣味　農學博士　横井時敬
男女交際の兩面觀　鈴木古鶴
女子の職業　文學博士　井上哲次郎
筆のしづく　侯爵夫人　鍋島榮子
春の歌　菅　惠子
胃腸の養生法　醫學博士　長與稱吉
花もひと時　大塚楠緒子
日本婦人の不妊症に就て　楠田謙藏
いで湯の宿　佐々木信綱
成功せる手藝家　中川愛氷
樺太發見の彫刻ある鳥骨の用につきて　理學博士　坪井正五郎
吾人の生活に必要なるものほど澤山で安値　法學士　河上　肇
良人に愛せらるゝ秘訣　芳岡女史
小說舊廬の梅　須藤南翠

家庭に於ける心理學の應用　高島平三郎
鶯の啼音　孤舟女史
結婚は女子の獨立を妨ぐるものにあらず　秦　節
家庭と社會の影響　江原素六
主婦の責任　阿久澤外記
教育と植物　棚橋絢子
新式菓子製造法　梅田嬌菓
長閑けき野邊　中山幸子
小說暮の女　文學士　小原無絃

讀者文藝
▽兼題和歌春の月、十筆　佐々木信綱君選
▽短文、新體詩　鹽井文學士選
▽雜題和歌　小出粲君選
▽俳句　内藤鳴雪君選
大懸賞字數あて披露
判じ繪（懸賞あり）
前號繪さがし披露
裝畫　◎表紙（鏑木清方）口繪（山本昇雲）◎寫眞版　名門の新家庭▽加納子爵の家庭△小澤男爵の家庭▽教育家の二家庭△獨逸の婦人風俗△相州の名所▽雪中の梅▽文づくゑ

桃乃節句



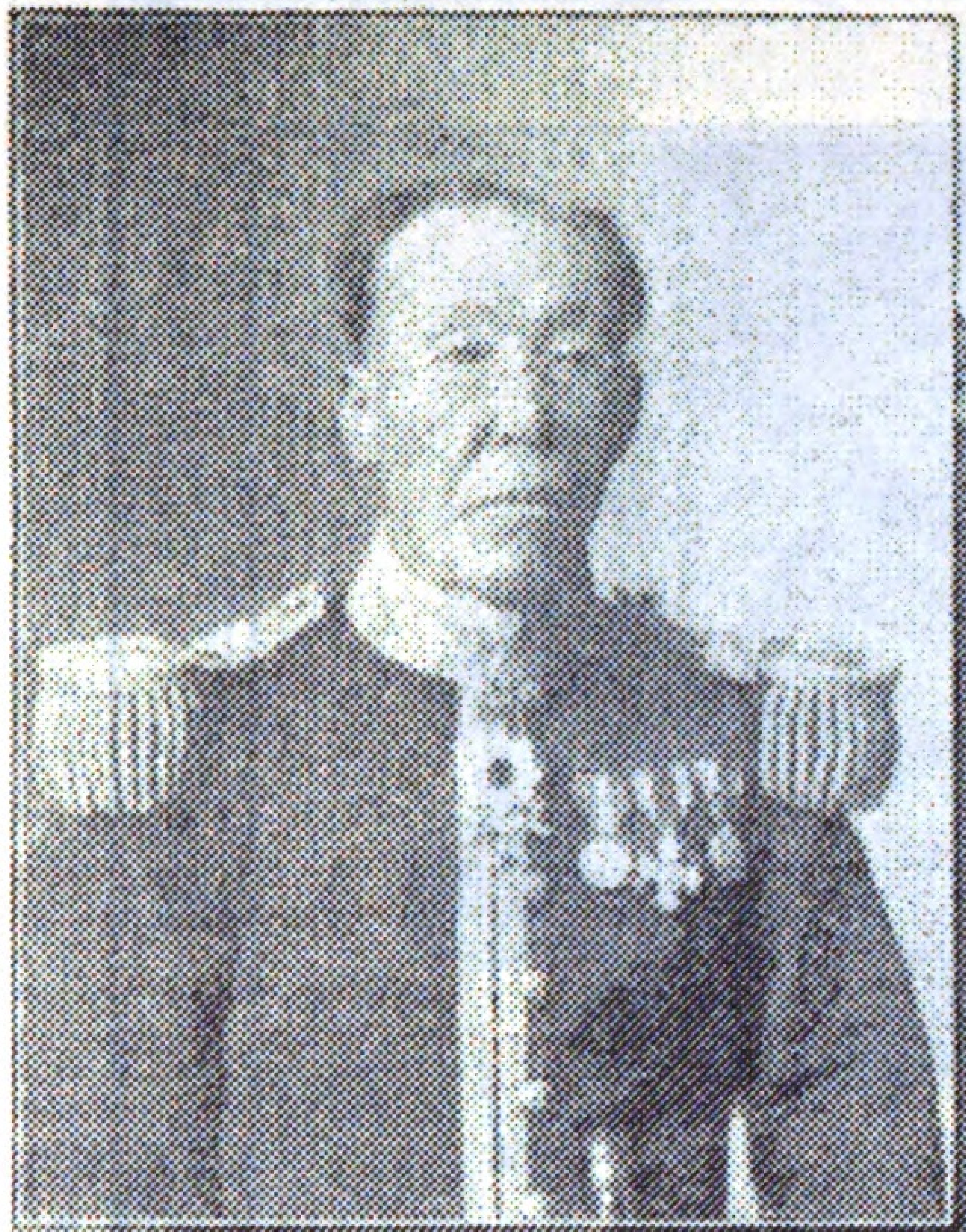
山本昇雲筆

名門の新家庭



奥平昌國氏　令夫人悦子君

加納子爵の家庭



加納久宜君



令息 久明君 久憲君

令嬢 八重子君 鐵子君

令嬢 治子君 夏子君

小澤男爵の家庭



小澤武雄男　令夫人粂子君　令嗣定雄君　令孃綾子君

教育家の二家庭



鈴木米治郎氏令夫人　忍子君
令息　一也君
令孃　綠子君　稻子君



吉光寺醫學士
令夫人　わご子君

第五回内國勸業博覽會賞牌及褒狀受領





登録商標

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ザワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい



●壽美禮おしろい●

ねり製 定價(大壜 二十錢 / 小壜 十二錢)



錫栓附乳白硝子壜入

ヴワイオレツト水製

水製 定價(大壜 二十五錢 / 中壜 十五錢 / 小壜 十錢)

すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素新成積液體等を以て配劑しあるを以て肌を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌へを清々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨て衞生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ、流行せり

● 西洋洗滌劑 壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩蝶番ひ罐詰　大袋入二錢
八錢　別製罐入五十錢　袋入壹錢

◎弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞贊する香料及弊舗新製の原料を用ひて製せしものなれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美くしくなす

◎常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生せず又中ふりハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

◎使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登録商標
西洋色白くなる
あらひ粉
SUMFRE
Washing Powder

壽美禮
あらひ粉

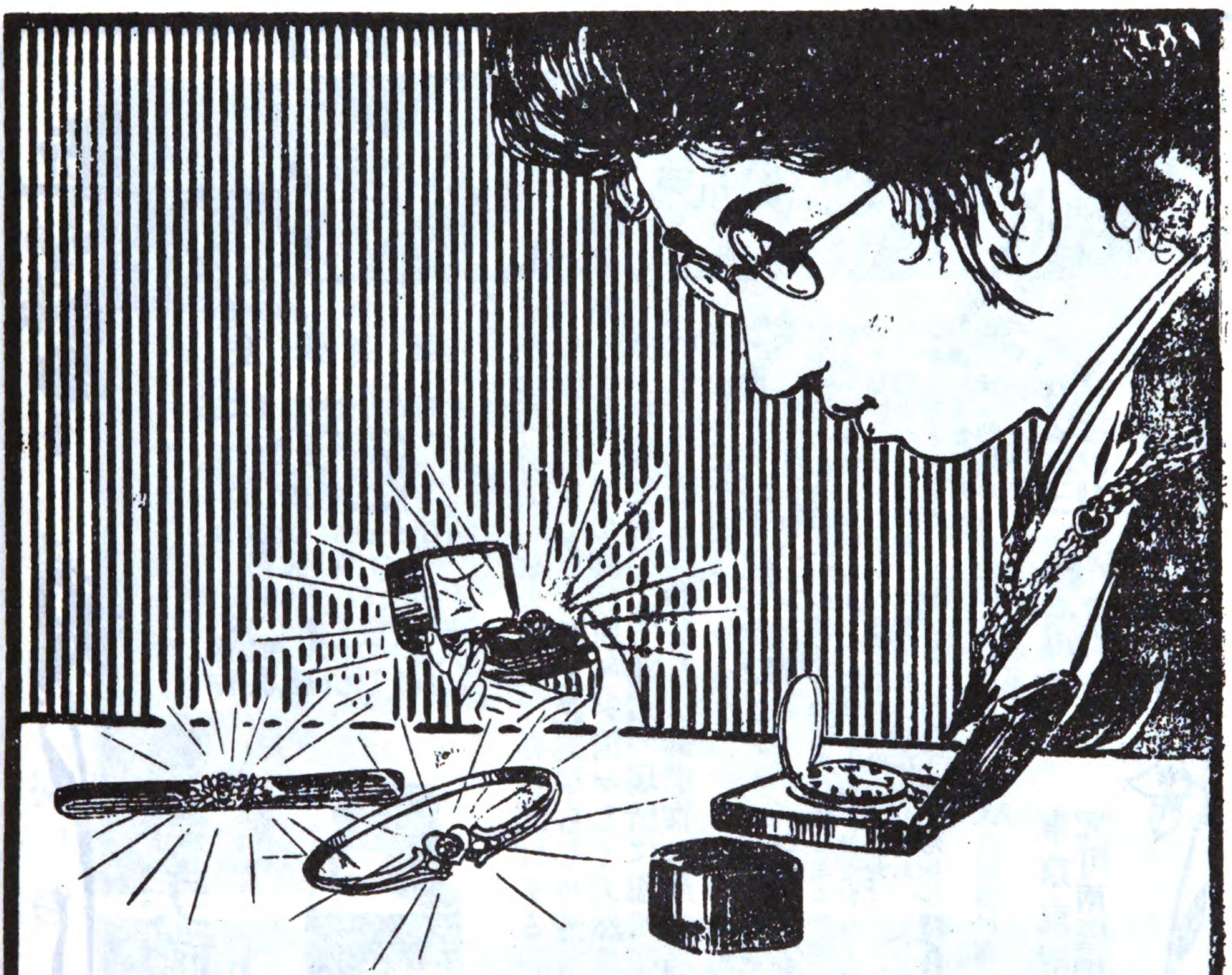


壽美禮堂謹製

製造本舗

東京東兩國
元町兩國橋際

販賣所ハ全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場ニ有リ



獨逸の婦人風俗







溪水氏寄

毛髪の美！美人の一大要素はペトロール、ハーンによつて容ち作くらる本品の効能は毛髪の肥料となり色澤を益々濃厚美ならしめ毛穴の掃除をなし脱毛を治し新に毛を生ず

ペトロール、ハーン美髪毛生液は佛國巴里の婦人間に多大の歡迎を受けつゝあり。。。。。。左の記事を見。。。られよ



ペトロール、ハーンは佛國巴里市ビベール會社の製品にして新に弊店之れを直輸入販賣す希ば多少の御注文あらむ事を

代金 大 弐圓
小 壹圓五十錢

本年二月八日**二六新聞家庭のページ**巴里婦人の秘密箱M婦人の美容術の記事中に曰く毛生薬として濃厚芫菁チンキを用ゐるは効能があるけれども毒薬であるから取扱に注意しなゐと飛だ目にあふ、又稀薄しては効能がなゐ、巴里婦人の普通に買つて用ゐる毛生液はエキセルシロル及び**ペトロール、ハーン**等であると如何に本品の佛國巴里婦人に愛用せられつゝあるかを此の記事について識られたし、

東京市京橋區
尾張町二ノ二五
萬治貿易商會販賣部
めでた屋
電話新四三三五番

新案
特許

最新式衛生米磨器



◉此の米磨器は實用と堅固とを主としたる金屬製にして幾年使用するも破損致しません使用法は誠に輕便にして米は決してくだける恐れはありません

◉上の木製把手を廻せば手を濡さずしてお米が磨げます

◉針金の處を押せば磨ぎたる水は米の中にある砂と埃と共に自由に流れ去り別に打揚げ笊もまたバケツなどもいりません

◉此の器を使用せらるゝ婦人はひゞあかぎれのきれる氣遣はありません實に衛生に適ひ極めて便利重寶なる臺所道具です

◉たがのかけかへ入費がいりませぬおけをおもとめになるより安き代價にて此便利のものがかへます

東京市京橋區月島西仲通十丁目十一番地
十二丁目一地地

米磨器製造販賣所

（電話浪花三九一九番）

（定價）

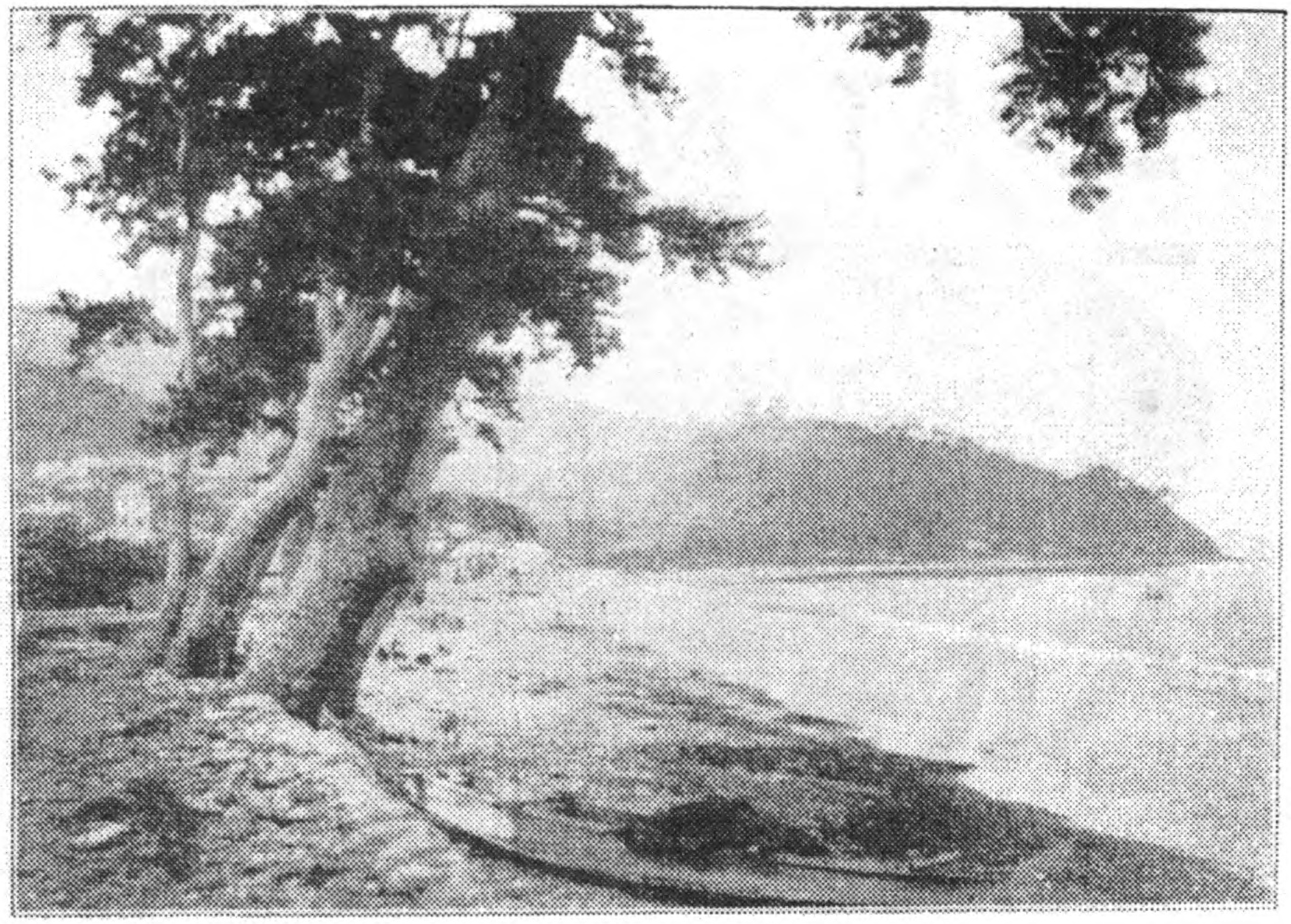
▲一升器	八十五錢
▲二升器	一圓十錢
▲三升器	一圓卅五錢
▲四升器	一圓八十錢
▲五升器	二圓四十錢

◉市内は御報次第無料持參

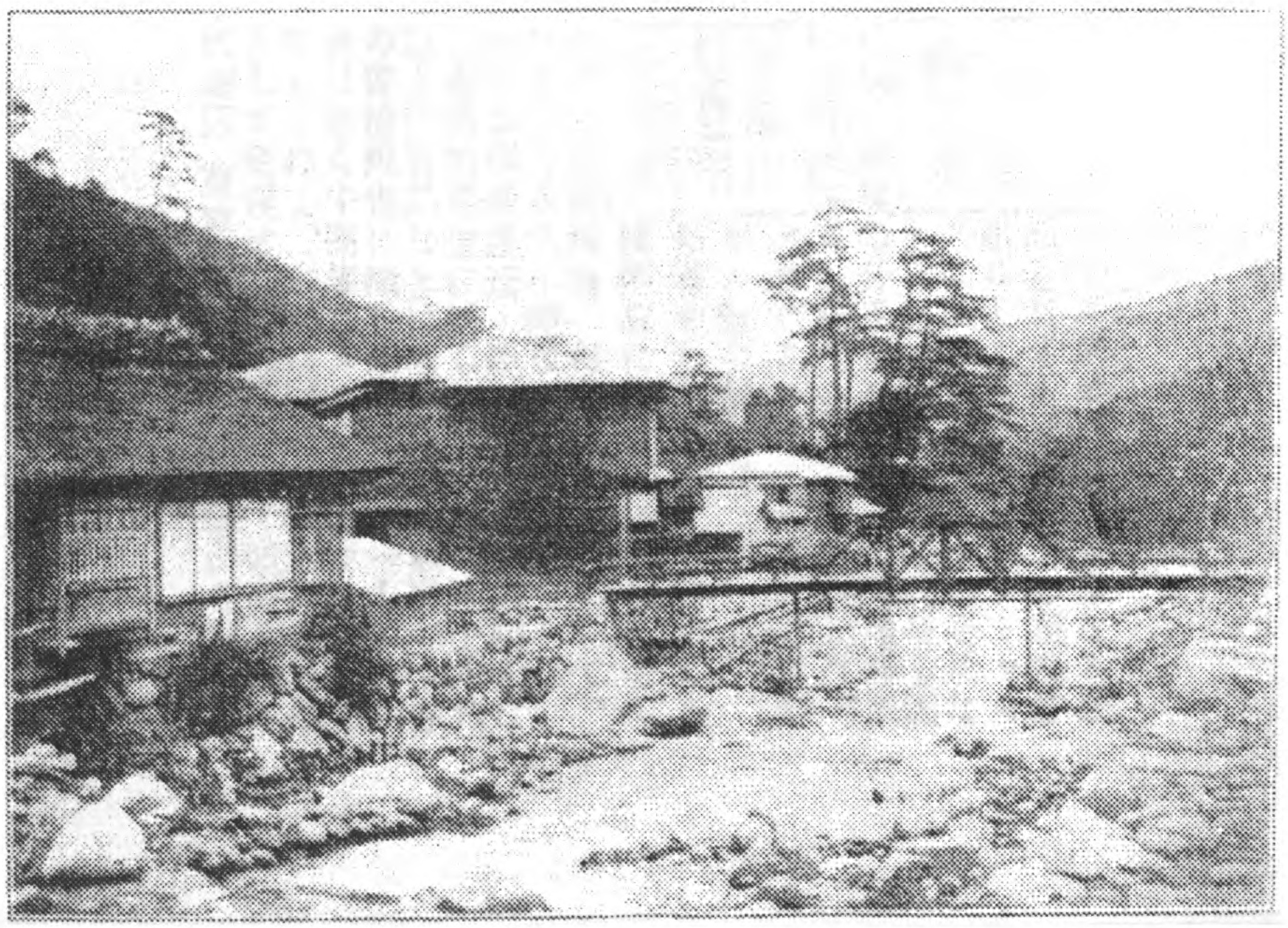
◉市外は荷造運賃共廿五錢申受候

◉特約販賣御望の方は御申越次第御相談可仕候

相州の名所



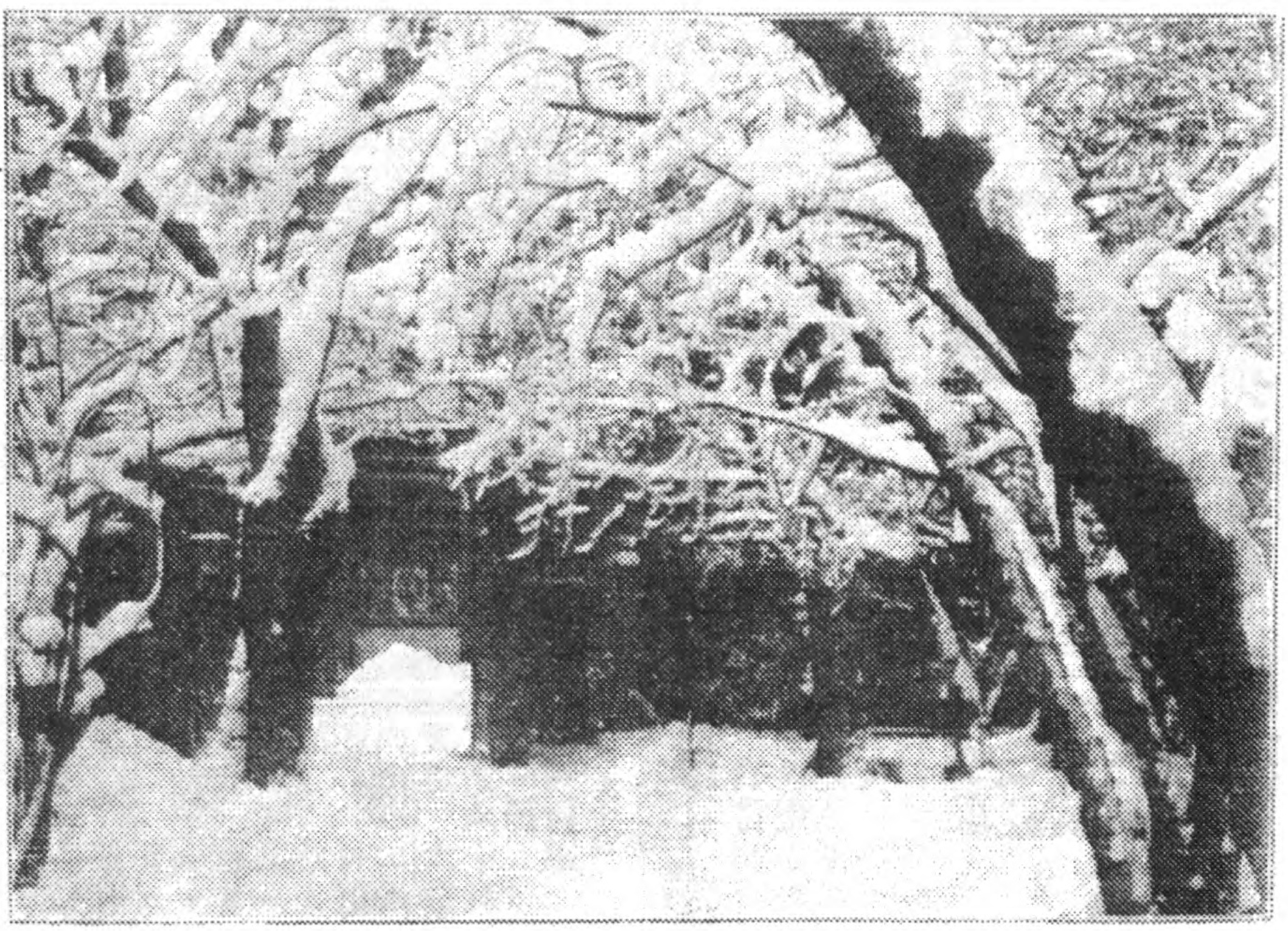
熱海の海岸



湯河原

雪中の梅





文づくゑ



井伊直方君撮影

自宅作文獨習良師友

懸賞 募集課題 ○○お伽噺○○新派和歌○○短篇小說○○日記文○○新體詩○○實用文○○俳句

（賞外）○○學校通信○文學顧問○○新論文○○舊派和歌○○美文○短文○葉書○○新謠○○滑稽談○○餘興

○○誌友思ひ〳〵の事柄

選評 巖谷小波、小栗風葉、横瀨夜雨、與謝野晶子、谷江風、中村文學士、佐々木信綱、內藤鳴雪、山中古洞、編輯局

▲詳細の事は**見本**（價拾錢送壹錢）に就て御覽下さい

本誌は卅八年一月創刊

投書は誰でもよい

日本唯一 女學雜誌

女子文壇

發行 每月一日 增刊四回

口繪 名畫光澤紙原色刷 寫眞肖像風景數葉

定價 壹册（百卅頁）金拾錢送料壹錢○半年分（八册）送共金八拾四錢○壹年分（十六册）同金壹圓六拾錢○郵劵代用壹割增

低廉無比 好評

● 四年第四號 三月一日發兌

● 四年第五號 四月一日發兌

臨時增刊 ● 文壇の花 新案大懸賞新作 四月十五日發行 紙數二百五十頁 定價金貳拾錢 郵稅二錢

▲注意＝一號より取揃あり最寄書店に品切の時は振替貯金拂込法により直接發行所へ御申込を乞ふ▼

東京 京橋區大鋸町十、十一番地（振替貯金口座第壹七貳九番）

女子文壇社發行

電話番號 本局六百七番

特約發賣所 ◉神田東京堂、上田屋●日本橋北隆館、至誠堂●京橋東海堂、良明堂 其他取次店は全國各雜誌書店

判じ繪



上の繪を判じ當てたる方に、左の方法により賞品を呈す。

〆切三月十五日

一等　勸業貯蓄債券

二等　繻子片側帶

三等　刺繍敎料書

右の外解當者三百人まで繪葉書一組を呈す

解答者中より抽籤にて等級を定む。抽籤は三月十七日午後一時本社編輯局にて行ふ、解答者は便宜立會はれたし

●大懸賞案募集

來る五月一日發行の本誌に於て、盛んなる賞品を懸け公平にして趣味ある方法によりて讀者諸君に頒たんとす、就ては讀者諸君より其懸賞案（官報字數あての如きものにて、目新しきもの）を募集す

（二）〆切三月二十日本誌編輯局着（先月分〆切のとを併せて四月號に披露すべし）

（三）賞品　懸賞案を採用したるものは、趣向の甲乙により一圓以上十圓迄の賞品を呈す

判じ繪	
住所	姓名

〽新橋と上野乃中の
蒸気車
せちからう
まわつて橋と二本し
遠けれは
振替貯金三百番
ちよくはよつて
なかよう戯
不琢楼



三戯
呆
〽衣庵



女鑑
第十八年第三號



妻は飽くまでも内寶たれ

伯爵 柳原義光

婦人の手藝のうちで最も大切なるものは裁縫である、昔から譬へ袴は職人の手にかけても、羽織やその他の衣服は、婦人自身で裁縫すべきものと定められ、襟垢のついた衣服、又は綻びのある衣服を良人に着するは、妻の最も耻としたものである、かばかり大切なる手藝を度外視したハイカラ敎育が目下盛んになつて、ヤレ英語で候のピヤノで候のヴァイオリンで候のと無暗にハイカラ風を振廻して、大切な裁縫は何うでもよろしいといふ塩梅で其の他の者は水彩畫が描けるとか、又油畫が描けるとかいふ事を誇つて、たま〳〵裁縫の少し位は知つて居ても、それを知るといふのをすら却て耻づる如き傾がある、實に本末を轉倒した甚しき

話で、嘆息の外は無いのである、

元來妻の事を內寶といひ、決して外寶とは云はぬ、演劇を見ても、世話女房はいつも針仕事をして居る壺坂のお里の如きも、『妻のお里はまめやかに夫の手助賃仕事』と、いつて針仕事に親んで居る、針仕事をして居るといふ事が大に見る人の情を引くのである、又おそめ久松の野崎村の段を見ると、お光が鏡に向つて化粧をするのに、眉毛を隱して、如何によき女房振なるかに、うき身をやつすあたり、娘氣のあどけない所に充分價値はあるが、まだ之は世話女房になる以前の話で、娘時代は容色に心を注ぐもよいけれど、世話女房となつては容色よりも心がけ即ち實質に重きを置かねばならぬ、

中流以上上流の婦人は、社交其の他に忙がしき境遇に立ち、裁縫を他人の手にまかす事もある、斯くてよしや自ら裁縫をせぬにしても、これを批評する丈の眼と、人に命令する丈の知識とを養ふて置かねばならぬ、又或程度までは自分が手を下さねばならぬ、

歌よみの女房などはもたぬもの亭主を尻にしきしまの道

といふ狂歌がある、得て歌などを詠みたがる女房は利口がつて亭主を尻に敷くものであるといふ事を諷したのである、さりながら婦人が歌を詠んではならぬといふのではない、否寧ろ高尙なる品性を養ふに於ては必要であるが、まづ其前に裁縫の如き、直に家政に大切なるものを修めて置かねばならぬと考へる、

然しながら婦人は內寶たるばかりでなく、偶には故奧村五百子女史の如き、外寶たるべき人も入用ではあるが、分量に於て決して多きを望まぬのである、五千人に一人か乃至一萬人に一人もあれば澤山である英國の婦人には女子に選擧權を與へよなどゝ騷いで、警察官の手を煩はした者が多くあり、日本でも治安警察法の一部を改正して女子に政事演說會を開く權及聽く權を與へよといふ者があつて、其案が昨年衆議

院は通過したが、貴族院で遂に否決したのである、こんな事が盛んに出られては隨分困つた話で、女は飽くまでも女らしくせねばならぬ、男子でも英雄豪傑など〻稱する人は、時代の要求に應じて勿論必要ではあるが、これとても其數に於て決して多きを望まない、寧ろ常識の發達した普通の國民の多いのが必要である、況んや婦人に於てをやである、

皮想の觀察よりして、西洋の婦人はお轉婆で、たゞはね返つて居ると思ふて居るものもあるが、決してさうではない、中以下の眞面目な婦人は外出中も往々手仕事をして、光陰を大切にして居るのである、

日露戰爭の結果赤十字の事業その他に盡力した婦人に、先頃勳章を賜つたが、我々の眼から見れば、婦人は先づ第一に家庭を整へて、内寶たる實をあぐることが仲々容易な仕事ではない、然るにそれ以上外寶たることも出來て、勳章を戴くに至つてはその敏腕誠に敬服の外なく、是等の婦人は男子の勳章を戴いたのよりは、内寶外寶を兼備したもの、即ち一家にも又國家にも大に盡したもので、最も賞讚に價すべき者と確信するのである、去ながら斯の如き婦人も亦た分量に於て決して多きを望まぬのである、何となれば内寶外寶たる事を兼ぬるのは仲々困難であると考へるからである、又裁縫も實用的の者と、美術的の者とがある、故に裁縫を學ぶにしても、美術的の者は分量に於て少くとも宜しいから、實用の程度にあるものを大に普及せしめたいのである、

往々裁縫は天禀によるもので、針の穴を見てもクシヤ〱するといふ人がある、裁縫をすればすぐ頭が痛くなるといふのがある、これ等は女子の資格に缺けた者で、斯る婦人こそます〱ハイカラ教育に遠かつて、つとめて裁縫に親むやうにしたいのである、少くも裁縫によつて妻は内寶たるべき實をあげたいのである、

生活難と職業の趣味

農學博士　横井時敬

今日の世の中は昔と異つて、大いに活計向が變つて來たから苦しまねばならぬので、その苦しむのも貧乏人が一番酷い、財產のある者も苦しむか知らないが、マアそれは勝手に苦しむが可い、けれども貧乏人の苦しみ方といふものは、迚も富豪家の想像だも及ばないのである、昔し我國の社會で何が一番苦しかつたかといふに、百姓位苦しいものは無かつたのであるが、今は左程でも無いやうである、

凡て我々人間が一たび此社會に出た以上は、先づ第一の問題が何んであるかといふに、極々飾り氣のない剝出した咄が

御飯を食べる

といふ事が眞先である、隨分世間では彼れの此れのと種々なことを云ひますが、約まる所はパンの問題

が根本である、故に其麵麭を求むるには、商人になつたものであらうが、又は農業に從事したものであらうか、若くは工匠になつたものであらうかといふやうに種々苦心するのであるが、是は婦人も同樣であるけれども、男子は殊に此方面に對して非常なものである、古へより四百四病の病氣よりも

貧ほど辛いものはない

といふが如く、貧乏で金のないのは首の無いよりも辛いなど丶云ひますが、首が無ければ金の必要も無い筈ですが、是は其辛い度合を克く言ひ表はしたものと思ふ、昔は遊人など丶云つて、一種不思議な人間があつて、今でも幾分その面影を止めて居るやうだが、表面それでは濟まないから、皆一定の業名を持つて居る、けれども昔の者は其名の如く、實際懐手で遊んで喰つて居た人間があつたのである、それも其當時のやうな悠長な時代には其でも宜かつたのであるが、最早今日のやうに

どなつては、何うして〱其では行かん、若しも遊んで怠けて居ると、所謂頷が乾上るのである、

ソコデ私が熟々考ふるに、世の中が文明に進む、その文明といふ事は一方から云へば非常に結構な事であるが、偖又一方から云ふと

世智辛い世の中

文明は人を苦しむる

ものであると言ふことが出來やうと思ふ、稼ぐに追付く貧乏なしとか申して、從來は兎に角稼ぎさへすれば宜いといふのであつた、けれども文明の今日では、只働くといふだけでは不可ない、何せ不可ないかといふに、最早今日では、我も人も一樣に働くので、相互の間に競爭といふものが起る、即ち競爭の結果、優れたる者は勝ち劣れる者は敗けるといふ事になる、であるからして、力の强い者はズン〱上へ向て行くけれども、力の弱い者は始終失意の地に呻吟して居らねばならぬといふ風になる、否、現に社會は其狀態を實現して居る、ソコデ貧富の度が愈愈懸隔して來るのであるが、是は單に上層と下層とのみの話ではない、其間に位する所の中層社會などでは殊に甚しいのである、けれども一般世間では左程とも感じないやうで、ヤレ何の慈善彼の慈善といふて金品を義捐せらるゝが、その金品は何處へ行くやといふに、何處へも行かない、みんな下層へ落て行くのである、マサカニ中層へは來ない、上層の者は固より其だけの實力があるから宜いけれども、中層の者は左程でも無いに、始終是がお附合をさせられるのであるから却々苦しいのである、であるから今日以後は、優者は愈々上の方に伸び劣者は益々下の方に沈んで、上下の懸隔は日一日と甚しくなつて來つゝあるのである、

是まで世の中の人の頭には、百姓は可愛相な者であるといふ感念が浸み込んで居るのである、歷史などを繙いても、時の天皇は民の疾苦を思し召されて、寒夜に御衣を一枚減せられたといふ事も書いてある

それらこれらよりして、百姓といふ者は苦しい者であるといふ事が頭の底に殘つて居る、今日小學校等の讀本の中にも間々散見して居る、先年來それらの讀本を持つて來て試てくれといふので、屢々檢て違つた事もあるが、それらは餘りに

百姓を侮辱する

のであるから注意を促がした事もある、成程百姓は苦しい職業に相違ない、けれども此の世の中に苦しいことは單に農業のみではない、何れの職業でも苦しく無いものは一つも無い、殊に子女を有つて、その子女のために脛を嚙らる丶親は苦しい、その苦しいといふ中にも、女子を有つた親は一層苦しいのである、同じ自分の小供であるから、別に分け隔てをするのでは無いが、男の子よりは女子の方が殊に苦を感ずる、殊に我々のやうな月給取りと稱する高等貧民は、ヤレ髮飾りの、ヤレ帶の着物と强請まれるので、其所らへ出る時に人力車どころでは無い、家では火の車が廻つて居るのである、或方面から見ると敎師とか又は官吏とかいふやうな月給取は、非常に樂さうに思はる丶のであるが、實はそれこれの爲に時々刻々生命を短かくするのである、私も不幸にして武士の家に生れ、下手に學問など爲せられた爲に、今では大いに後悔して居ますが、何うか今度の世には下層の身分に生れて來たいと思つて居ます、ツイ此頃の事ですが、少し取急ぐ要事のために途中で車に乘り、ゆく〳〵咄をして見ますと、其車夫も腹からの貧者ではなく、昔時は相應に暮したものであるが、或事業に失敗の結果、とう〳〵車夫と成り下つたが、サテその車夫に落るまでは、色々と分別に迷つたけれども、一たび決心して車夫となつて見れば、結句この方が安心で、此頃は客の無いのが一番苦しい、といふものは、何も金錢が取れないといふよりは、客のある時には東西南北と驅けまはつて來るから、家に歸つてから夕飯を美く喰べられますが、客の無い時には其樂みがありませんと答へたの

であつた、ソコデ私も成程と大に感服した、農家の事に就ては、詩人などが種々と農業界の事を歌つたり、又は彼の田植の時に、その苦しいと謂はるゝ仕事をしに行くのに、赤い襷や白地の手拭などで飾つたり、或は褄折笠に天鵞絨の紐を附けたりして出るものだから、是まだ種々に形容するが此の田植といふのは農家の最も繁忙な時なので、縦ひ病が起つても、田植が濟むまで待てと云つても待ちはしないが、それ位忙しい時であるから、却々詩人の言ふやうに洒落てなどは居られないのである、さうかと



云つて百姓は、夏の炎天にも冬の酷寒にも、毎時も苦しみ續けて居るやうに言ふものも、是は何れも極端な説である、

成程前に云へる如く、農業は苦しいに相違ないが、是を今日以後の社會の事に比して、より以上苦しいかと云ふに、以後といふまでもなく、是を彼の電話局の交換手に比べて見るに、最も一人前の受持が何本であるかは知らないが、朝から晩まで、右からも左りからもモシ〳〵ガチャ〳〵と言はれて五月蠅ものだから、或者は當分新橋方向はお咄し中でありますと答

へたといふ滑稽談もある位で、兎に角それが爲に何れも神經衰弱を發して、永く勤める者は無いとの事で、その代りに入つた者も矢張同様であるといふ事を聞きましたが、之を農家の婦人に比べたならば何うでせう、遙に農家の婦人の方が樂であるに相違ない、是まで農業に從事した爲に神經衰弱を發した婦人があるといふ事は聞かない、又かの機織工場の工女は如何でせう、朝は五時乃至六時に起され、夜は大抵十時といふのが定りである、けれども多くは十二時乃至一時頃に至りて漸く寢に就かせらるゝ、是だけでも普通の人の却々堪へ得られないのであるにも拘はらず、その食物の如きも、殆んど囚人同様な米が四分に麥が六分、謂ゆる四分六の飯に、副食と云つたら、一口で口の曲るやうな鹽辛い澤庵漬なとばかりを喰はせ、剰へ時々新聞紙上に出るやうな虐待をさるゝのである、又彼の製絲工場の工女は、概ね目を煩ふといふ事である、是等に比較して見れば、農家の婦女子は樂なものである、未だ農業の爲に目を患ひたとか、又は營養不良の爲に病氣に罹つたといふやうな事は聞き及ばない、して見れば農家の婦女子は幸福であると云ふ事が出來やうと思ふ、抑も生活狀態から云へば

田舎よりは都會が苦しい

のである、一體頭を遣ふ仕事は高尚であるなどゝいふが、前陳の如く、月給取などゝいふものは高等貧民級に位するもので、決して羨むべきものでは無い、元來職に賤業なしといふが如く、是が高尚な仕事であるとか、彼れは卑しむべき劣等の業であるとかいふやうな區別のあるものでは無い、已が職業が苦である樂であるといふも、畢竟程度問題であるものの、農業といふものは世間で想ふやうに劣等で辛酸なるものでは無い、而して麵麭を得るには最も安全なる方法である、

況して人間最終の樂しみは何であるかといふに、

無病息災と子孫繁榮

どである、實に健康ほど吾人に取つて大切なるものは無い、苟も不健康であつたならば、如何に山海の珍味を前に聯ねられても、決して美いものではない、縦し人貧乏でも、身體さへ健康であつて、働てから物を食べれば、一物として不美ものは無いのである、幾ら洋食が美いの、八百善の料理に越すものは無いのと云つて見た所が、始終三度々々之を食べて居れば、決して美いものではない、私なども食後の菓物が美いなど丶ハイカラがつて食べますが、近來は決して美いものではない、不美ものであると思ふ、成程百姓といふものは、又八百善の料理を頂くでも無ければ、滅多に洋食を喰べるでも無い、ツマリ不美ものを喰つて居るに相違ない、けれども毎日朝から晩まで働いて

不美物を美く喰ふ

方法を知つて居るから、無病息災で子孫繁榮する、是位人間の最終の樂があるものでは無い、今判然と數字を示す譯に行かないが、統計に由つて見れば、

都會は生れる者が少なくして、死する者が多く、
田舍は生れる者が多くして、死する者が尠ない、

といふ事實を示して居るのである、チヨツト聞けば奇異の感が發るが、能く〳〵考へて見ると其に相違ない、といふは、都會の金持といふ者は、實に今日あつて明日無いもので、それも都會の好い時代のみである、英國の龍動邊では金持が三代と繼かぬといふ事である、我國の古諺にも

長者に二代なし

といふが如く、兎角長者の富限のといふ者は長持のしないもので、それも田舍よりは都會の長者に多い田舍の長者は比較的長く保つ、殊に田舍でも農家に舊家が多い、今日この東京でも、私が先年チヨツト調べて見た所に依ると、極古いといふ家で元祿時代位のもので、それも多くは無い、然るに某國の一小村では、五十八代續いたと云ふ家が二軒、十二代繼

いたといふ家が十軒以上もある、又肥後の某處には景行天皇以來今日に至るまで、決して他より男養子をしたとか、又は弟が兄の後を継だとかいふ事なしに、全く父より子と相續して來て居る家がある、實に珍らしい咄で、それは農家である、

兎角近頃身體でする仕事よりも精神的でする方が貴いなどゝいふ事を耳にするが、早い話が今此所で私が説話をするにも、口ばかりでは出來ない、又著述家が著作をするにも、手に筆を取らねばならぬ、その如く百姓が農事を爲るにも、只鍬を取る勞力一方のみでは出來ない、若しも放心して鍬を使へば、蔬菜の根を傷めるか、或は自分の足を切るやうな事が出來する、何事でも

精神と身體と相俟つて

行かなければ出來るものでは無い、殊に今日以後の仕事は最も精神と身體と相伴うて行かねばならぬのであるから。單に頭を使ふ仕事が貴いの、身體を勞

する仕事が卑しいのといふ論は、私が此所で

引分けの角力にする

積りである、

往昔野蠻時代に於ては、大率普通の人は戰爭に從事したので、經濟の事は自分より以下の者に司らしめたので、農も其等の關係より生じたものと考へる、併し一口に百姓といふけれども、却々百姓だつてさう造作なく出來るもので無い、嘗て某老農は、自分が親しく農業に從事したといふ事を誇らんが爲に、農事の話しの出る每に兩の掌を開いて、中の胼胝を見て呉と自慢をすると、傍らに在りし一人の老農は、まだ腰が曲つて居ないから眞物では無いと云つた話がある、左れば樂なものでは無いに相違はない、けれども今尙ほ士百姓の素町人のと、往昔野蠻時代の口調を借り來つて唱ふるのは無意味である、何せなれば、維新以來且らく舊に依つて士農工商などいふ名稱は存して居るものゝ、これは

只の告朔の餼羊

たるに過ぎないのであるから、今更に其様ものを擔ぎ廻つて、豪がるにも及ばなければ、また卑しめらるゝ所以も無い、全く今日では其間に貴賤の差別はないのである、唯賤めらるべき仕事といふのは、

道徳上より見たる仕事

のみで、敢て風教上に差支えのない限りは、政治家教育家、實業家といつても一味平等なるものである實業家といへば、此頃物の本に新戸渡博士が、車夫も亦實業家であると言はれたが、是は至極御同感である、固より精神でする事も將又身體で爲る事も、何等其間に隔てや分ちのあるものでは無い、

同じ勞力といふても、鎌倉邊の漁夫がする曳網とか、又は山形の最上川沿岸の船頭が引舟をするやうな仕事は、餘りに單調である、變化がない、

凡て仕事には趣味を要する

のであるが、機械的では趣味の起るものでは無い、殊に都會の仕事は日に増し分業が激しく行はれ來て爲に變化が尠ない、先頃某麥酒會社を縱覽すると、一方では頻りに罎を差上げては疵の有無を檢べて居るかと思ふと、他の一方では一本々々之に麥酒を詰て居る、その側には栓をして居る、また其向ふにはペーパを貼つて居る、併し何れも一生懸命であるが、少しも仕事に變化が無い、朝から晩まで毎日同じ事を機械的に繰返して居るのである、迚も私などには單調で遣り切れない、けれども其所の男工も女工も、麵麭の問題との關係で皆一生懸命で遣つて居る、それ故に終には身體を損傷する、のみならず爲に身心共に馬鹿になつて仕舞ふ、者さへもある、けれども農業は其等に比して如何といふに、迚も較へものになるものでは無い、その

變化は千態萬狀

で、殊に近年之に關する學問の開けたと共に、近い例

が土である、

此土が死んで居るとか又は生きて居るとか、その中には如何なる黴菌が居る、イヤ居ない、バクテリヤは幾ら居るとか居ないとか、實に其等の事を檢べるの興味は、擧げて數ふべからざる程である、之に加ふるに、是まで有來りの

植物を作り直す事

が出來るのである、尤も作り直すといつても、オイソレと云つて一朝一夕に出來るものではない、前年日本では無いが、西洋の或處では、彼の沙漠などに生て居る覇王樹に刺があるので、大いに旅行家等を苦しむるといふので、何うか此刺を取る工夫は無いものかといふ事よりして、遂に多年の考案で其刺を取去つた事がある、また

花の色を變へる事

も出來るので、是は私が前年歐羅巴で親しく實驗した事である、諸君も御承知の如く、薔薇には種々の色がありますが、いまた

青色の薔薇花

はない、ソコデ何うか靑色の薔薇花を造りたいと云ふので、現今其途の者が苦心して居るから、遠からず是も成効するであらうと考へて居る、是は未來に屬する事であるが、既に成効したもの丶一つ二つ尚ほ例を擧げて見れば、彼の動物の角の長いのは、兎角飼育上面白くないといふので、とう〳〵是も

短い角のものにする事

を成効した、又鷄の尾も、從來は其劍先が稍頭冠と三角形を爲して居たものであるが、是も其では宜くないといふので、數年の後遂に今日の如く尾骨と平行せしめ得るやうになつた、又彼の蠶の繭も、從來繭玉など丶稱して、中程の縊れたものであつたが、是も之では面白くない、支那繭のやうに縊れの無い方が宜いといふので、漸次改良を施して、今では立派に其の如く成功したのである、此くの如き事を擧

げ來れば、日も尙ほ足らぬのである、此く農業は變化わり趣味あるのである、

一體私の一番好きで、又一番嫌ひな者がある、それは何んであるかといふに人間である、先づ其嫌ひの方を舉げて行つたら、好きな方は自から分るであらうと思ふ、その嫌ひの點といふのは御世辭を言ふことである、チヨット餘所へ行つても、汚い顏をして居る小兒を見ても、マア御綺麗な坊チャンであるとか孃さんであるとか、又は大部疊が穢れて障子が破れて居ても、之を見て結構なお住居でなどいふのは御世辭である、この

御世辭なるものは虛言

である、この虛言を言ふ點が嫌ひである、之に反して植物は、いまだ曾て虛言を吐かない、春來れば花咲き、秋來れば實のる、茄子の蔓に瓜は生らないといふやうに、毫も吾人を欺かないのである、私も先年御殿町に聊かの農場を有つて居りましたが、有雜無雜の世間へ出て、皈つてから其植物を見ますと、實に其愉快は言ふに云はれないのである、或人がその當時、果物が生つたら嘸お樂しみであらうと言はれたが、最早生つてしまへば夫程ではありません、その生るまでが娛しみなのである、何ぜかといふに凡て世の中の事は、苦の伴はざる樂といふもの丶ある筈はないので、果樹を培養しても、此秋は如何なる果が生るであらう、彼の肥料を與へたから嘸善いものが生るであらう、イヤ彼方の果樹は、同じものでも肥料が違ふから如何なる物が生らうかと、それは〳〵種々なる氣遣がある、その氣遣ひがあればこそ樂があるのである、而して最早秋になれば、その手當々々に從つて、少しも虛僞なく、その果樹に適した肥料を適度に與へたものは十分に肥滿し、若しも不適當の肥料とか、又は手當の惡かつたものは、その實りが不十分で萎んで居るとか、但しは顆粒が小さいとか、ソレハ〳〵判然と吾人の面前に呈露し來つて毫も虛言は吐かぬのである、斯くの如く農業

は變化あり趣味あるにも係はらず、兎角世の中の人は封建時代の術思想に立籠られて居て、百姓は詰らないもの、苦しいもの、情けない者といふやうな考を持つて居るのは、大いに了見違の事であらうと思ふ、それといふも畢竟は眞に農業の趣味を解せぬからであらうと考へる、大部我田に水の事を饒舌ましたが、農業の事であれば水を引かなければ苗が枯れて仕舞うから、此くは水を引いたいであるが、兎角世間には喰はず嫌ひといふのがある、其と同じく百姓の肥料を扱つたり、又は骨の折れる所のみを見て居るから不可ないので、上來私の述べた所を翫味せられたならば、必ず趣味を解せらるゝ事であらうと考へる、

男女交際の兩面觀

鈴木古鶴

男女の關係などゝいふ事に就て、平素別に深き注意も拂つて居らないので、是と云つて纏つた考もないのでありますが、近數年來學者は言ふに及ばず、鳩が飛てば蠅も飛つとかいふやうに、隨分生噛りの半可通といふよりは、寧ろまだ自分の意志さへも十分に意識されない者までが、頻りに黃吻を叩いて、男女の交際は斯うあらねばならぬとか、または神聖なるものにして、當事者相互の外に與かり知るべきものでは無いとか、その他種々雜多の名論戯説も頭を擡げて居るやうに見受けらるゝが、今その孰れか是、孰れか非などゝ云ふ議論はお預りとして、之に關して聊か自分が觀察した事を御披露して、將來國民の妻たり母たるべき諸孃の參考に供して見やうと考へる、併し尙ほ斷つて措きますが、私の說は理論よりも實際を主とするの目的であるから、看客は之を一讀せられた後、静かに自己に反省せられて誤らぬやうに、豫め此點を注意して置く、

言ふまでも無く男女の交際といふ、その語の下には、直ちに戀愛といふ事を聯想せしむるもので、こ

の戀愛なるものが、人生に對して幾何の價値を有つて居るものであるか抔といふのは、所謂無粹の極である、寧ろ

價値の範圍を脱して必須

缺くべからざる人生の一要素となさねばならぬのである、何故なれば、我々は人生に於ける當然の責務として子孫を蕃殖せしめねばならぬので、その子孫を蕃殖せしむるには、

必ず男女異性の結合

を要するので、乃てその結合は子孫を蕃殖せしむるの道である、而して克くその異性なる男女を結合せしむるには

一に斯の戀愛

あるのみと謂はねばならぬ、今殊更に婚姻の前後を以て區別するまでも無く、必ずや男女相互の間に斯の神聖なる戀愛なるものが成立しない限りは、どうして圓滿に子孫蕃殖の道を講ずる事が出來ませうやそれは決して出來ません、古昔女護島の譚もありますが、まづ其はそれとして、今日我々が觀る普通世間の狀態は、正に此くの如くである、然るに斯く戀愛なる者は異性の兩者を結合する程の魔神力を有して居るので、その力の雄大强烈なるが爲に、輙もすれば其力に魅せられて、常軌を逸して意外の失敗を招く者が少なく無い、譬へば、千紫萬紅の繚亂たる花園に蹈迷ひて、何時か毒花に觸接するやうなものである、

我々人生の最も愉快に最も旺盛なる時代は青春である、而して戀愛の威力は殆んど人生の全部を支配して居るのであるから、前途多望なる青年子女は勿論、苟くも世の先覺者を以て任ずるの人士は、餘程この問題に對しては愼重の態度を執らねばならぬのである、而も自由結婚などいふ怪しき聲の聞ゆるのは何故であらうか、つら〳〵考へて見るに、戀愛といふものゝ內容は、之は二大別にする事が出來る、すなはち

肉體的戀愛と精神的戀愛

とである、而して方今普通世間に稱導せらるゝものの十中八九までは、概ね前者に歸するものゝやうである、手近い例が、彼の青年子女の間に持囃さるゝ所の小說なるものを見るに、その內容は殆んど全部を擧げて才子佳人を標榜して居ないものは無い、若も小說なるものが人生の縮寫であつて、最も能く人類の普通的希望を代表するものであると斷定する時は、我々人類は、まづ肉體的の美に向つて猛進するものであるといふ事を立證するのである、最も青年の男女が途上で相逢ふや、之を見るが如く或は見ざるが如くにして行過ぎ、直ちに頭を回らして之を顧み、落花流水の嬌態を示すものは、皆何れも楚々人を動かすべき佳人才子でない者は無い、我國の諺にも、色の白いのは七難蔽すとか、人間唯一の幸福は美貌に在りと云へる西諺を信ずる者の多き今日に於て、右樣の事は寔に止むを得ない狀態とは云ひながら、我等は自ら省みて赧然たらざるを得ないのである、一體肉體的すなはち形質の美醜を以て、直ちに戀愛の成否を定むるのは大早計の極といはねばならぬ、駿馬痴漢を載せて馳るの語あるにも拘はらず、直ちに形質に因つて爲さんとするものから、回すべからざるの失敗を多く招くのである、單に形質のみを賴りとする者は、恰も胡蝶が翅翼を飾りて配偶を求むるやうなもので、萬物の靈長たる人類が、彼等胡蝶の類に倣ふて得々たると云ふ事は、自ら其地位を卑ふするものと云はなければならぬのである、と云ふものは、單に形質のみに依つて戀愛の成立を希ふといふ事は、極言すれば動物性の本能を發揮したものと云はねばならぬからである、

青春は再び回らす

餘りに自己の容色を賴みて日を消す時は、昨の紅顏も、今は漸く白髮と變ずるの時が來るのである、苟もその時に爲つたならば、あらゆる美人の運命は果して如何に成り行くであらうか、假りに當初形質を以て合せたるものは、その美的が衰ふると共に、その價値もまた失はれて、即ち冷然として相離るゝに

至るであらう、もしも戀愛の眞意義が此くの如きものであるとすれば、子孫蕃殖の途もまた危險千萬のもので、頼みにならないのである、けれども眞誠なる戀愛は決して此くの如く力の薄弱なるものでは無い、成程美人は其美貌に高心自から許して居る間に、何時か双鬢に霜を戴きて遂には自家の損失を來す事があらうけれども、戀愛は永久的不變の性を帶びて居るものである、即ち俗諺に、お前百まで私しや九十九までといふやうに易らぬものであるから、決して一時的の肉體關係を以て去就を巽にするといふやうなものでは無い、若しも形貌の美醜または老若等に因つて取捨するのは、未だ神聖なる戀愛を解せない者と云はなければならぬ、否、それらは神聖なる戀愛を弄ぶもので、終生之が眞味を了得することは出來ないのである、併し此く云へばとて、吾人は絶對に肉體的戀愛を排斥する者では無い、而も後の精神的のものに比ぶれば、其間に聊かの逕庭なきを得ないのである、



抑も我々人類は、單に他の動物に於けるが如く、簡易なる情緒または意識を有するものに比するとき

は、より數等優れる所の情および意等を有するが故に、呼んで萬物の靈長と名くるが如く、高尙なる精神を宿せる肉體を有するなり、言を換ふれば、肉體は精神の入物として存在するに過ぎざるなり、是を以て、精神の喪失は即ち吾人の喪失であつて、肉體の如きは敢て與からぬのである、斯言は甚だ耳觸りのやうであるが、少しく虛心で考ふるときは、別に生理學や人體論の解說を待つまでも無く、頗る明白の事實である、まづ學問上の六ケしき議論などは且らく措置き、最も手近い所でお咄をすれば、よく世間の者の言ふ事で、蟲の好かぬといふ事がある、この蟲が好かぬといふ事は餘程面白い、といふものは、昔時我々の祖先は、すべて吾人が身體の內外に於ける萬般の事物に就て好惡の念の生ずるは、必ず自己の體中に宿する蟲等の發意に基けるものと測斷して居つたので、その語が慣ひ性となつて今日に至つたもので、最早今日では誰しも其樣な蟲の居る抔といふ事は信じはしないが、矢張時としては斯語が使用

せらるゝ、ソコデ彼も縹緻は別に何うといふ事も無く、また朝夕の働きも差して斯うといふ事は無い、けれども何となく蟲が好ない、と云ふ事の爲に破鏡の悲嘆を見るといふ事は決して尠からぬのである、

この蟲とは即ち精神

を指したもので、精神といふものは實に肉體以上に大なる威權を有つて居るといふ事は明らかなる事實である、

精神は斯く大威力を有すると同時に、元來その本體が無形であるから、從つて老衰といふものゝ爲に追窮せらるゝといふ心配が無い、その證據には何れの老人も、口を揃へて意氣猶は舊の如くであると云つて居るのでも分かる、して見れば、

精神的に結合した夫婦

は、如何に相互に靑春時代の容色が損じたとても、依然として其交情は蜜の如くで、嬉々として樂しみ雍々として歡ぶのみならず、或は子女の成長を待ち或は孫女の手を引きて春風裡に落花を逐ひなどしつ

ゝある、その緝睦和樂の狀は、到底畫にも描かれなければ、また詩にも歌にも文章にも述べ盡さるゝものでは無い、眞個に人生の意義は遺憾なく其所に發露せられ、且つ戀愛の果實は累々として其成熟を誇示せられつゝあるのである、これと言ふも畢竟は、神聖にして永久的なる精神戀愛の賜物であつて、迚も一時的形質選擇者の夢想だも及ぶ所のものでは無い、是の故に、後の妻たり母たるべき本誌の愛讀者たる諸孃は、一時の美的に眩惑せられないで、永久の實質を獲られん事を敢て奬むるのである、

女子の職業

文學博士　井上哲次郎

今後何ほ我國に於て女子の教育を進めねばならぬと云ふことは、是はモウ今日殊更に論ずるまでも無いことでありますが、此女子の爲を計りますると云ふと、總ての學問に於て、女子が力を用ゐて、さうして段々と自ら女子の地位を高めると云ふことは、是は一番良い方法でありまして、外から何れ程助けやうとしても、それだけでは決して充分では無いのであります、女子自ら奮つて女子の地位を高めるが爲に、教育を段々と進めて行かなければならぬのであります、それで是は

有らゆる方面に渉つて居る

ことに相違ありません、併しながら女子には自から適した事と、又左程適して居ない事とあるのは、是は何うも自然の結果でありまして、致し方が無い事であります、女子の段々と經驗を經たものに取りましては、教育事業であるとか、又慈善事業であるとか、さういふやうな事業は、隨分女子に適して居る事業であります、併しながら、又特に此年の若き女子に適した事があります、それは有らゆる學術といふよりは、矢張この

文學と美術の二つである

と私は信じて居ります、勿論女子にも例外がありまして、種々な學術を好む者もありませう、併しながら、概して云ひますと物理學であるとか、化學であるとか、又は數學であるとか、その他種々な自然科學に類したやうな事は、餘り女子には元來適して居らぬ、例外は勿論ありましても、女子の多數を考へて見ますると云ふと、さういふ方面に於て、女子が卓絶して來ると云ふやうな事は甚だ困難であります、それも或程度までは勿論出來ます、又一般の女子に必要であります、けれどもズッと專門的にさう云ふ學科を修めて進むといふ事は、決して

女子の爲には得策でない

唯學問を自然に好む女子に取つては、段々と專門的にさういふ學科を修める事も決して惡くはない、出來るだけ修めるが宜しうございます、けれども一般の女子にはさうでない、矢張文學と美術が、最も年の若き女子には適して居るのであります、但し文學と美術を修めるのにも、普通教育は是は何うしても

缺かされませぬので、普通教育を受けて居ないで、文學と美術だけに大變に能くやらうとしても、それは到底出來ぬことであります、併しながら、普通教育が備はつた以上は、多くの女子には文學と美術が大變に適當である、素より廣く美術といふ事を言ひますれば、文學も其中に這入つて居りますけれども、狹い意味に美術を解しますれば、

文學と美術と斯う二つに別れる

さうして文學と云ふ中にても、主に此詩であるとか歌であるとか小説であるとか、さういふものが女子には最も適切である、詩は其意味の廣いものでありまして、支那の詩といふ譯ではない、ポエトリーの意味であります、さうしますと云ふと、隨分此東西洋の歴史を考へましても、古來さういふ事に於ては女子は成功した場合が少ない、さうして小説のやうな美文に於ては、却々女子の成功した類は少なくないのであります、それは海外の例を引かないでも、日本の古代の有樣を考へても分りますので、日本の

美文は主として女子が開き始めたと云つても差支へない様に、日本の女子といふものは、美文の方に於ては成功した例が多い、それで明治になりましても、女子が比較的に成功しましたのは文學と美術であります、小說であるとか其他の美文に於ては、女子が段々頭角を現はして、世の中に名を揚げたものも隨分ある、今後ます〳〵此方面には女子が成功するに相違ありませぬ、併しながら、數學であるとか物理學とか、醫學であるとか、法學であるとか、乃至農學であるとか、さういふ側に於て女子の成功した例はない、素より之も古今東西の例を廣く考へますと云ふと、隨分例外が無い事はありますまいけれどもマアそれは普通の場合で無いのである、餘程少ない除外例と見なければならぬ、女子の多數に取つては、矢張この文學と美術が適當であります、併し小說のやうな事は、餘り普通の女子には勸める譯には行かぬ、小說を巧く書かうといふには、矢張小說的の生活を送つたもので無ければならぬ、それは女子には勿論勸められぬ、唯種々な境遇からして文筆が達者で、段々と小說の方に身を寄せ一命を捧げるといふやうな境遇にある者は、是は別であります、それはマア例外と見なければなりませぬ、

女子の最も成功し易いのは美術

であります、音樂であるとか、繪畫であるとか、刺繍であるとか、造花であるとか、總ての美術であります、但しこの建築園藝は是は別としませう、その他の多くの美術に於ては女子に適した事が多い、それと言ひますのは、元來この女子といふが、モウ總て社會の裝飾品のやうな位置を占めて居りますので人間社會に於ては、女子が自ら飾になつて居る、矢張この自然界に、花だの鳥だのといふやうな美しいものがあつて、自然界を飾つて居るやうに、人間社會に於ては

女子が自然の飾となつて居る

のであります、それで女子は其自らを裝飾する、男子は左程裝飾しない、此自らの飾りといふことは、

餘り構はないけれども、女子はモウ隨分幼少な時からして自分の飾りに大變意を用ゐる、着物を飾り、頭髮を飾り、種々なこの身體に附隨して居るものに意を用ゐて大變にその優美な考を有つて居るものである、飾らぬでは居られぬのであります、男子といへども、隨分若い人は、所謂世の中で高襟などいふ工合に飾る人もあります、襟を飾り、コスメチックで頭髮を飾つて匂はせる、香水を振りかける、種々な事はそれはあります、けれどもさういふのは多數では無い、多數の人は決してさういふ事はしてをらぬ、マア男子といふものは、普通にさういふ事は構はず、マア當り前に着物を着飾つて居れば、それで澤山といふやうな有樣である、素より昔の書生のやうな亂暴な有樣をして居るといふ事は、今日は一般に採らぬ所であります、破れ袴を穿いて、頭髮をバラ〱に爲して、それで以て大變に豪いやうに思つて居つた書生が隨分ある、今日でも多少殘つて居りますが、それはマア文明國に取つては善い徵候では無い、けれどもマア多くの男子といふものは、不潔で無いやうにして、一ト通り身を淸潔にして居れば、先づそれで足れりといふ考で、さう身の飾りに夥しく思慮を費すなどゝいふ事は普通には無い事であります、けれども女子にはそれが必要である、女子に取りては決して其を度外視してはならぬ、女子は矢張身を飾らなければならぬ、素より奢りといつて奢侈は不可ませぬ、或程度から以上の奢侈は不可ぬ、身分不相應に身を飾ると云ふやうな事は宜しくない、けれども、その或程度の中に於て、飾られるだけ飾るといふことは、是は女子の本分であります、女子は自然にさういふ其社會の裝飾品となつて居る有樣であります、自らがモウ殆んど此美術品の如きものであります、それで美術に對しては、男子よりはモット緣故が多いのであります、自然の結果としてさういふ事に爲つて居る、それに其男子は女子よりは他の方面に力を用うる事が多い、その世間の事業であるとか、又學問であるとか云ふやうな事に大變に力を

用うる、所が女子は、、さういふ方面よりは、まだ他の方面に種々本分となる所のものがありまして、、、さうして大變に此感情が鋭敏である、女子は男子に比べましたならば感情が一層鋭敏の方で、却々其男子よりも鋭く感ずる性質のものであります、そこで此美術を見たり聞いたり爲るに付けても、隨分深い感じの起る事であらうと思ふ、それで是までの女子の歷史を考へて見ますると云ふと、美術に於ては隨分成功した場合がある、繪畫などに於きましても、明治になつて隨分女子の中からして有名な人が出て居ることは事實であります、音樂におきましても同樣でありまして、モウ今日までも隨分有名な音樂師が出てをる、他の學術技藝に比べては、ナカ〳〵女子が此方面に成功して居るといふ事は、モウ今日までゞ十分徵候が現はれて居ります、今後は益々これが盛んになるに相違ない、それで女子の爲を計りますれば、勿論之は女子に限つた事ではありませぬ、けれども力の及ぶ限り此美術に意を寄せて、さうして此平生美術を見る機會があればです——見たり聞いたりする機會があれば、その機會を失はないやうにして、專ら美術的の觀念を養成する事が必要である、或は音樂を聽く場合があれば成るべく音樂を聽き、また繪畫の展覽會があれば行つて見るといふ風に、、、總てさういふ美的の觀念を養ふ事が出來る機會を失はないやうにして、、、さうして此有らゆる方面からして、美的の觀念を集め、、、さうして自分の頭の中にそれを薀蓄して置きますれば、それが此美術上の技能を現はすに當つて、悉く意外の成功を奏するやうな事になつて來るのであります、それで美術の美といふものは、段々と發達して來るものでありまして、次第に此心の中にある所の美的觀念を、美術に依つて段々現はして行くのであります、その心の中にある美的觀念といふものは、有らゆる此世の中で得られるだけの美術上の經驗、美的の經驗を得て來る、それから自然界の事といふものを矢張失はぬやうに景色の佳い所などを見たり、また美しき花を見たり

するやうな事は、何うしても必要であります、それが此頭腦に集つて、さうして此美術の基を成すのであります、どうしても先づ自分の頭腦の中に美的の觀念が十分蘊蓄されて居らなければならぬのであります、それがマア平素この美術を修める人に必要なる事でありますが、但し此美術を修める女子に對しまして、少しく其注意を促がして置きたい事があります、

それは此女子といふ者は、どうしても感情が鋭敏なものであります所からして、相互ひの間に餘程この嫉妬心といふものが深い、それで他人の技倆を妬む心が起り易い、是も素より女子ばかり皆さういふ感情があるとは云へませぬ、けれども併し概して云ひましたならば、男子よりは強いだらうと思ふ、却〻他人の伎倆の長じて居る所を妬む心ですな――嫉妬する心が却〻強い、さうしますと云ふと、どうしても相互ひに此技倆の進歩を害するといふやうな虞れがある、彼の人は却〻上手であるといふ事を見て

ですな、自分もそれでは益〻勉強して上手にならうといふ考を起さなければならぬ、けれども其考を起す前に、他の人が上手であるといふと、何となく妬ましくなり、それを何うかして妨げたい、密したいといふやうな考が、隨分女子には起り易い、それは感情の大變強い所から起る、素より是は男子の間にもある、男子といへども嫉妬心の無い事はない、却〻ありますが、概して言ひましたならば、女子にそれが起り易い、さうして美術家といふものには、意外、是が多い、男子といへども隨分多い、決して女子にそれが無いといふ事は無い、隨分強からうと思ふ、それで女子は此美術を修むるに當つては、右様のコセ〳〵したやうな、その嫉妬心といふやうなものを悉く無くして了はなければ不可ぬ、さうして相互ひに

唯技倆を勵まなければならぬ

他の人が上手ならば、自分も勉強して上手にならうといふ考になるより外は無い、どうも此感情が此美

術を修める女子の間に蟠まつて居つて、ナカ〳〵それが胸にコセ〳〵して妨を爲して居るのでありますどうも是は一寸外面からは見えない事であります、女子は比較的男子よりも秘密が多く、物を秘す風がある、さうして外面を飾る、どうしても其眞面目を現はさないやうに非常に秘すですな、それで總ての嫉妬心や何や彼も胸の中に秘されて居る、さうして胸の中には折々それが邪魔をなして、他人の技倆の長じて居るのを害しやうと云ふやうな事が起る、それは悉く一掃しなければならぬ、それは餘程六ケしい



ではありませうけれども、成るべくさういふ感情の害を爲さぬ様にして牽ゐて行かれたならば、此美術の進歩を益々助けるであらう、それから最後に御注意を引きたい事は、品行の事であります、固より此品行の事は一般の者が大いに省みなければならぬ事であります、けれども漸く今日は此女子の教育の進みつゝある場合であります、女子の教育は是から大變に盛んになつて來なければならぬ、その漸く端緒が

此處にマア開けて居る位の所であります、それに新聞などで、此折々女學生の品行を暴露して大變に惡く書立てる、新聞で惡く書き立てますのは、必ずしも一概に之を憂ふることもない、多くの女學生の事でありますから、其中にはドレだけかの屑もある事でありませう夫で新聞でもつて種々女生の品行を摘發して攻擊を、しまする場合には、

社會の要求が高くなつて居るといふ證據であります、社會の女子教育に對する要求が一層高くなつて、一人といへども不品行の者の無いやうにならむ事を希望するの餘り、この少數の女子を犠牲と爲して、他の多數の生徒の戒めと爲しつゝあるのであらうと思ふ、

併し新聞にしましても、只面白半分に攻擊して居るといふ事でありましたならば、それは新聞の不德である、大いに其新聞の不德を鳴らさなければ爲りませぬ、併し多くの新聞の事であつて中には不德なものもありませうが、必ずしも皆さういふ動機から起つて居る事ではあるまいと思ふ、矢張多くの女子に警戒を與へやうといふ事からして、さういふ事を憚からずして書立てる事であらうと思ふ、詰り女子教育に對して、一層高い希望を有つて居る結果であらうと私は信じて居ります、それ故に女子たる者が、此美術を修むると同時に、品行を戒めて行かなければならぬ事は、今更めて言ふまでゝも無い事であります、さうでありますが、此美術といふ事は、どうしても美的觀念の一方に驅られる虞れがある、美の觀念の一方に向つて進み居ると、自然他の側は忘れられると云ふやうな虞れがあるのであります、固より美術を專ら修める以上は、その美的觀念に驅られないと云ふ程の不熱心であつたならば、美術は左程に進んで來ないものであります、古い諺にも、二兎を逐ふものは一兎を得ずとか申す如く、二疋の兎を一度に獲やうとしても、それは迚も出來得るものではありません、二疋どころか却つて一疋さへも獲ることは出來ないのであります、よく世間の人が、二

足の草鞋は穿けないと申しますが、是は實に金言であります、小說も上手に書きたい、造花も巧みに作りたい、刺繡も名人になりたい、裁縫の技にも長けたいとは誰しも望む所でありませうけれども、固より人間の腦力には限りといふものがあるのであるから、さう何も彼も名人上手に爲るといふ事は、望むべくして得べからざる事であるから、前にも云へるが如く、女子の天性を自覺して、猥りに多くを望まずして、各自の好む所のものを撰んで、之に向つて猛進するならば、必ずや其成功は疑ないのであります、

筆のしづく

侯爵夫人　鍋島榮子

瓦斯

ともし火となすのみならで時の間に
　にたきせんにもやすきこの瓦斯
大君のみそなはしつるこの瓦斯に
　同じにものぞほまれなりける

香川景樹翁の歌道百年忌によめる

秋神祇

敷島のみちもすゝみてまつらるゝ
　神のこゝろもうれしかるらん
神がきに引くしめ繩も見ゆるまで
　てりわたりたる秋の夜の月

廢兵院

戰のにはゝわすれしつゝもちし
　手にやさしくも花をつくれと
武士のみちをつくして世の中の
　まじはり絶えし人あはれなり

歌道奬勵會幹事大町君の撰歌に
　なられしを悅びて

老松の杖のちからに千よろづの
　わが友がきのほまれましたり

一枝梅

わたらけき心ぞ見ゆるおくられし
　うめのはつ花ひと枝なれども

春の歌

菅恵子

若草

見渡せばひとり緑に萌出づる
　野路のわか草春めきにけり

春雨のふる屋の軒ゆ見渡せば
　みどりの小草萌え出でにけり

かすみたつわしたの原のわか草は
　なべてみどりの色めきにけり

土筆

春されはやけ野のちばら打つれて
　つくしをあさる里のをとめ子

乙女子が野べのすさびにつみためし
　心つくしを母にさゝけむ

雪はまだ消えのこりたる道のべに
　いつかつくしの生ひいでにける

初午

はつ午の祭にぎはし稲荷山
　笛のしらべの遠くひゞきて

まをでつるいなりの山の杉の葉を
　何にかすらんかざしてぞゆく

春雨

朝ほらけ花手折らんと立よれば
　しづくも匂ふ庭の春雨

小夜ふけて寐ざめさびしき春雨の
　ふるやの軒のいと水のおと

春雨の見えず見ずみ降いでゝ
　野邊の千草も色めきにけり

野も山もかすむと見せて夕まぐれ
　いつかそぼふる軒の春さめ

春風

何となく心のどかにうきたつや
　かすみ吹とく春の朝かせ

春月

おぼろなる影は花かと思ふまで
　霞ににほふはるの夜の月

胃腸の養生法（承前）

醫學博士　長與稱吉

大根の効用

大根の澱粉及肉消化に及ぼす力

根菜類の中で最も多く用ひられるのは、大根である。而して其の用ひ方も頗る多い。然し玆では其の用法を説くのでなく、大根の効用をお話しやうと思ふのである。効用とは消化に及ぼす作用、即ち大根が食物の消化に尠なからぬ利益を與へることをいふのである。先づこれを二つに分けて述べる

(一)澱粉質に及ぼす作用。　大根は澱粉質の消化を助ける。即ち大根の中には「ヂアスターゼ」といふ、一種の消化素があつて、それが澱粉質の消化作用を營むといふ說。昔から俗間で、餅をたらふく食べた後に、『大根おろし』を食べる風習があるのは自然に其の理屈に適合つて居るものといはねばならぬ。

澱粉消化の事は前にも述べた如く、澱粉そのものゝまゝでは到底吾人の體内に吸收することは出來ないからして、唾液と膵液とが各自その受持の場所に於て、澱粉の消化を營むのである。即ち唾液は口と胃の中で作用き、膵液は腸の中ではたらいて、澱粉を全く砂糖に變化させる——これと同樣に大根の中にも、澱粉を糖化させる一種の消化素が含まれて居るのである。餅を食べた後に『おろし』を食べると、スッと胃部のすく樣な心地のするのは、全く餅が『おろし』のために消された譯ではないが、實際に於て餅を消化す作用があるのと、一つは『おろし』の刺戟作用に基づくのである。又其他飯に『おろし』を副へて食べると、非常に食慾が亢進むのも、主として其の刺戟作用によるのであるが、理論上、『おろし』の消化作用にも關係するのである。

大根の用ひ方は色々あるが、『おろし』が最も澱粉

の消化力を有つて居る。次は

(二)肉類に及ぼす作用　大根が澱粉の消化力を有つて居るといふ事が、學界に報告されてから間もなく、又大根は肉食消化の上にも多少の効力を有して居るといふことも報告された。即ち其證據として次のやうな實例を擧げてある。

(イ)新鮮しい鮭の玉子は中々指尖や箸では分離れないが、これを『大根おろし』の中に漬して置くと手もなく綏き離される。これ其の一例

(ロ)鮑を大根にてよく叩き、後ち細切つた大根と共に煮ると、其肉は頗る柔軟になる。これ其の二例

(ハ)其他牛でも鳥でも魚肉でも、新鮮なものは豫備的料理法として『おろし』の中に浸漬て置けば、凡て柔軟となる。これ其三例

然しこれは大根が直接に、肉類中の主成分たる蛋白質を消化すためではなく、肉と肉とを繫ぎ合せて居る結締織の部分を溶解するからだといつてある。大根中の如何なる成分が此の作用を爲すのか分らないが、兎に角、大根は肉類消化に間接の影響を與へるものと見て差支へない。

第四類　葉莖菜類

葉莖菜とは野菜――廣くいへば植物――の嫩葉、莖、根等をいひ、葱、獨活、芹、蕗、菜、蕨、薇等これに屬し、總じて脂肪蛋白澱粉質の含有量少なくして水分に富むのを特異とする。

其他本品は一般に多量の木纖維を含んで居るから營養品としては實に劣等のものであるのみならず、多食すると往々下痢を起す虞がある。これは前にもいつた夫の木纖維の刺戟に基づくので、大に注意しなければならぬ事と思ふ。然し便通を促す必要のある場合、例令、常習便秘の者や、胃の運動力の衰弱した患者には、寧ろ稱揚すべき食品であることを度外視してはならぬ。

胃の運動力の衰弱した患者に、こんな不消化な、

而かも滋養分の少ない食品を稱揚するといふのは、聊か異様に感ぜられるけれども、決して矛盾ではない。といふのは胃の運動力が衰弱すれば、益々それに馴致させないやうにするのが治療の主眼であるからだ。即ち衰弱した胃は、大切に保護する傍、之れを鞭撻して催眠から覺醒せしめる工夫をしなければ不可ない。それには柔軟なるものや、無刺戟の流動物を避けて、ごつごつした、刺戟になる葉莖菜のやうなものが一番良いのである。

斯の如き効用のある葉菜は決して、滋養分に乏しいからといつて一概に、貶つたものではない。況んや風味が美である。料理の献立をなすには實に不可缺い調味品である。唯此際注意すべきは、多食すると胃腑を傷ふこと、故に成るべく消化し易い形にして與ふべきこと、攝食の際には充分に咀嚼すべきこと、等である。

葉莖菜類の分析表

	水分	含窒素又は無窒素分	木纖維	蛋白質	脂肪	灰分
葱	九一、〇〇	四、八〇	二、〇〇	一、四〇	〇、三〇	〇、四〇
獨活	九五、一〇	二、四七	〇、七〇	一、〇六	〇、一〇	〇、五七
芹	九三、〇〇	五、三一	—	二、〇一	〇、一三	一、〇四
蕗	九五、六〇	二、七二	〇、七二	〇、四〇	〇、〇四	〇、五三
筍 孟宗竹	九〇、三一	四、四七	〇、六〇	五、三八	〇、一三	一、〇二
三河島菜	九三、九六	〇、九九	一、八五	二、四四	〇、六三	一、三四
小松菜	九三、六三	一、一八	一、九九	二、五二	〇、五二	一、三八
芥菜	八六、五〇	四、五〇	—	二、八〇	—	二、〇四
蕨	九二、一八	一、四二	二、二〇	二、八五	〇、一五	一、一八
薇(乾物)	八、五〇	四三、六九	二〇、二五	二〇、三六	〇、四九	一〇、七四
春菊	九四、〇六	二、八三	—	一、九八	〇、二九	一、〇三
菠薐草	九三、九二	一、六四	〇、四七	二、三〇	〇、一七	一、三〇

第五類　蓏果類

蓏果類の分析表

	水分	含窒素又は無窒素分	纖維	蛋白質	脂肪	灰分
甜瓜	九二、三四	四、一〇	一、三四	一、二三	〇、四八	〇、五九

胡瓜	九六、六四	一、九六	—	〇、八五	〇、〇八	四、〇七
南瓜	九〇、三四	六、〇八	二、一五	〇、六五	〇、一三	〇、七五
冬瓜	九七、四三	一、七三	〇、三五	〇、二六	〇、〇三	〇、二三
西瓜	九四、七六	四、七七	〇、一〇	〇、一六	極少量	〇、三一
茄子	九四、〇〇	三、一二	一、四二	一、〇〇	〇、〇六	〇、四三

第六類　海藻類

海藻類の分析表

	水分	無窒素有機物	纖維	蛋白質	脂肪	灰分
昆布 北海道産	二六、八〇	三二、五八	九、三五	七、七九	—	二三、五〇
淺草海苔 上等品	一四、四〇	四四、五一	五、五〇	二六、一四	—	九、四五
青海苔	一三、五三	四六、一八	—	一九、三五	一、七三	一九、二一
羊栖菜	一五、七四	五四、八四	—	一一、三七	〇、四九	一七、五六
荒布	一八、七五	五一、六三	九、七九	九、五八	〇、四六	九、七九
和布	一八、九三	四七、八二	—	一一、六二	〇、三一	二一、三五
石花菜	二二、八〇	六二、〇五	—	一一、七二	—	三、四四

第七類　菌類

菌類には食つて差支ないもの(食用菌)と、食ふべからざるもの(有毒菌)と、二種類ある。松茸や椎茸のやうに、名の知れわたつたものは食用するも差支はないが、性の知れないものは斷じて食はぬがよい。俗間では不明の菌でも茄子と一所に煮ると、其菌の毒が悉く茄子の中に吸取られて了ふからして、危險がないなどゝいつて、無暗に食ふ地方もあるが、宜ろしくない。不明の菌を食つて吐瀉をするものゝあることは、吾人が日常目撃する所である。のみならず、食用菌といへども概して不消化成分が多いからして、稱揚たものではない。

菌類の分析表

	水分	無窒素物	蛋白質	脂肪	灰分
松茸	八一、七五	一三、七六	二、七三	〇、七六	一、〇〇
椎茸	一四、五九	六七、五二	一一、八五	一、六九	四、三五
松露	七二、〇二	一六、五八	八、七七	〇、五六	二、〇八

第八類　香辛類

香辛類に屬するものは、胡椒、山椒、[illegible]辛、芥子、

生姜、山葵、桂皮等である。凡て滋養品としての價値はないが、何れも辛辣な味、愛すべき香氣を有つて居るので、食物の調味料として用ひられる。
其作用としては、食物の消化を助け、食慾を催進める等、すべて胃腸の官能を旺盛するのであるが、濫用すると却つて害になる。殊に急性の胃加答兒や胃の潰瘍や癌腫や腸加答兒やには、絶對的禁物である。

第九類　果實類

分析表は必要がないから略して置く。

果實類の分析表

	水分	酸類	糖分	其他無窒素物	蛋白質	脂肪	木纖維	灰分
葡萄	七八、一七	〇、七九	一四、三六	一、九六	〇、五九	—	三、六〇	〇、五三
芭蕉、	七三、一〇	—	—	二三、〇三	含窒素物總量 一、八七	〇、六五	〇、二九	一、〇六
無花果	三一、二〇	一、三三	四九、七九	四、三二	一、五四	一、四四	四、四八	二、八八
覆盆子	八五、七四	一、三三	三、六八	〇、六六	〇、四〇	—	七、四四	〇、四八
桑實	八四、七二	一、八六	九、一九	二、三二	〇、三六	—	〇、九二	〇、六六
栗	五一、〇五	〇、二〇	八、二六	三五、三四	〇、五六	—	四、三〇	〇、三二
林檎	八四、七九	〇、八二	七、三三	五、八二	〇、三六	—	一、五二	〇、四六
枇杷	八四、〇〇	〇、三四	六、三〇	—	—	—	〇、七二	〇、六〇
乾柿	三一、四九	—	三、二四	六五、三三	一、五四	〇、一三	—	一、六六
樽柿	八五、六五	—		三、三六	〇、三六	〇、〇三	二、三六	〇、四三
梅	七七、九四	五、五〇	—	—	—	—	—	〇、五〇
巴旦杏	六、〇三	—	—	七、八四	二五、四九	五三、〇二	六、三二	三、一一
杏	八一、二三	一、一六	四、六九	六、三五	〇、四九	—	五、一七	〇、八三
桃	八〇、〇三	〇、九三	四、四八	七、一七	〇、六五	—	六、〇六	〇、六九
實榴	七九、八三	〇、九二	一〇、二四	一、七六	〇、六〇	—	六、〇五	〇、三七
栗	三七、八九	—	—	三六、四九	二、九〇	〇、三六	一、一三	一、三三
銀杏	五〇、〇〇	—	一、六五	四二、七二	五、八〇	二、一八	〇、五六	一、八五
胡桃	四、七四	—	—	五、一九	一六、四七	五九、一八	一、五四	二、八八

丙　液性食品　附嗜好性飲料

一　飲料としての水

○○○○
水の性質　水の良否は直接、吾人の健康に大なる影響を及ぼすものである。故に飲料水を使用する際には、常に左の如き諸點に注意する必要がある。

一　清濁はどうか。無色透明で玲瓏玉を欺くといつたやうな質のものでなければな

らぬ。若し僅かでも濁つて居たならば、次に説くやうな方法を以て濾過して用ひるか。さもなくば用ひぬがよい。

二味はどうか。水には味といふものがないが、飮んで見て快美を覺えしめるものは良い、所謂清冽なるもの。鑛味があつたり、土臭い味があつたりしてはいけない。有害い有機物が混つて居ると往々土臭いことがある。

三臭氣はないか。極僅かにでも臭氣があつてはいかぬ。純粹の水は全く無臭のものだ。

四沈澱物はないか。玉のやうに澄明つて居て、永く靜置ておいても器物の底に沈澱を生じないものはよい。

五溫度はどうか。其の土地の氣溫と著しい差のないもの。

六硬度はどうか。硬度の強いものは不良ない、普通飮用に供せられるのは二十度以下のものでなければならぬ。(硬度の事は後に説明する)

七莢雜物はないか。下水の近傍にある井水には往々、アンモニヤ、硝酸、亞硝酸、硫化水素及其の他の有機物を含有して居ることがある。だから下水に近い所は油斷が出來ない、往々有機物の腐敗し分解したものが莢雜つて居る。

八鑛毒を含まぬか。これは一定の地方に限るのだが、無論鑛毒地の水は飮んではならぬ。

其他往々寄生蟲の卵や、恐るべき病原菌を混じて居ることがあるから、飮用の際には必ず一度は沸騰した方がよい。凡て眼には見えない不潔物や、舌の尖で味覺ふことの出來ない有害物を含んで居ることがあるから、是非專門家の試驗を經た上で、使用した方が宜ろしい。

廣い都會にありては、水道の敷設があるからして

稍々安心は出來るものゝ、草深い田舍へゆくと、河水をそのまゝ飲用し、又は不良の池水を知らずに用ひて居る所がある。かゝる所に於ては衛生家の責任は甚だ重大である。

河水及池水飲用者のために注意。清潔な井水を得られないために、どうしても「河水」や「池水」を飲まなければならぬ人のために、注意すべきことは、先づ水の流域。河底の高低。沿岸の模樣。人家の多い市街を通過しては來ないか上流には傳染病がないか。等である。總じて河の中流は流れが早いから清潔であるが、岸に近づけば近



づく程不潔である。これ岸の方は流れが遲いために不潔物が沈澱やすいからだ。

「井水」を堀るには成るべく、地質の堅い所で、深く堀り、便所の近邊や下水の附近を避け、さし水の有無に注意しなければならぬ。

水の硬度　水は流動體のものであるのに、「硬い」とか「軟かな」とかいふのは、聊か變な感じもするが、これは水の性質を定める、一つの定規であるから、決して不思議はない。即ち水の中に石灰及苦土鹽類を多く含んで居るものは「硬い」とい

ひ。少量のものは「軟かな」といふのである。外國ではこれを表はすのに度數を以て計算して居る。

其の計算の方法は、國々によつて違つて居るが、獨逸に於ては水百萬分中一分の石灰及苦土鹽類を含んで居るものを、一硬度として居る。故に前に示した所によると、此の鹽類が、水百萬分中二十分以上に達したものは飲用されないことになるのだ。

硬度の強い弱いを鑑別るに最も簡單なのは、普通の石鹼を以てする方法であらう。即ち水の中で石鹼を使つて直ちに眞白になるのは、硬度の強い徵候である。俗間では又、水のきめが「あらい」の「こまかい」のといふことがあるが、これ等も矢張り、硬度をいつたものであらう。

水の清淨法

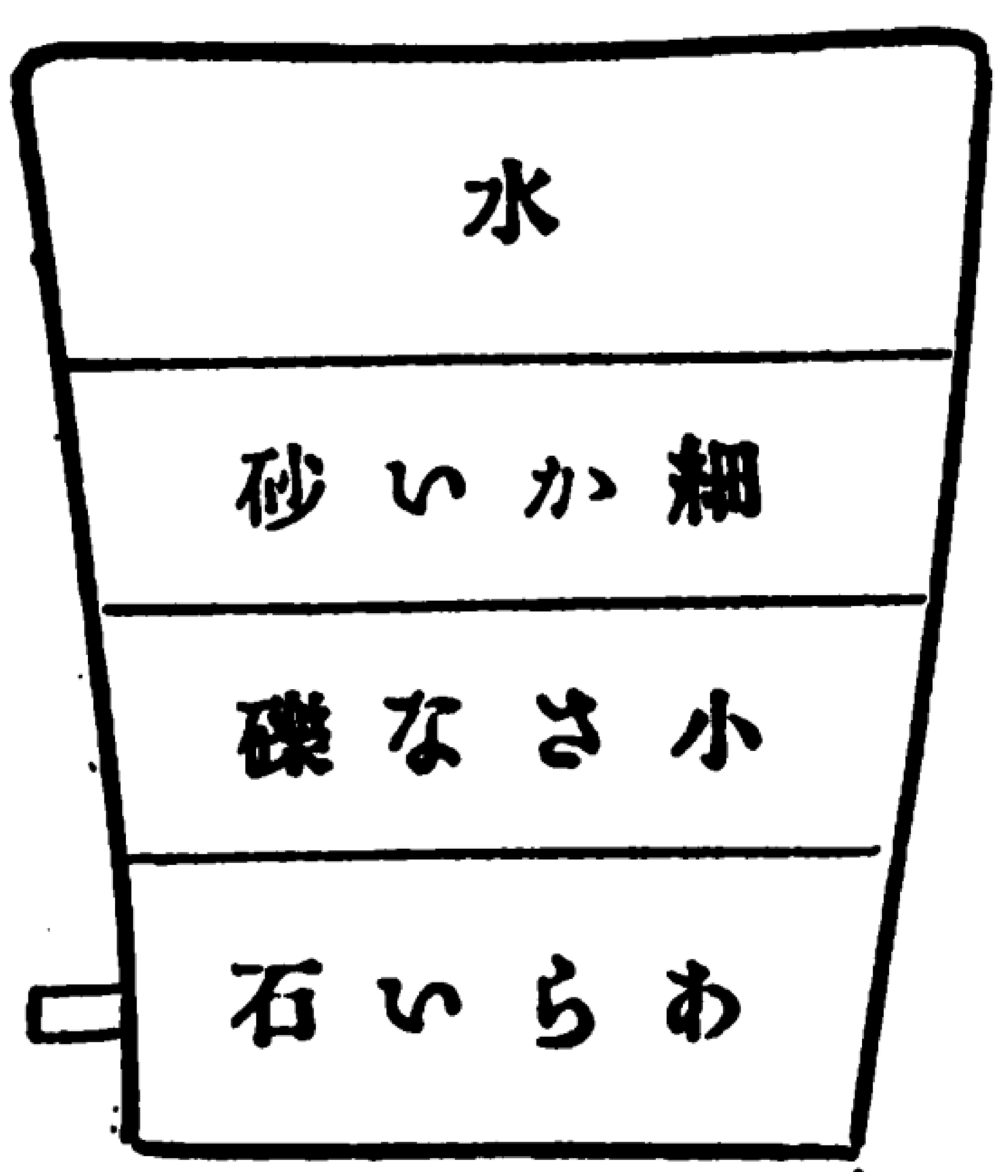
……汚ない水を清淨にする方法

飲料水は前に記したやうな性質を有つて居るものでなければならぬのであるが、土地の狀況により、迚も善良の水を得られないことが屢々ある。そんな場合には不良の水を無害のものにして、飲料に供する工夫が要る。これ醫家以外、一般の士民が心得て置かなければならぬ事である。

水の不潔物を去り、溷濁を澄ませ、細菌を死滅させるのには種々な方法がある。即ち左の如し。

「濾過法」これは普通よく應用せられる方法である圖にある如く大きな器物の底に粗大い小石を敷き、其の上に小さな砂利を重ね、其の又上に細かな砂を盛り、上から水を注ぎ、其の中を通過させるのである。砂の代りに木炭を用ひてもよい。また砂利と砂との境界に棕櫚を布けば猶更ら妙である。

濾過装置の假定圖



『煮沸法』これも手輕な方法である。水を攝氏の百度以上に煮沸すれば、有害の瓦斯は蒸散し、石灰質や苦土鹽類は『澱』となつて底に沈み、病原菌や、寄生蟲の卵や皆死滅して了ふ。煮沸した上、綿で漉せば猶更らよい。

『濾清法』以上の如く、漉しても沸しても清淨にならない場合には、明礬の力を籍らなければならぬ。普通、水の三萬分の一も明礬を加へて、一晝夜靜置しておけば、汚物は底に沈み、自から透明となるのである。出水の際などには、此の必要を見る。

『蒸餾法』水を沸して蒸氣に變せしめ、其の蒸氣を冷却たい管を通じて器物に導き、再び故の液體に復らしめるのである。此の方法によると一切の固形分を取り去ることが出來るが、其の代り水の快味がなくなるものだ。然し蒸餾して得た水は化學的純粹に近いものであるから、安心して用ひることが得る。

其の他『氷結法』や『強度の電氣を通じて殺菌する法』があるけれど、一般に行ふことが能ないからして略して置く。

飲料水の胃腸に及ぼす害。水は吾人の生活上、一日も缺ぐべからざるものであることは、前にも言つた通りであるが、使用宜しきを得ざれば、往々にして胃腸を傷めることがある。即ち

一、多量に飲用すると、消化液を稀薄め、食物の消化を妨げ、且つ蛋白質の分解を增進めるものだ。

二、一氣に多量の水を飲みほし、又は寒冷なのを多量に飲むと、胃の痙攣――恐るべき胃の疼みを起し、四苦八苦をした擧句、下痢に惱まされる事がある。

三、例令その量が多くなくても、度々水を飲むと胃の官能をわるくする、殊に『胃のアトニー』には水の飲用は禁物である。水に限らず、凡て水分の多いものは一切宜しくないが、殊に水は惡い。飲めばのむ程口内は渴く。これ、胃の中にいつまでも停滯つて居て、全身にまわらないからである。

二　營養品としての乳汁

天然の食品中、乳汁ほど理想的にできて居るものはない。大抵の食品は其の中の成分が一方に偏倚つて居るのであるが、獨り乳汁のみは、吾人の生命を保續するに必要なる食素の全種類を、平等に含んで居るのだ。

乳汁には人乳と獸乳との二種ある。獸乳の中には羊乳、山羊乳、驢馬乳等ありといへども、最も多く使用せらるるのは牛乳である。だから單に乳汁といへば、俗間では牛乳の事のやうに思惟へられて居る故に予も玆には牛乳のみについて述べやうと思ふ。其の前に、各種の乳汁の分析表を揭げる。

第一表　乳汁類の分析表

種類	水分	乾酪素及蛋白質（カゼイン）	乾酪素及蛋白質（アルブミン）	脂肪	乳糖	灰分
人乳（本邦人）	八七、八八		一、五三〇	二、九七四	七、六六六	〇、一五五
同（歐洲人）	八七、四二		二、二九〇	三、七八〇	六、二一〇	〇、三〇〇
牛乳（東京）	八六、四四	カゼイン 三、一六六	アルブミーン 〇、四九一	三、九八五	五、一〇八	〇、七五四
同（外國種）	八七、一七〇	同 三、〇二〇	同 〇、五三〇	三、六九〇	四、八八〇	〇、七一〇
山羊乳	八五、七二	同 三、一〇	同 一、〇九	四、七八	四、四六	〇、七六
羊乳	八〇、八二	同 四、九七	同 一、五六	六、八六	四、九一	〇、八六
驢馬乳	八九、六四		二、二〇	一、六四	五、九九	〇、五一
煉乳（コンデンスミルク）	二六、二五		七、七五	六、四八	乳糖 一〇、五五 蔗糖 四三、二〇	一、七九

花もひと時

大塚楠緒子

花もひと時やがて散る
　紅葉もしばし頓て枯る
ふたりが中のこの戀の
　熱きなさけも時ありて
冷もやせんか冷たれば
　悲しかるべしそれ一つ
二人が中のうれひぞと
　若きをと女が若く煩ふ

日本婦人の不姙症に就て

楠田病院長　楠田謙藏

西洋に於きましてはヒポクラテス及びアリストテレス等云ふ彼の希臘の大學者以來、我國に於ては垂仁天皇の御代に子代の民を定められたる以來、不姙といふことは人生不幸の極であることは一般の人が懷て居らるゝ思想でありまするが、今日に至りましても未だその原因も明瞭でありませぬ隨つて之を治療することも完全でなく、殊に日本の醫學者等はかやうなことは領域外であると云ふやうな風も見えたのであります、それならば余はなぜ斯樣に領域外視して居らるゝ不姙症を研究いたしたかと申せば、明治十九年でありました――どうも外來患者が不姙といふことの苦悶を訴る――しかもそれが切でありまする――申すまでもなくこれ等が原因で或は道德上の問題も起る或は社會上の問題――引ては國家の前途と申すやうな問題ともなります、されば先づ不姙症と云ふものを醫學の範圍に置かぬことが宜しくない、これを神樣の攝理視することは根本の誤謬であると思ふと、どうしても醫人としての余はこれに對して全力を盡くして研究せねばならぬ、況や自分は産科婦人科の專門を以て任じて居るではないかと思ひました。

さてと云ふて先づ彼國の學者はと調べまするると、前に一寸申しました處の太古ではヒポクラテス並にアリストテレス、耶蘇紀元一世紀頃はゾラヌース、中世紀にてはパウルス等の人々が何れもこれに注意せられ殊にパウルス氏は婦人病を說て不姙症に及ばれて居りまするし、また亞剌比亞醫學の中にも屢記載して御座います。それが十九世紀以降に至りますると一八四〇年、モンダートがパリーに於て男女不姙症論を公刊し、一八四九年にはアンドリエーがまた佛國に於て陰萎及不姙症論を著し、一八五六年

には、ガードナーはニユーヨルクに於て不姙症の原因及療法と題する著があり、マキエルはウイルとヨー先生が病理解剖集誌第十冊に不姙症に就ての論文を載せ、一八七一年には英のダンカンが姙娠及不姙症の著があり、一八七三年にはキツシユが維納醫事週報に不姙症論を公にし、一八七五年にはグリユネワルドは生殖器病患者の不姙症と題する論說を公にし、一八七七年佛のバジヨーは不姙症なる一書を一八七八年バイゲルは不姙症の病理的解剖及び其器械的發明並に治療法なる書を著はし、一八七九年レヴイーは顯微鏡及不姙症なる說を出し、同年ラインスチツチルは獨逸醫事週報に於て不姙症に就ての一論說を掲げ、一八八〇年にエル、マキエルはコツペンハーゲンより不姙症の原因として子宮病を論ずと題せる書を出版し、一八八六年にはキツシユは婦人の不姙症論と題する大著述を公にいたした。これは不姙症に關する最も浩瀚なる著述である。次で一八九〇年リール及アスセルは不姙症に就ての一論文を出しました。

さて如斯人間がその最大願望は已れの後繼者——即ち子孫を繁殖せしめ度いと云ふことで、これは東西古今貴賤貧富の別なく同一の願望を懷かるゝことであれば、學者がその原因を說き病理を論じ統計を作ると云ふことは當然の本分でありまする故に、前記以外にも尙其人は頗る多いのでありますがまだどうも不姙症と云ふことがちやんと分らない、本體が判然しない、薄靄があると申す有樣であります——何故かと申しますればこれは姙娠の說が今尙區々でありまして多少その論據が異つて居りまするから、不姙症の病理も自ら不明である——少し雲が懸つて居ると申す有樣であります。

然らば即ち日本はと申しまするど、大寶令中の戸令には支那の風に從はれて凡棄レ妻須レ有ニ七出之狀一。一無レ子。二姪泆。三不レ事ニ舅姑一。四口舌。五盜竊。六妬忌。七惡疾。皆夫手書棄レ之。與ニ尊屬近親一同署。若不レ解レ書。書レ指爲レ記云云と云ふがある、即ち子の無い

と云ふこと—不妊と云ふことを第一に置いて不妊の妻の離婚を許して居るが、これ等は申すまでもなく社會思想の成文律となつたもので遠くは垂仁天皇の御宇に伊都志和氣王に子の在しまさゞりし故に前に一寸申した子代の民を置かれましたること—繼體天皇の御時に太子妃に在したる春日皇女が子女無きを歎かせ給ひしより匝乾の屯倉を給ひて、兒孫が皇女の名を記憶すべき代りにこれによつて皇女の名を後代にまで傳へられんとせられましたる如き、或は萬葉に散見する處の歌、近くは徳川綱吉(五代將軍)が嗣子なきの故を以て生類御憫みの布令を出して犬公方と稱せられたるなど、何れもその子の無いと云ふこと—妻たるものゝ不妊と云ふことが、如何に悲しいものであるかと云ふことを知り得ると思ひます。



さて我國の醫學は支那から傳はりましたものでありまする故に、不妊症に就ても支那流の妄誕なる說を傳へられたこと丶思ひます。例へば廢天民が立春の朝に、朔游を盃に採つてこれを偕に飲んだ後に房に歸ると姙娠するとか、孟洗が鴛鴦の肉を藥として竊に夫妻に與ふるがよろ

しとか、云ふの類でありますから、況てや、禁厭、祈禱などは申すも愚なる次第で御座いました。
然しながら西洋の完全に近い醫學が入つてまゐつてからは、我産科婦人科も、多士濟々と云ふの形容詞が適當と申す有樣ながら、まだこの人生の最大不幸なる不姙症に就ては、どなたも御論じにならない……。イヤ御論じにならぬだけで、御研究はなさつて居らるゝに相違ないと思ひます。
余は去る明治二十二年十二月より二十六年三月迄これを調査いたして、先づ二十六年四月の第二回日本醫學會で演説をいたしました。
其時調査いたした婦人の總數は三百八十八人でありましてこれ等は皆四十歳以上の婦人でありましたが、その結果は三百八十八人中絶對的不姙症者は八十九人でありまして、百人に就て二十二人九分强の割合であります。
又此三百八十八人を生活の程度によりて之れを分ちますると、高等なるもの七十八人、中等なるもの二

百十九人、下等なるもの九十九人でありまして、不姙症八十九人の生活別は、高等なるもの二十二人、中等なるもの五十四人、下等なるもの十三人でありました。されば生活の高等なるものは百人中不姙症者三十人强でありまして、中等生活のものは百人中二十四人强、生活下等なるものは僅に十三人强でありました。
これにて、不姙症の罹病者は生活程度の高下と反比例することが證據立てられますると同時に、余はこの表を以て正確に近いと思ふて居ります。それは四十歳以上の婦人でその婦人科的疾患を以て外來診察を乞はれたのでないと申すこと、同棲後何れも長年月を經過した人々でありますからであります。
次ぎに婦人科的疾患にて、外來診察に參られた三年以上雙棲せられたる婦人六百三十人について調査いたしたる不姙症者は百五十七人でありまして、即ち百人に就て二十四人九分强でありました。

凡そ不妊症の原因といたしては一つの疾病のみを擧ぐることが出來ませぬ、多くは此症に彼の症を兼ね、此病に彼の病を兼ねて居りまするから、これを一々申上ぐると云ふことは一夕の御話しでは盡くし切れませぬし、(余の不妊症論(增訂三版)には是等に就て稍詳に説て置きましたが決して不妊症を説き盡したる著述ではありませぬ、唯專門分科を選まるゝ方々の爲めに不妊症の草萊を開きましたるに過ぎぬのであります、勿論素人の方の爲めに書きましたる書物ではありませぬ)。且つは素人の方々には御解りが六ケ敷い………。それでまづ不妊症と云ふことの研究は實に我産科婦人科專門の醫師諸君が各その研究を援け合ふと云ふ機運を作りたい——どうか世間の有識の方々が不妊症の治療と云ふことは、一個人一家庭の問題ではない、國家將に興隆せんとする時に當てのその根本の根本たるべき問題であると云ふことを自覺して戴き度い、さうして不妊症に對する研究に一歩を進めるやうな機運が、この有識の方々に依つて開かれまするならば、我産科婦人科學の進歩であることは申すまでもなく、又我帝國が東西文化の渾融と云ふその大使命を果す第一歩であると思ひます。(談話筆記)

いでゆの宿

佐々木信綱

顔しらで二つの年にわかれつる
　母君こひしゆふぐれの雨

そのかみのわが罪たれにきこゆべき
　つめたき石となりましゝ君

君とかたる薄花月夜かくながら
　人のこの世の消えもはてなば

君が爲もちひつくると雨の後、
　野ゆき岡ゆきわがつみし草

われ君にうたがはるべき事しあらば
　天の火われをやきやつくさむ



成功せる手藝家

中川愛氷

ことし二月五日芝紅葉館に於て、女子高等裁縫學院長小出新次郎君の催にかゝる、同君著述和洋裁縫大全の成功祝ひがあつて、頗る盛會を極めた、予は盛大なりし此成功祝に就て、いさゝか所感を述べやうと思ふ、

三宅雪嶺博士が原敬氏を評して、氏は實に世俗の所謂成功者たるに相違なけれど、畢竟するにそれ丈の人たるのみ、將來何事をか成し得べき、又曰く、其時代の成功者にして、歴史上に於ける成功者にあらず、もしその時代にありてはその時代に應ずればよし、未來記は慮るの要なしと云はゞ、それも一種の見識なるべし、氏は斯る見識の人にや、と皮肉の言があつたが、實にその通りで、例へば學校を創立する、生徒の滿員を告げたとのみで直に成功とは言へぬ、雜誌を發行する、數萬部を賣盡したとのみで、これも直に成功とは云へぬ、學校創立の主旨、雜誌發行の目的より云へば、生徒の滿員を告げたること數萬部を賣盡すといふこと、或は反對に不成功なのかも知れない、而して世間成功と稱するもの、多くはこの類である、即ち人の弱點に乘じて、心にもなき成功をして居るものが多いのである、而して小出君の手藝上に於ける成功は、大に是等と撰を異にして居る、

凡そ物に忠實なる人は、いさゝか狂的態度がある

そは毀誉褒貶を度外視して、その事に猛進するからである、普通の義理人情では出來ぬ藝を演じて居るからである、小出君が裁縫術を以て婦人を教育するに、熱誠のあまり、自然この狂的態度を示すことがある、それが爲に誤解さるゝことがある、否或一部よりは誤解されて、甚しき不誠實なる、不眞面目なる教育家とさへ評する人がある、而してその數も決して少くはない、此祝宴の時であつた、婦人雜誌記者倶樂部の常任幹事來馬琢道君は、予に向ひて、先月の例會に於て或一部の人は、折角眞面目なる討議が初まつても、中川君のやうに不眞面目な言を以てまぜかへされては困ると云ふて居たから、以來はあまりまぜかへさぬやうにして貰ひたいとの注文があつた、そこで予は來馬幹事に答へて、物の矛盾は蓋し此より始まるのである、形式は眞面目のやうでも實質が不眞面目であるから、不眞面目な鍍金をした眞面目な言を以てまぜかへしたので、云はゞ不眞面目な血精療法をしたのである、怪かることを云ふものである、と反對に不平を洩して置いた、あまり正直に露骨に事をすると、不眞面目に見ゆるもので、小出君が或一部の人より狂的視せられ、不眞面目視せらるゝのは、熱誠と眞面目に過ぎるからである、

小出君が千名に近き生徒を得て、盛んに裁縫を教授して居たのは、帝國教育會の棟借時代である、順風に棹さしたる如き有樣であつたのが、小人の嫉視を招く基となつて、遂にその小人輩に謀られて、同會を追放さるゝ事になつた、意志の不疎通ほど悲しいものはないもので、後に至つて同會の辻 會長より多大の同情を得たが、後の祭りで、學校は解放する世間の不評判は尋常でない、恰も糸切れたる紙鳶の如く、一年餘を諸國に流浪して、その揚句は去卅八年の暮に、内助を信頼せる令閨に先立たれ、君は數人の子女を手一つに抱へて、盡きぬ恨に泣いたのである、勢ひ自暴自棄せねばならぬ境遇に陷つたのである、

人の大不幸に際會しては、墮落するか、極端に人

格を磨くかの二者に出つるものである、小出君は天下に己を知るものに己あり、己の技量は遂に埋もるるものにあらず、己の至誠は遂に隱るゝものにあらず、と確信して、勇氣を皷し、徐ろに作戰計畫したのである、

　爾來鹽を舐り、粥をすゝり、具さに困苦を嘗め、多年研究の餘に出でたるの褄形を世に公にし、次に裁縫秘術綱要を著したるが、忽ち洛陽の紙價を高め、これより得たる利益の黄白は、厖大なる前古未曾有の手藝書、和洋裁縫大全三十卷を大成せしむるに至つたのである、今や再版に着手して、その一卷漸く紙型に流鉛するや否やに、千餘の豫約者あり、其利益は小出君が原宿の寓を去る數丁なる穩田に、宏大なる教場を新築せらるゝ事となつた、即ち多年の研究はまづ褄形を生み、褄形は秘術綱要を生み、和洋裁縫大全を生み、學校を生み、順序よく成功したのである、小出君は倒るゝとも、この事業は永く世に利益し、手藝界の大成功者として後に傳はるのである、

　予は小出君とほゞ境遇を等しうするのである、友人としての交も深く、氏に同情し、同情せらるゝに於て、他の友人以上である、予はこの友人の事業成功を祝する宴會の開かるゝを喜び、この會を盛んならしめん爲に、兼て知を辱うせる柳原伯、入江子の臨席を乞ひ、柳原伯は一場の演説さへあつた、後にそれを敷衍せられたるものが、本紙卷頭に掲ぐる内實談である、

　その翌日小出君と共に入江子爵を訪うた、子爵は君に向つて、昨日は約を履んで出席せんとせる時、友人に來訪せられ、行先を問はるゝまゝに小出氏の裁縫大全成功祝に招かれて行く所なりと云へば、友人笑ひて、小出といふ人は山師なり、熱誠を衒ふ、つ、、、、かましものなり、彼等に利用せられて馬鹿を見ぬやうにし玉へと云はれた、予も一度はその言を信じた、そこで風邪と稱して出席を斷つた、その友人と同行して外出せんとする所へ中川君から、來られるなら

來て貰ひたいといふ電話がかゝつたので、中川君に對して、云譯だけの出席をしやうと思うて、既に斷つた所を出掛けた、所が案外であつた、なか〳〵山師だとか、熱誠を街ふつかましもので あるとか云ふ、そんな人でない、よく〳〵他の噂の當にならぬ事に感じて却つて小出君に敬服の念を増した、と云ふのは裁縫大全の爲に造られた雛形の陳列を見て、予が先年小兒の爲に雛人形を造り、其衣裳は古代模様にしたいと圖を作つて織らせた事があつたが、人形用一二枚の物を織るさへ、機の綾譜を造る面倒から、織る面倒が一通りでない、然るに數百點の雛形に、いづれも非常なる手數をかけて一として雲煙視すべき物がない、而して之は單に裁縫大全に挿入する寫眞版の爲に作つた物で、もし山師とかつかゝましものとか云ふ種類の人のする事ならば、木綿無地の雛形に彩色した物でも濟む譯である、然るにさはせずして一々古實を糺して、悉く新なる綾譜を以つて織りたる如き、その手數のみにても尋常の人の出來得べき藝でない、更に宴



會席上角田眞平その他の諸君より、その爲人を聞いて、予は出席した爲に人を誤解することを免れ、衷心愉快に感ずると同時に、小出君が今日の成功を見たるも、一はその反對者の刺戟によるものたるを思ひ、その敵をも愛し、ます／＼斯界の爲に盡されんことを望む、とあつた、情に脆き小出君は感にうたれて泣いた、もし子爵が當日臨席せられなかつたら小出君は永劫子爵に知らるゝの機會なく、一山師、一つかませものとして記臆されたかも知れない、

實に子爵の言はるゝ如く、裁縫大全の爲につくり當日陳列したる雛形は、いづれも手藝の妙をつくし長一尺五寸位に仕立てた女小袖に、丈相當の裾模樣小紋を染出したるもあり、十二ひとへ五つ衣の如きは、有職模樣を小さく縮めて故實に正しく織つたもので、小出君は此の爲に新に機織工場を設け、一つ一つに織らしめた苦心經營のもので、其絢爛なる地色と、精巧なる模樣は美術の粋をつくしたものである、就中僅に一寸ばかりの材料の爲に百金を投じて吝まざる如きものあるに至つては、如何に斯道に忠實なるかを窺ふことが出來る、尙歷史風俗の參考品として、袋物の如きは、雛道具の如き尺寸の琴、笛琵琶などに合せてつくりたるもの、いづれも技術の精巧を見るべく、義經好みの火燧袋雛形なる、紫地金襴の如きは、此切地を得ん爲にわざ／＼京都に赴き、金襴小切店をあさつて漸く見付けたとの事である、その他弦袋、旗袋、宿物袋など其名を古書中に見て形を知るもの稀なるを、一々雛形につくりたるその詮鑿のみでも決して一朝一夕の仕事ではない、斯く手藝に忠實なる人は、是迄社會より如何なる待遇を受けたるか、小出といふ男は山師である、つかましものである、と惡評を受けた位の事である、

入江子爵を訪うた翌日、柳原伯爵を訪ひ、子爵の小出評が話題に上つた、伯は曰く、世間で惡く噂さるゝ人、さて何處が惡いのかと云へば、こゝを押せば惡い音が出る、といふほど確かなものでなく、たゞよくない人であると評するに過ぎないので、こ

んな無責任な惡口をいふ人からは、褒められた所で有難くもない話で、世間から惡評さるゝ所が却つて小出君の價値のある所かも知れない、伯の此言は最も味ふべきものがあるので、世の毀譽褒貶中に生活して居る無責任な人は、頼んでも惡く評して吳れるものはない、

世間にて評判のよい裁縫書も少くはなく、裁縫學校もまた乏しくはない、然も小出君の如き熱誠から出たものは恐らくは一つもあるない。前者は商業的事業の成功で、後者は教育的事業の成功である、教育的事業は商業的事業ほど花々しくはないが、その實質に於ては頗る見るべきものがある、名判事石井忠七郎君は、いつか予に向つて小出君が非凡の手腕を以て、その事業の兎角失敗に歸するは、餘り眞面目なるが故であらう、と語られた事があつた、小出君はなかなかの才物である、婦人の弱點も、社會の弱點も知つて居る、その弱點に乘ずる策も知つて居る、一たび策を施せば、忽ち雲を突く如き裁縫學校を立てることも知つて居る、而して大なる學校を建てたい小出君が、今日までその目的を達する事が出來なかつたのは、眞面目といふことが主となり人は何と云はうとも表面のみでない眞の教育家らしき態度を以て進みたいと思ふたからである、爪で火を燈しつゝ學校を建て、月謝さへとれば教育の目的は足れりと云ふのではない、今や和洋裁縫大全は成功し、多年理想したる裁縫學校も新築せられた、これから小出君は子孫の爲に美田を買ひ得ることも出來る、然れども小出君のは何處までも事業が教育的である、たとへば生徒は地方の人が多い、是非とも是は寄宿舍に入れねばならぬ、といふので、寄宿舍に多大の建築費を拂ひ、晝の詰込教授を夜間實習せしむるやうにする、いづれの寄宿舍でも、寄宿費は學校の會計に多大の利益を與へて居る、然るに小出君は生徒を盛んに寄宿舍に引入れ金錢上の利益を得るやうにては、寄宿生の思はくも如何なり、寄宿費は寄宿生間にて會計を立て嚴重なる監督の下に當番

にて自炊せしめ、幾分の不足は學校にて補ひ、舍費の如きは全然學校の負擔とし、その負擔費用は副業の著述より得たる利益を以てし、生徒一人を増せばまたそれだけの設備をなして、月謝の金が銀行に急ぐといふ如き事はしない、況んや銅像に縊らんか抔と怨まるゝ如き失態は斷じてないことを保證することが出來る、即ち小出君は既に手藝家として成功して居るが、財產家としては永劫成功しないことを疑がはぬ、他日小出君の手より居眠りの出る金の銀行に貯蓄せらるゝ時があらば、その時は小出君の墮落した時と見て差支ない、人を敎育するには資金の入るもので、敎育が出來たり、金が貯蓄されたりするものではない、この心配は無用、小出君は金を儲けて敎育すればとて、敎育をして金を儲ける如き卑劣なる男ではない、

この成功祝の會塲に當てられたる紅葉館が、御馳走のまづきと、女中の美ならずして高ぶれると、面白からぬ紅葉踊の外には、殆んど無價値ながらも紅葉館の名の喧傳せらるゝいつはり多き世の中に、小出君の如き眞面目にして、而も楚歌聲裡に立てる人の、成功が祝され、その餘興として花々しき席にあまり花々しからぬ一藝人花園一聲が、その藝の妙を滿座の人に認められたる如き、大に意を强うするに足るのである、

樺太發見の彫刻ある鳥骨の用につきて

理學博士　坪井正五郎

私は昨四十年の夏、その筋の命を帶びて、學術上取調の爲に樺太へ出張しまして、彼方此方と探見しましたが、その部分は重に西の海岸に沿うて遣つたので、此の遺物（この時上部は硝子を以て覆はれたる五個の箱の中なる實物を指示されて）は、乃ち

ナヤ河の河口の土中より發掘したもので、數は凡そ二十本計りありまして、長さは二寸乃至三寸で一定しては居ない、而して其模樣の如きも各自異つて居て、此く眞半分にして兩方に模樣のあるものもあれば又一方にのみ彫られたのもある、併し其質だけは鳥の骨である、

之を得てより後、種々に苦心をした結果、或は裝飾に供せられたものであらうか、或は何か宗教上に用ゐたものであらうか、若くは翫具に使つたものであらうか孰れ是等三點の中の用に供せられたものであらうと



鑑定はして見たものの、サテ裝飾とすれば、縦に用ゐたものか或は横に用ゐたものか、サッパリ合點のかないと云ふものは此の通り不正なる圓形のものであるから、その使用の工合によつては裏面が出て來て不可のである、去りとて之を縦に用うるとすれば、假りに曲玉の樣に繋いで首等に懸るとして見れば、此中の或物は可いとしても、或物、例へば、鯨の如き格好の模樣は、一疋は直立しても他の一疋は倒しまとなる、如何も工合が悪いのである、

然らば宗敎上に用ゐたものかと云ふに、是まで多く宗敎上のものは、偶像その他御守のやうなものが揃つて居る、のみならず、未開人種の作物としても宗敎上のものは比較的緻密に出來て居るのであるけれども今この物を見るに、孰れも彫刻が粗末である、之は大いに疑問の存する所で、

予は骰具であると認定するのである、何故かと云ふに、此様な骰具は世界の諸方に發見せらるゝので、エドワード、キユーレン氏の著書中にも之と類似の物が掲げられてある、尤も同氏は主に北米の土人間に行はるゝものを示されたのであるが、不思議なことには、殆んど掛け離れて

朝鮮に於て此一種を發見せられた事である、併し其骰具の質は

鳥の骨には限らない

木、蘆等が使用せらるゝのであるが、木を用うる場合は、大抵木を眞中より二つ割となして、その丸い

方へ、種々の模様を描いたり、又は燒付けたり、或は彫刻を施したりしてあるが、その形狀は概して一致して居る、尤も木質のものは總て皮が殘してある而して

その使用法は

如何と云ふに、北米の土人間などにては、大抵四本を一組として用うるので、朝鮮に於ては、丁度我國の御櫃入れの蓋のやうな笊を用ゐることがある、

是等より推考する時は、單に諸模様を比較するのみでは無くして、必ず之を以て勝負を爭ふ所の骰具であると考へる、然れば其形の如何に拘はらず、之を以て一二等の數を示したもので、その數の如何に依つて勝敗を決するものであらうと思ふ、

此く推定する時は、自ら其半面にのみ其彫刻が施されたる事、鳥骨は縱ひ其半面が不平でも、矢張彫刻が施して無い事なども思ひ合さるゝのみならず、

我アイヌと北米の土人間には、彼の石器時代の遺物に於て、是まで種々類似の點を發見した事は少な

く無いのであるが、此にまた此くの如き類似の點を發見したのは、人類學に取りて一の幸福を得たものと云はねはならぬのであるが、唯一つ不思議なのはかけはなれて一つ朝鮮へ飛んで此の翫具のある事であるが、是も他日吾等に明決を與へて呉れる事と信じて居る、

吾人の生活に必要なる物ほど澤山で安値

法學士　河上　肇

水も口ハである

予は前回に於て、吾人々類が生活をして行くのに最も必要なる物ほど、澤山で而して其値段が安直く造化が巧妙に配劑してあるといふことに就て、空氣の事を述べたが、此には水のことを話さうと思ふ、

この水は前の空氣のやうに、所によりては全く口ハといふことには行かない、即ち東京や横濱のやうに水道といふもの丶設けられてある所は、月に幾らといふ、その使つた水の量に從つて水税といふものを拂はなければならぬ、けれども是は全國から見れば實に僅少のもので、まづ例外といつても差支は無いのである、その他の所に至つては全く口ハである、所で此の水といふものは、今更めて言ふまでも無く何處へ行つても口ハである、假令、水道を引いてある東京でも、まだ隅から隅まで行き渡つて居るといふ風には行かないから、乃ち水道の無い所では、よしんば水の質は惡いにしても、堀井戸とか又は吹出しとかいふ所の井戸から、自由氣儘に汲んで飲んで居る、此くの如く口ハである、實に此の水といふものは、空氣に次でといふよりは、寧ろ空氣と共に吾人々類に無くて叶はぬ生活要素の一である、而してまた空氣と等しく至る處に於て饒かに供給さる丶のである、聞く所に依れば、吾人の人體中三分の二は

水分であるといふことである、して見れば如何に水なるものが吾人に必要であるかゞ分る、のみならず吾人は若しも此の水を得ることが出來ないで、體中に於ける水分の三分の一を失ふときは、爲に生命を喪ふものであると聞いて居る、然らば如何に吾人は日々此の水を要求しつゝあるかを推知することが出來るのである、

獨逸のルーザング氏は、その經濟原理に人民の大移動を說かれた中にも、彼の牧畜等を以て生計を營む所の未開人種でも、此の水といふものが、如何に吾人々類は云ふに及ばず、その牧養する所の畜類の爲にも最大必要のものであるといふことを知つて居るから、是まで住んで居つた場處に水草が無くなれば、直ちに夫等のある處を探見して移動するのであるといふことを說かれた如く、水は此くの如く人類と云はず畜類といはず、否社會上の生物には悉く生活に缺ぐべからざる一要素で、而かも至る處に澤山造化がロハで供給してくれるのである、之は單に

是等の方面のみでは無い、他の生物學や醫學の方面を見ても、諸種の要素を含有して居ることが分明するのである、例へば、牛肉、鳥肉、魚肉および牛乳鷄卵等の如きものは如何である、是等そのものゝ大部分は水分である、此くの如く水分は、物として含蓄して居らぬことは無い、といふものは畢竟吾人に必要なものであるから、造化が巧妙に諸方面へ安く分配しておくのである、

次は食物であるが、この食物は彼の空氣や水のやうにロハには行かぬが、社會の他の物に比すれば安いもので、殊に其食物の中でも、吾人が日常食する所の穀類ほど他の物に比して安いものは無い、若しも米が一粒幾らといふことになつたら、それこそ大變であるけれども、彼の何十萬と入つて居る米粒を一升幾らといふ工合に販賣するのである、之を以て見るも諸種の食物中で

穀類は一番安い

といはねばならぬ、若しも之が金剛石のやうに一粒

幾らといふやうであつたならば、今日の人類は恐らく餓死するの外は無いのである、

次に材木の側で云つて見れば、先づ家を建るにしても、または建具その他の器具諸細工をするにしても、欅とか樫とか、又は紫檀黒檀とかいふものは、さう用ゐられないけれども、同じ材木中でも

杉は一番澤山

に用ゐらるゝのである、而して其價も他の欅とか樫とかいふものに比ぶれば最も低廉である、さうして其使ひ途も廣いのみならず、其材料も豐富である、

金屬は如何

次に金屬は如何といふに、是また造化の巧妙で、吾人々類が日常最も多く要する所のものは

鐵と銅とである

この鐵と銅とは、他の貴金屬即ち金とか銀とかいふものに比ぶれば、世界至る處、多少の產額に差はありとも、まづ〱比較的多量に產出して、以て吾人に利便を與へつゝあるのである、

右に述べたやうに、兎に角地球上で吾人の生活に必要なる物ほど、その量が澤山で、而して其價が安いのであつて、チヨツト前にも例に引いた金剛石のやうに、僅か小さい一粒が何千圓何百圓といふやうな高價であるのみならず、その量の少ないものでは無い、この金剛石の如きは、極端からいへば何等の吾人が生活に交渉する所は無いのである、而かも兎や角といつて此くの如き無用の贅物を珍重するには至らぬのである、それからいへば、方今米價が暴騰したといつて、何も生活難を訴ふるには至らぬのである、

虚榮心である

一體吾人々類が生活難を唱ふるのは、何が原因を爲すのであるかといふに

この虚榮心を充たさんが爲に生活難を來たすのである、之に就てはカーライル氏も曰はれたが、それは人類にインフアクションの心があるからである、そのインフアクションとは、例へば、吾人が日常の生

活に毫も必要なき所の耳輪を下げるとか、又は入墨をするとかいふやうに、己が虚榮心を充さんが爲には種々の裝飾をする、何も耳輪や入墨などは、飢を凌ぐ足しにも爲らなければ、又防寒の具にも爲るものでは無い、けれども虚榮心を滿足せしめんが爲には、その一個の金環若くは寶石の價を以て、吾人日常の生活に必要なる麪麭を數百斤購めることが出來る、又多くの日子を費し、且つ多くの苦痛を忍んで入墨する間に、それだけ勞作をしさへすれば、必ず幾日かの生活費を贏け得るのである、けれども之をも忍び之をも厭はないのは、畢竟自己の虚榮心を充たさんが爲に多大の生活費を浪費して顧みないといふ事になるので、その半面には生活難を訴ふるやうになるのである、

社會の經濟主義も、近年は年を趁うて自足主義を離れて、頗ぶる營利主義に傾いて來たから、同じ職業を撰ぶにしても、成るべく利益の多いものを撰ぶといふことに爲つて來た、であるから社會多數の人は皆その方に趨くのである、少し縁遠いやうだが、富豪に必要の多いもの、例へば、金時計、金屏風、絹布の夜具、二頭立の馬車といふやうなものは、一般普通の人には誠に用が少ないからして、從つて夫等の業に從事するものは至つて數が尠ない、之に反して現今諸工場に働いて居る多數の者が製作するものは如何であるかといふに、或種を除くの外は孰れも吾人が生存に必要なる物を作るのである、けれども未だ全く生活に必要喫緊の物を作るとは云ひ切れない、併し是等多くの者が毎日勞作するが爲に、從つて一方には商工業の發達を促がすことが出來るのであるから、是もまた必要である、併し方今我國の狀態を視察すれば、それら商工業は隨分盛んに發達して居るけれども、その半面には農業の衰へて居ることは非常なものである、是といふも社會の一般が虚榮心に驅られてインフアクションに忙しいものから、それらの需要を充たさんが爲に、諸工場は之を作るのに忙はしく、從つて多くの人々が、耒耜を棄

て、夫等の工場に入いる、此く耕すものが漸次減少して來たから、成程人口も毎年殖えて行くが、別に耕地が減つたといふよりは、寧ろ數年前よりは新開地も出來、また耕地整理なども行はれて餘程面積は増したのであるから、全部遺漏なく是等が耕されさへすれば、さう今日のやうに穀物に不足を來す譯は無いのであるが、前にも云へる如く、之を耕すべき者が競うて諸工場に趨るから、自然田園が荒蕪に委せらるゝといふ有樣である、之は東京の、眞中に居ては迚も判らない、一歩都を踏み出して田舍へ行けば、決して予が言の虚偽で無いことが知らるゝのである、故に今日の最大急務は、一言にして之を蔽へば農業の奬勵に在りといふを以て盡して居る、



吾人の生活に必要なる物ほど澤山で安い

退いて考ふれば、維新の改革と同時に、大いに人心の嗜好が異なつて來た、それは一に西洋の物質的文化に眩惑した結果、神聖なる勞働を厭ふて奢侈を悦び、耒耜を抛つて筆硯を弄ばうといふ風になつたからして、その波及する所農產の缺乏を來たしたのである、或は卓上論の誚りを免がれないかも知れないが、目下世上で頻りに唱ふる所の米價の騰貴といふやうな現象も、一は其原因が此に存することであらうと思ふから、縱ひ遲くとも尙ほ爲さゞるに優ることであるから、今よりして盛んに農產の業を奬勵したならば、その不足は假令外國に仰いで見た所が少額のもので足りるだらうと思へば、盛んに之が保護奬勵の途を講じなければなるまい、是は決して個々の問題では無い、實に國家の政策としても必要のこと丶考へる、若し今日の如くにして放任して置いたならば、貧富の懸隔は倍々甚だしくなつて、生活難の聲は日一日と高まり來つて、實に取り返しの附かないやうな事になりはすまいかと、竊かに氣遣う

のである、一體自分の内で間に合ふものを、無理に他國から輸入するでもあるまい、

次に生活に必要なる物ほど
　淡泊になつて居る

例へば、空氣、水、穀食の類の如きである、吾人は偶々五もく飯とか、又は鯉こくとかいふものを口にすれば、その味は實に得も云はれないのであるが、如何いふものか直ぐに飽が來る、けれども空氣や水のやうに、吾人の生活に必要なる物ほど其味が淡泊で、而して飽ない、尤も是等に飽れば娑婆は御暇乞であるけれども、兎に角斯ういふ風になつて居る、若しも空氣や水などが、油のやうに濃厚かつたならば、迚も吾人は堪へられないのである、が幸に穀食の如きは天麩羅飯のやうで無く淡泊して居るので何時食べても飽が來ない、實に造化の功妙は驚くの外は無い、

併し人間には又慾望といふものがある、而して此は人間の通有性であるのみならず、

限りがない

のである、その限りの無いのが宜いので、それが爲に社會の發達も人類の進歩も出來るのである、若しも此の慾望に限りのあることが、恰かも如何なる美酒佳肴でも山海の珍味でも、胃の腑に一杯食べれば最早其上には容らないといふやうに限りがあつたならば、決して

人世の發達進歩

を期することは出來ないのである、けれども幸ひにして之に限りの無い所が價値である、誰しも云ふことであるが、十錢より二十錢、五十圓より百圓といふやうに凡て人間の慾といふものには限りが無いので、此の慾があればこそ勉強もすれ、働きもするのである、その勉強したり又は働くにしても、退いて吾人の精力に限りのあることゝ、一は各自に能と不能あることゝを自覺して、所謂

足ること知る

といふ事が大切である、若しも其範圍を越える時は即ち貪るといふのに流れるので、一たび其貪ぼるといふ荒野へ踏出しては、殆んど廉恥も何も無くなつてしまうのであるから、彼の心猿が飛び廻る五慾の枝を挽めて、意馬をして恣まゝに六塵の境に馳走せしめないやうに、所謂己に克つて禮に反るといふやうに、その慾望の網を弛めず緊めず、寛嚴宜しきを得るといふやうに敢して行かねばならぬ、

凡そ吾人は外面に滿足を買うよりは、心の中に調和が保たれさへすれば此上の快樂は無いものである、故にその快樂を得やうと思ふならば、必ずや造化の指導に悖つてはならぬ、

良人に愛せらるゝ秘訣

芳岡女史

私の兩親は申上ぐるまでもなく、孰れも嘉永または安政と稱へました年號の頃の出生で御座いますから、當今から申しますれば所謂舊弊の人物で御座い

ます、從つて何方かと申しますれば、先入主となつて居りますから、兎もすれば舊時の教育の事が出て來ますので、私は最も末子で御座いまして、幸ひにも明治の教育を受けさせられましたので御座いますが、まだ私が學校へ參りません幼少の折、時としては母が教訓せられますには、女子といふ者は後々餘所へ片附かなければならぬもので、古へより女子は三界に家なしといふのであるから、一たび片附いた上は克く良人に從はねばならぬものである、また老いては子に從ふべきものである抔と申すやうに、その何くれとなく女子の心得となるべき事どもを諭されましたものを、處まだらに記臆いたして居ります中には少々明治の今日には不向かとも存せられます節も御座いますが、併し大體に於きましては、今日に至るも尚は克く是を服膺いたして居りますが、どうも私初めさうで御座いましたが、若い時分といふものは老人の言ふ事に左程耳を傾けないもので御座いますが、併し一年々々と年を經るに從つてその有難味を知るので御座います、私も此方へ片附きましてから最早、二十何年からになりますが、是まで兩親の諭されました事、または私の狹い實驗に依りますと、良人が妻を愛さないといふよりは、妻たる者が良人に愛せらるゝ方法を講じないで、始終夫妻の間に何か隔てのある家庭など不愉快なものは無いと存じます、併し之には種々なる原因もある事でありませうが、その第一の原因は

夫妻間の主義が異なる事

に基づくものであらうと存じます、何だか主義などゝ申して四角張るやうで御座いますが、平たく申しましたならば、先の目的とでも申しませうか、凡そ貴賤貧富に拘らず、美しく治まれる家庭には、必ずこの主義の一致があるやうに存じられます、尤も多少教育のある妻君は、この主義を自から意識もしまた人に向つても發表も爲され得るので御座いますけれども教育の無い妻君になりますと、之に反して其主義を發表する事は出來ないのであるが、無意識

に之を實行して居ります、左ればと申して、無意識にして居るものは價値が無い、けれども有意識で實行して居るものは清く高いと云ふ譯では御座いません、何は兎もあれ一括して見ますれば、實行せられつゝある主義そのものが、家庭の娯樂を伴うもので無かつたならば、その主義といふものゝ價値は零で御座います、例へば、チョット散歩に參りますにも夫妻相携へて出て行きますれば、他から見ましては如何にも親密のやうに見えますが、良人は路行く美人に目を凝らし、妻は立派な邸や盛装の夫人に見惚れて居るといふやうでは、上部だけは一致して居ても、頭腦の中は別々でありますから、娯樂は那邊にあるのか薩張分りません、之では丸で影法師の道行きのやうなもので御座います、それで御座いますから、一週の勤勞を慰むるといふ、日曜の娯樂は、夫妻必ず共にするのみならず、彼の加納子爵の御主義のやうに、子供下婢等も共にするといふやうに致して居りますが、若しも何かの都合で別々に參りました時は、歸家してから互ひに其日の見聞等を談話して樂みと致して居ります、先づ之は一例で御座いますが、良人が何か事業を企つるに當りまして、その事が一六勝負といふやうな投機事業で無い限りは、之が妻たる者は喜んで其事業を助成しなければならぬものでありますが、兎角男子が新事業に手を出しますと、妻女たる者の多くは之に贊助の勞を執らないのみならず、時としては破壞を企つる等の事があるが、是等は深く愼しむべき事で御座います、一體女子といふものは短見で、男子方のやうに遠大の事は出來ないのでありますから、まづ側から之を助成する位の心掛けは欲しいもので御座います、

新婚の當初は、その交情の密なる事は飴の如き御夫婦が、僅か一年か二年經つか經たない中に、何時しか其熱情の冷めて了ふ御方が有りますが、是は實に面白く無い事と存じます、前方母の申されますに夫婦といふ者は毎時も變らず連れ添ふべきものである、然るに一朝それが破れるといふものは　互ひに

慣れるに従つて我儘を生ずるからである、故に夫妻の間に於ては

　我儘を厳制する事が肝腎である

この我儘といふものは、兎角人を邪道へ導くもので是さへ無ければ、何時の世までも夫婦は常に温かき交情を保つて行く事の出來るものである、之を約めて云へば、夫婦別ありといふ事であると申し聞かされた事がありますので、及ばずながら心の中に守つて居りますので、ツイゾ是まで衝突などいふ忌はし事を現じませんが、如何いふものか克く世間では、男子の方が婦人よりも此の我儘が多いやうに見受けるので御座います、それは一々申し上げませんでも糟糠の妻たる者が、良夫の立身した暁に一層の苦勞もなさるゝ事で能くお分りであらうと存じます、

　僅か一人の小兒にも乳母を雇ひ、小さな臺所へも手を下さないで、入浴に行くにも下女に七ッ道具を持たせ、而して小兒は其方除にして置いて、自分のみ化粧餝に打向つて緩々と眉を撫で襟を作り、晩餐

に良人の御機嫌を附込んで晴衣または流行品の謎をかける奥さんの多い世の中に、一向に良人の成功を祈つて、一家の始末に餘念なく、小さな澤山の小供も手一つで育て、夜は一時二時までも針仕事などを爲して、たとひ一錢半錢の仕立賃までも儉約し、それを滋養ある食品にかへて良人の膳を賑はして而して終日の勤勞を慰藉したり、または種々と家計を繰遣つて辛い門をも潜り、斯くして一年三百六十五日專心一意献身的に働く妻君こそは、如何に貴いことでありませう、啻に貴いのみならず、その良人も必ずや感謝の念に満ち充ちて　天にも地にも掛け換への無い愛すべく敬すべき吾妻よと感ずるに相違御座いません、依つてその親密の交情は、千代八千代まで變らぬであらうとは、誰しも想像する所で御座います、然るに妻君の辛苦艱難が漸く功を奏して、良人の地位が漸く高まるに従つて、そろ〳〵良人の我儘が芽を吹き出して、動もすれば他の増花の色香に溺れて、遂に糟糠の妻に對する愛は涸れて了ふの例

は乏しくないので御座いますが、是は專ら男子の我儘に基くには相違御座いませんが、婦人もまた境遇に由つて、良人に對する態度を鋭敏に轉化しないからであらうと存じます、併しお化粧をして遊んで居よとの事では御座いませんから、この邊はお取り違ひのないやうに願ひます、

然らば如何したならば善いかと申すに、まづ良人が既に成功の地位に達しましたならば、少し語弊があるかは存じませんが、妻君たる者は姉女房のやうな精神に、若やいだ態度を加味するのが必要ではあるまいかと存じます、元來男子方といふ者は、極々生眞面目に見える人でも、存外理性に幼稚な所があつて、只容貌の美しい婦人とか、または言巧みな女子とかを愛する特質のあるやうに考へられますから妻君たる者は此の邊の呼吸を呑込んで注意するのが肝要かと存じます、實際昨日までは外見には關はなかつた妻君に取つては、如何にも滑稽らしく考へられて、却々それはチヨツと出來難い事ではありませう、けれども家庭の温味を永久に持續する爲には、是また止むを得ない事と決心しなければならぬので御座います、それをしたからとて、決して良妻たるの資格に傷が附くのでは御座いません、却つて一層光りを増すので御座います、是等に就きましては、西洋の御婦人は感心で御座います、と申しますのは私が米國で交際して居た或妻君は、最早年は五十位で御座いましたが、時としては其良人の前で、實に無邪氣なあどけない素振を致し、恰も花嫁が花婿を慕ふやうな表情を致し、もしも傍らに人なき時は結婚前後の感情などまでをも縷々語り出づるのみならず、接吻までもすると聞きました、斯う申すと如何に可笑しく且つ狂じみたやうなと思召さるゝで御座いませうが、一口に申しますと、西洋の婦人は、確かに我國の商賣人の手練手管に熟達して居ると申して宜しいのでありますから、あらゆる方面から男子を悦ばせ得るに相違御座いません、固より商賣人

の態度などは、苟くも良家の妻女たる者の倣ふべからざる劣等のものでは御座いますが、併し彼等が男子方を慰藉する所の技倆を取つて、本統に自から愛する良人を慰むるのは、何も耻づべき事ではあるまいと考へて居ります、そこで能ある鷹の如き妻君も良人の前には其爪を藏して鳩のやうに大人しく、また可愛らしく何でも彼でも良人に寄りすがるといふ態度を取つたならば、決して良人に悦ばれぬといふことはあるまいと存じます、否、これは私の實驗談で御座います、

一體我國の妻君方は、年を取ると餘りくすんで了ふのですが、西洋では二十歳から三十歳頃の者と、五十歳以上の者との化粧料とを比べて見ますと

五十歳以上の方が三倍

も要するさうで御座います、と申しますのは、年の老けるに隨つて天然の不足を補ふといふのが本旨で御座いますさうで、大部我國でも近頃この風が見えますが、成程それはさう無くては叶はぬ事と存じます、兎角小兒澤山の妻君方は、最う斯う小兒澤山で年を取つては杯と、餘りに斷念が善過ると云ひませうか、お化粧といふ事には全然注意を拂はぬ方が多いやうで御座います、お化粧即ち身だしなみは、必ず身分に應じて十分に注意のありたいもので、年の老けた上に構はなかつたら、それこそ何れ程汚いか知れません、

容貌精神ともに華やかに

また何時までも若やかに努めるのは、只管に良人を慰藉するの方便、即ち永久に愛を保持するの手段であると覺つたならば、決して少しも氣耻かしい事も何もあるものでは御座いません、





舊庵梅

須藤南翠

「お香でございますか、有かたうございます、お陰様で何うやら斯うやら卒業だけは致しましてございますよ。はい、左やうでございます、二十一になりました。當りまへに參りますと去年卒業すんでございますから、丁度一年後れましてでございます。年頃の方から見ますと、全然二年といふもの、後れた理になりますの。はい」

「斯う申し上げますと、餘り愚痴ばかりお聞せ申すやうなもんですがね、昨日も貴女、校長さんの處へお香を伴れてお禮に出ますとね、通らなくつても可いのに、何うしたものだか、偶然と以前の宅の門を通つたらうぢやございませんか。貴女でございましたねえ、大層古木で姿致が面白いと被仰つて、夕月の枝の間にかゝつた處を、唐詩のやうだなんつて、御賞美下さつた梅がございましたでせう」

「えゝ。爾うでございます、馬鹿に厚い萩の垣根の横つ手にあつた、――爾う〳〵、根廻りに蕗の薹が

彼の梅なんでございます。あれが貴女、何を途惑ひ致しましたのですかね、遅ればせに星のやうな花を開いてゐやうといふものです。貴女の前ですが、私は泣きましたよ。お香を見ますとね、可憐さうに貴女、彼女も目に一杯涙を有つて、ぢつと下を見てるやうぢやありませんか。お恥かしいお話しでございますが、母子して貴女、建仁寺の破れから、無躾な他人様のお庭を覗いて、立竦みになつて泣いて居やうといふものでございます。夫れが貴女、一分や二分の事ぢやないんですもの、其間には他人様も通りすがりに、妙な奴だと不審をお立てなすつたでもございませうし、お笑ひなさつた方だつて、必とあつたに違ひございませんよ』

『爾う致しますとね、榛木さんの奥さんで在らつしやいますか、是れはまあお珍らしい、おや〳〵嬢さんで在らつしやいましたね、大層お成長くおなんなすつたものですから、お見それ申して失禮を致しました。と、馴々しく言つて下さる方がありましたの』

『餘り極りが悪いもんですから、赧顔になつて、其方へ向き直りますと、貴女、何うでせう、夫れが只今私どもの舊宅に住んで居る、逢田の内儀だらうぢやございませんか。私は顔から火が出ましたよ』

『おや〳〵、逢田さんの奥さんでございましたか、誠に御無沙汰ばかり致しまして、と、普通の挨拶を致しますと、何とまた皮肉な言柄ぢやございませんか。え、貴女』

『此邊には近頃異人館が殖えまして、悪い犬ができたものですから、碌と他人様の御足が入りませんが夫れでもねえ、能く道もお忘れなさらないで、と、斯う申ましてね、ぢろ〳〵と私母子の風俗を見て居るんでございます。田圃中の一條路で、蛇に前途を横斷れたやうに、私は慄然と致しまして、何とも口が聽けませんでしたの。はあ』

『後で辛と了知ましてでございますがね、逢田の方では、私どもが何か無心にでも參つたのだと誤解へまして、網を張つて防禦いだのださうでございますが、私にして御覧なさいまし、良人の紀念の大切な娘には、拭きも消しも能きない惡名を着せられ、お負に散々人を苦しめて、犬の小屋のやうな家ではございますが、お爲ごかしにして捨賣同樣に賣らせてしまひ、私どもが移轉をするかしないかに、何と貴女何うでございませう、直とまた登記の書替をして、自分で温々と住込んで了つたらうぢやございませんか。私がいかに母一人子一人で胼胝を切らして、しかない生活をしてゐませうとも、踏だり蹴たり、散々苦い目に遭はされた者の處へ、誰が貴女、頭を低げて參るものですか。爾うまでしなければ、明日が日も過せないやうな羽目になりましたら、私は電車に轢かれて死んで了ひます。爾致しますれば、葬式金も出來ますし、お香にだつて多少の手當か頂けますから、後に心が殘らないと言つたやうなものでございます』

『其んな事を串戲にも言ふなと被仰るんですか。いえ、まあ物の比喩が爾うぢやございませんか。こゝへ參つて通り切れなかつたのは、逢田に何の關係もない事でございます。間違ひました、關係はない處ぢやないんですが、立竦みになつたのは、何うあつても、私もお香も忘れる事の能きない、深い〳〵、苦しい、切ない思ひ出があるからだつたのでございます』

『難有うございます、聽て遣るから夫れを話して、些とでも寬げと被仰つて下さるんですね。貴女、お願ひでございますから、何うか聽て下さいまし、言はして下さいまし、身貧なほど口惜い、殘念な、情ないものはございません――』

『お香をあの女學校へ入れますには、並大體の苦勞ぢやございません。世に聞えたといふ程でもございませんけども、菲木義郷といつた外交官の娘で見ますと、親父が存生の時のやうには能きないまでも、出

來るだけの教育はさせなくつては、私が死なつた義郷に義理が立ちません。でございますから、虚榮を張つて、交際をして、大酒をして、手の廻るだけの借金をして、あの逢田なんぞに甘い汁を吸はせて遣つて而て自分だけ遊つて了はれた後始末もございましたが、夫も是も拋棄り放しで、彼女を無理から女學校へ上げたのでございますが、生憎と逢田の娘の峯子と申すのが、同時に入學致しまして、何ういふ御都合でしたか、席まで隣り合でゐたのでございます。逢田は私が微祿致しますと、間もなく段々羽振が利いて參りまして、今までは直に月給取を對手に、信用貸を致して居りましたのが、急に地所とか家作とかを抵當にして、何でも夫れが流れ込むやうな風の貸方をするやうになりまして、利の取立の厳しい癖に、娘には元も利も附ぎ込むほどに甘いのでございますから、峯子の我儘と申したら、迚もお話しになつたものぢやございません。でございますから、私が質素に〳〵させますと、向ふは華美に〳〵致しまして、元々女の子でございますからねえ、幾ら手前が厳しく申しましても、お香にして見ますと、夫れがまた羨ましくッて、少しでも色の目立物や、光りのある物は、一切厳禁致します私の方針が、殘酷だとか、吝嗇だとか、彼女が心では恨んでゐたのでございませう。

「暮の休暇になつた時分でしたらう、私日限仕事で忙しかつたものですから、單身でお湯に遣つたのでございますよ。灯が點いてから歸つて參りましたが、豆ランプを點けて、机の處へ參つてでて〳〵致して居りましたがね、私が食事を了つて臺所へ膳を出しますと、入代りにお香が膳に向ひました。夫でも私は裁縫が忙しいものですから、夢中になつて仕て居りますとね、其處へお香が參りまして、高砂模様の三枚襲でございましたが、裾の處を手に取つて見まして、これ峯子さんのねと申しますと好いわねえと言つて、熟と眺めてゐます。其様子がいつもと違ひますから、不然と面を見ますと、驚きま

したよ、眞白にお化粧をして、お負に紅まで塗けてゐたらうぢやございませんか。何しろ今まで白粉のし
の字も塗させた事がないのでせう。熟と見ました私の目が、尋常ではなかつたと見えまして、夫れを見る
とお香は耳を眞紅にして、遁やうと致します。お待ち！　別に高い聲は出さなかつた意ですが、お香はぺ
つたりとお尻を落しまして、がたがた慄えながら、白い頰を涙の珠がころ〳〵轉つて居ります」
「お前の顏を御覽、一體何うしたといふ事です」
「お香は俯向いて唯だ泣いて居ります。私はお香の泣面を見ますと、いつでも胸が一杯になりまして、
父が存生だつたら、此んなにめそ〳〵泣くやうな事もなく、もつと活潑で、言語にも斟酌がないだらうに
父は娘を愛さないで、酒を愛して亡くなつたから、一人の娘は日蔭の草のやうに、根が張らずに掛けて了
つた、何たる可憐さうな子だらうと思ふと、死だ良人まで恨めしくなるのでございますよ。夫れが貴女、
此時ばかりは腹が立て〳〵、奇麗に白粉をつけたお香の面が、面が憎くつて堪りませんから、餘つ程擲り
飛ばして遣らうと思ひましたの。はゝ」
「お前が紅白粉を持てゐやう筈がないが、誰に貰つて塗けました」
「まだ推默つて居りますから、私は心底腹が立て參りまして、起上つて良人が大禮服の時に用ひました
飾の劍を持つて參つたのですよ」
「言へないだらう。もう阿母さんには歷然と判明つてゐます。お亡なりなすつた阿父樣のお位牌にまで
泥を塗るやうな子は、春木の家には不用です。言はなければ宜しい、お前一人は殺さないよ、母さんも一
緖に死にます。さ、言はないかい。言へなきやお言ひでない、もう聞かうとは思はない」
「此んな事を言つて威嚇したのですが、何も彼んな物で、人は斬れさうな筈がございません　、其處が

少女ですね、お香は蒼白になつて了ひまして、御免なさい、申します、次から致しませんから、何卒御免なさい。と歯の根も合はないのでございますよ」『さあ、被仰い！』

『申します。蜂子さんが塗けろつて、白粉下も何も貸して下すつたの』

『蜂子さんと一緒にお湯に行つたのですね。怪しからない。いつも母さんが何と言付けて置きました』

『次からはもう、何んなに苛められても、一緒には参りません』

『何です、苛められるとは、誰に苛められるんです』

『餘つ程私の聲が狂つて居たと見えまして、娘は眼の側だけ圓く白粉の剝た顔を上げて、吃驚して見て居ましたが、畳みかけて私が尋ねるものですから遂に事實を白狀致したのでございます』

『蜂子さんは、私の事を貧乏屋敷の古雛だといつて、苛めて



るんです。幾ら元が好くつても胡粉が剝たり、衣裳が古ぼけたりしちや、穢くつて誰が見る奴がゐるもんかと云ふんです』

『斯う言つておい〳〵泣きながら、女の兒の癖に白粉一つ塗けられないんだから可憐さうだとつて、塗けてくれたので、可厭だといへば、明日でも何時でも、朋輩を語らつて苛める。學校でも峰子さんの味方はゐるがお香の味方はないから、峰子さんに苛められると、級友全體に苛められるやうなものだから、彼の女には抗爭が能きないと申すのですよ。私は散々意氣地なし〳〵と申して、先生は何と言てゐる、まさかに先生までが峰子に阿諛つて、お前を非に落すやうな、不公平はなさるまいと申しましたらね、貴女、何と呆れ返るぢやありませんか』



『私が一遍先生の處へお賴みに行て下さいといふのに、阿母さんは、其んな事をして、萬一人に知れや

うもんなら、先生も學校へ濟ないだらうし、實際お前が好く成績ても、他には阿諛つて佳い點を貰つたやうに言はれるぢやないか。其んな不正な事は、阿母さんは大嫌ひだと被仰つたでせう」

「何うです。また夫れに違ひないぢやありませんか」

「けどもね。――お香は斯う言つた限で、もう何とも言ひませんでしたが、貴女、峰子はきつと、月に一度は先生のお宅へ御機嫌伺ひに出ますつてね、而て何でも其の度に、三圓以上五圓止の手土產を持て行くんですつてね。まだお驚きなすつちや不可ませんよ、夫でね、試驗の前には、何處を復習しろ、何を調て置けと、他ながらお指揮なんですとさ。夫れをまた峰子が大自慢で、氣に入つたお友達に內々で知らせるもんですから、峰子が素ばらしい勢力があるんだと申します。夫にね、親父の新木が何う傳手を求めましたか、校長さんに取入つて、何でも學校の近所に抵當流れの家があつたのを、大分に手入をして、誰か他人の名義に書き換へて、其實校長さんに進上したのだと申す事なんでございました」

「貴女は何うお考へになりますか、夫が當節の運動といふものかは存じませんが、私は石に被り着いても、其んな寂しい、不淨な事はしたくない、娘にもさせたくないと思ひまして、娘には其の不心得を諭しまして、孤影煢然でもいゝから、正しい道を履んで勉强しろと申しました」

「夫から此方は峰子とも交際なかつたと見えまして、餘りいさてことを聽きませんでしたがね、其の代りお香が何だかいぢ〳〵して來て、何うやら影までが薄くなるやうでしたが、今度は貴女、私の方へ取つてかゝりまして、何處を何う探し出したものですか、古證文を持ち出して、夫れがまだ濟口になつてゐないとかで、突然に執達吏を遣しましてね、無けなしの財產を差押へて置いて、何も彼もまでにするのではなかつたが、證文の効力を試すために、假執行したのだと申して、彼れは利を負ける事にして、元金だけ返

せば可い。併し今右から左と言つても、失禮ながらお貯へがあらうとも思ひませんが、實はこゝに斯いふ御相談があるのですと、深切ごかしに切込みまして、彼の家を懇望してる人があるが、家は實際根つぎ前だから、當然に評價をすると幾ら〳〵が正當の處だけれども、此方では義郷さんの唯一の御遺産だし、先方は懇望するのだから、幾割糶り上げて、斯いふ位で手離せなんつてね、甘い事を申すんですよ」

「お香は貴女、到頭苛めに苛め拔かれて、心臟病になつて了ひます。お醫師様は入院させなければ、生命が覺束ないと被仰る。快復た處で、二三ヶ月は海岸へ轉地をしなくつては、所詮元の身體にはなれんといふ場合でせう。此の子を殺しては、夫こそ赤木家が斷絶するのですから、何うしても助けなくつてはなりません。夫れには入院させたくつても、お金がない。夫れかといつて、假にも家作持ですから、赤十字社や慈惠醫院の施療は受けられませんし、二進も三進も不可ない處へ、一方から差押へをして、一方から賣家の相談でせう。何にしろ、目前に我が子の命を繋ぐお金の入る時ですから、時の相場が何んなものだか、其んな事を聞合せる暇はありませんやね――」

「後で氣が着きましたが、お香の病氣で金の入るのを見込んで、無効になつた古證文に墨を入れて、執達吏を廻して置いて、裏から家を安く買はうといふ魂膽だつたさうですが、其時は夢中ですから、早速道具を高輪の親戚に預けて、私はお香を伴れて病院へ參つたのです。何でも、峰子はお香が邪魔になり、逢田は私どもが居ると都合が惡いので、此んな風に苛め出して了つたんださうです」

「其の沒落の時が、あの梅の星のやうに花の白んだ時なんでせう。お香はお蔭樣で一年後れましたが、新聞で評判の好い私立の女子校には懲々しまして、今度は公立の學校へ上げましたから、まあ〳〵無事に卒業も致しました」

「學校を一年無駄にした事やら、良人の紀念の家屋を安く買れた事は、惜いには違ひございませんが、今日となつて見ますと、貴い犠牲なんださうで、お香は全く難有い教訓だつたと申して居りますよ。はい」

「惡名を被せられた事ですか、是れを申すと、此の腸が沸騰へりますから、夫れだけは御勘辨下さいまし」

（完）



家庭に於ける心理學の應用

高嶋平三郎

想像作用の害點

想像作用の害と申しましても、一定したことのあるのではなく、つまり其働き方によつて利害共に起るのであります。今想像の働き方の有害無益のものを擧げると、先づ次の三種を算へることが出來ます。

(一)妄想　これは想像が不道德のことに向つて働くのです。すべて倫常に外れたことを企て考へるのはいづれも妄想でありまして、之を考へたばかりでも人の品格をおとしますが、更にすゝんで之を實際に行に現はすやうになつては、たゞ道德の罪人であるばかりではなく、多くの場合には法律の罪人ともなるのであります。それ故平生人の道に外れた想像は、努めておこらぬやうにし、たゞし自分の心中に少しでもかういふ考が浮んだら、惡魔の如くに惡み厭ひ、すぐに之を消滅せしめる工夫をせねばなりません。妄想ほど人を苦しめ人を墮落に導き易いものはありません。妄想は全く惡魔の子であつて之が生長するに從ひ人をして全く惡魔とならしめるものであります。

(二)空想　妄想は行へば行へぬことはない。たゞ之を行へば道德又は法律の罪人となるやうな惡事邪行となるのでありますが、空想は之と違つて行ふことの出來ない想像であります。それゆゑ空想は道德に害を及ぼすとか、人に迷惑をかけるとかいふことは少いのでありますが、之が爲に自分の受ける害は決して少くないのであります、隨つてあまり空想に耽つて居れば延いては他人にも害を及ぼし、道德にも背くことにもなります。たゞ想像が直ちに不德となり、害とならぬだけのことであります。一體青年の頃まだ實際に世の中の經驗をせぬ者は、空想に耽つ

て身を誤まるやうなことが多いものであります。これは思想と實際との關係が分らず、隨つて自分の考へて居ることが實際に行ひ得るかどうかといふことを省みず、たゞ無暗に乏しい材料から自分勝手の想像を逞しうするからであります。

獨逸のお伽噺の中に一人の牛乳しぼりの女が牛乳を搾つて鑵に入れ頭の上に鑵を頂いて市に賣りにゆく道すがら之を賣つたら、幾間になるだらう。さうしたら幾錢で何を買つて幾錢で何を買はう。上衣はいくら靴はいくら、いやリボンも欲しい、花簪も入るとあまり想像に耽つて途のわるいのに氣も付けずに歩いて居たものですから、石に躓いてころび、牛乳を皆翻してしまつたといふのがあります。又イギリスの子供の繪本の中に、二人の獵師が山に入つて熊を見付けましたがその日は打捕ることが出來ませんでした。しかし捕れば大金になる熊を見付けたことでありますから、二人はいろ〳〵と空想に耽つて、明日熊が捕れたらこれ〳〵にしやうと、もう捕

つたつもりで喜んで前祝ひに大そう飲食して寢みました。翌日山に入つて熊を見付け二人で筒口をそろへて打ちましたが、見事に外れて熊は非常の勢で二人を目がけて追かけて來ました。一人は木に上つて僅に難を免れましたが一人はとう〳〵熊に倒されました。そこで死んだ風をして居ましたら熊はその面や頭を舐めてそのまゝ山奥深く去りました。木に上つて居た方の獵師は危險の虞のなくなつたのを見濟まし下りて來て死んだふりをして居る友に戯れて「お前は熊と話をして居たやうだつたが熊は何といつたか」と申しました。さうしたら友は答へて「我を打捕らぬうちに皮の價値をつけるな」といつたと申しました。是等の話はいづれも空想の害あつて益なきことを戒めたものであります。

(三)邪推　意地のわるい姑などには何事にも一々邪推して嫁をいぢめるものがあります。すべてまはり氣といふことは皆想像がわるく働くのであります。どうしてかういふやうになるかと申しますれば一つ

は人の性分にも由りますが、一つは少い時からの生立がのんびりして居ないで、他人のためにいろいろ虐げられたことのある爲めに、生存の必要上かやうになつたのです。それゆゑ邪推といふことはまゝ子に多いものであります。年はもゆかぬいたいけ盛りの子が他人に氣がね苦勢して、一寸した他人の目つきや言葉にも叱られたのではないか、嫌はれたのではないかといふやうに考へて、そのそぶりを見せるのはまことに言ひ樣のないほど可愛さうなものであります。どうぞ家庭に於てはすべて秘密といふことなく、皆うち解けてたのしく美はしく暮し、邪推などいふ厭ふべき想像作用のおこる餘地のないやうにしたいものであります。



邪推の多い人ほど困ることはありません。こちらでは何とも思つて居らぬこと、否時としては先方の人の爲を思つて深切心から言つたり爲たりする事を大さう曲げて取り、外道の逆怨みとかいふやうに一人心に怨恨を懐くといふやうな場合も少くないのであります。かういふ人は實に氣の毒なものでありまして、此の世の中を渡るにどの位不愉快であり、又心細いで

ありませう。すべて人の心は鏡のやうに互に反射するものでありますから、こちらから少しも邪推などせずすら〳〵とすなほの心を持つて交際すれば、先方でも亦打解けて來るものでありますからお互に人の感情を害すべき想像は全く心から取り去る樣にせねばなりません。併し多くの人の中には實際我を陷れ樣とか害さうとかいふ敵對心を持つて居る人もあるかも知れませんから、勿論或場合には用心もせねばならず、隨つて色々と想像も働かせねばなりませぬが、少くとも父子兄弟夫婦等の間では互に隔て心を去り、邪推の跡を絶つ樣にせねばなりません。

想像と人生

前にも一寸述ましたやうに、人生は現在に不足を感じ、想像に由つて之を補ひ、之に憧れ、之にすゝむに由つて進歩するのであります。

それゆゑ人に全く想像力がなければ、少しも進歩が生せぬのみならず、吾々の心は如何に貧しく如何に淋しいでありませう。試みに皆さんの心の中を反省して御覧なさい。その中に充ち滿ちて居るものは殆んど想像の產物でないものはありますまい。人の心の貴い所以はたゞ現在の境遇事實に束縛されないで、遙に之を超絶した自分の滿足すべき狀態を作り得るからであります。然るにたゞ現在の狀態ばかり見て未來を察するの明なく、現在財產があつて立派にして居る人ならその財產がどうして出來たかを問はず又その人物がどういふ人であるかを問はず、之を偉いやうにおもつて之を尊重し、現在貧しく卑して、身なりも汚れたればその人物の如何未來の如何も考へずして之を馬鹿めるが如きはその人の心も推し測られて、誠に氣の毒のことであります。人には此の想像の力のある爲に社會に於ける貧富貴賤など不公平な階級を打破して、公平な滿足を得ることが出來るのです。乞食の衣服を纒ひ、王侯の心を持つて居る人と王侯の衣服を纒ひ乞食の心を持つて居る人とを比較したらどうでありませうか。人としての價値はむしろ前の方にありはせぬでせうか。つまり

人の價値の出る根本は心にあるからです。心の作用中想像力はよく現在を超越して理想の境に遊ばしめるものであります。前者は即ち此の種の人であります。それゆゑ人はどんな境遇にあつても、失望落膽せず、心に高き理想を畫き、死に至るまで之に憧れ、之に向つて進まねばなりません。

又想像は人に最も高い慰安を與へるものであります。一體現在の娯樂は慰めや樂みよりも、時とすると苦痛を多く與へることがあるものです。例へば人と酒宴してその時は如何にも愉快のやうであつたが、後に至つて胃腸を害して樂に幾十倍する苦を受けるとか、或はかねて樂にして待ち焦れし祝日が來たら風雪であつて外には出られず、約束の人も來ず、實に不愉快に一日を過ぐしたといふやうなことが多いのであります。然るに想像の樂には決してかやうな不愉快は伴はず純粹に快樂ばかりを受けることが出來ます。併し想像の樂は現在に受けるものより弱いのが普通でありますが、弱くとも害がなく且つ永續する方が人を慰めることは多いのであります。いぶせきわばら家に一穗の寒燈をかゝげ、夜更けてまで子供の衣服を縫ふ手を休めぬ母の心は何によつて導かれて居るのでありませうか。それは勿論いろいろ込入つた心の作用がありませうが、子供の生先を想像し所謂「匍へば立て立てば歩め」といふやうに先の先きまで考へて來ると母の心中には、男の子なら立派な青年女の子なら美しい年ごろの娘が畫かれ、之が眼前にちらつくやうになつて、苦しい中にも思はずほゝゑまれて、針の運びもはかゆくことでありませう。ア、世の中に此の想像の慰めなしにどうして私ども弱い人間が困難と闘つて、最後の勝利にすゝんでゆくことが出來ませうか。想像力の乏しい人は實に此の力強い慰安者から見放された人です。如何にも氣の毒なことではありませぬか。

又人品の高下も想像の如何に由ることが多いのであります。俗にはたゞ顏容や衣服態度で人の品を定めますが、眞の人品といふものは決してたゞ外面の

裝飾などで定まるものではありませぬ。いくら美しい衣服を着ても高價なる裝飾を施してもその人の心に、劣等なる想像が充ちて居るか、又は現實のことにばかり、心を奪はれて全く想像の缺けて居る人であつたら、到底「威あつて猛からず」といふやうな品位を保つことは出來ませぬ。之に反して理想の高い思想の堅固な人は、たとひいくら貧しい生活をして居ても何處となく人をして尊敬せしめる品位が現はれるものであります。婦人の美貌もその通りでありまして、いくら化粧に心をやつし、裝飾に意を用ひても、内心がいやしく思想が進んで居なければ、高尚なる男子を引き附ける美は決して生ずるものではありません。これは心と身體との關係上爭はれぬことであります、今日心の修養を等閑にして身體外面の飾りばかりで、美貌を得やうとし、又かやうな者が持てはやされて居るのは、つまり男子の品位がまだすゝまぬから、眞の美の判斷が出來ず又その要求も起つて來ぬからであります。將來世の中がだんだん進み、男子の趣味も向上して來ましたら、眞に心から高尚なもので、その美が肉體に現はれたのでなければ美とせぬやうになるでありませう。成り上り者の品が悪いといふのは、物質は成り上つても精神が成り上らぬからであります。ゆゑに人はいくら貧しいあはれな生活をして居ても、想像は高尚にして理想に活きるやうにせねばなりませぬ。

鶯の啼音

菅形春庭

鶯といふ鳥は、今更めて申すまでもなく、よく皆樣御承知の、所謂鶯茶といふ一種燻んだ茶色をした羽翼の小鳥で、その色から申したならば、左程取得のある鳥とも云へないのであります、けれども其啼音に至りましては、如何なる猛き武士でも、又は病みはうけたる老嫗の心までも恍惚として耳を傾けしむる、一種異樣の蠅舌を有つて居るのであります、

その一種言ふべからざる媚喉から發する音に就ては、放心して之を聞いて居りますれば、まだ淡雪の消えやらぬ春の初めに啼く音と、梅や櫻をできませたる春の央に啼く音と位の差別は分ります、けれども其他の音は却々容易に分るものではありません、斯くいふ私も、實は素人でありますが、年來下手の横好で斯鳥を飼養して居りますので、聊かその啼く音に就て、春の眠氣醒しに少しばかりお咄しをして見やうと思ふのであります、併し果して眠氣醒しが却つて眠氣を催ほせしむる種子になるかも知れません、其は一應讀んでの上の御思案に任せるといたしまして。



サテ鶯の啼音は三ッ兒も能く申しますやうに、一寸と聞きますれば、單にホーホケキヨーといふだけのやうに思はれますが、却々さうでは無い、昔直胤といふ人が著はしました宇久須比考といふ本に依りますと、左の

如く書いてある。
藪吟、假名口、引假名口、文字口、キヤコ、惣平口、種屋口、此他藪口に渡れり、たとへば須磨と云ふ文字口の鳥に附兒にすぐれし名鳥出來、此名を明石と付る、此明石の附兒に名鳥出來、村雨と名づく、村雨の附兒を松風といふ、
と記されてある、斯樣に藪口に分れては居るもの、それは時代々々の好尙によつて名けられたもので、今でも隨分澤山に分れて居るが、先づ之が重なるものを擧げて見れば。

第一が惣平口

といふのである、一體鶯の啼音は、總て上中下の三ッが揃はなければ完全とはしないのであるが、却々それは望むべくして得られない、ソコデ惣平口のものを云つて見れば、上はヒー、中はホー、ホケキヨー、下はホ、、、、ホケキヨーといふ工合に、總て啼きじりを輕く引くのである、尤も一名是は假名口と名附けるのである、といふものは、丁度小供が手習初めにイロハを習ふやうに、鶯の啼音の稽古としては一番習ひ易いからで、其をまた何せに惣平口と呼ぶのかと云ふに、それは天保年間に、上野の輪王寺宮樣附に井口惣平といふ者があつて、初めて此音を啼かしめた所より此くは云ふのである、であるから、其迄は江戸に其樣名前はなかつたのである、故に其以前の事は判然しない、次に流行たのは何であるかといふに。

第二はキヤコ口

である、之は惣平口の啼じりを輕く引くに反して、極めて鮮かに劃然と句切りを切るので、即ち上はヒー、ホケキヤコ、中はホー、ホケキヤコ、下はホ、、、、ホケキヤコといふので、是は明治の十年頃までは盛んに流行したものである、それといふも此啼聲は、如何にも假名口に比して艶があつて粹に聞えたからである、然るを其後に至り、神田小柳町の種屋某といふ者の魂膽で。

種屋口一名文字口

といふ新奇軸を啼かしめたのである、是は今現に行はれて居るのであるが、それはキャコロと假名口とを折衷して啼かしむるのであるが、何にせよ先方が硬まりホツケき來て居るので、それを上はヒー、ホケ、コ、中はホー、ホケ、コ、下はホ、、、、ホ、ケコとなどゝ啼き習はしむるのであるから、その根氣も大抵のものでは無い、けれども種屋某は終に之を成功したので、今尚盛んに種屋口と稱して持囃さるゝのであるが、是に就て或人は此下音の間に玉の結び數があるのを最上とするのであると云はれたけれども、其はその後の注文である、去れば好事者の注文によつて、上はヒー、ホケ、エコ、中はホー、ホケ、エコ、下はホ、、、、ー、ホケ、エコと調子の變つたものを良いとするとか、イヤ種屋口の本統の啼音は、上がヒー、ホケコオ、中がホー、ホケコオ、下がホ、、、、ホケコオといふのであると論ずる人があるけれども、何分鶯といふ鳥は精々長生をしても十年位が關の山であるのに、それ自身が歴史を暗んじて居る譯でもなく、また世に慥ふな記錄が遺つて居るのでも無いから、從つて判然とした事は十分に解らない、ツマリ其等は同じ種屋口でも、附兒の音や節や艶といふやうなものに依つて變遷したものであらうと考へる。

全體鶯の啼音といふものは如何に賞美せらるゝものかと云ふに、聞く所に由れば。

第一は音の品格

であるさうです、成程それはさうなくては叶はぬ事と、我等素人仲間でもさう申して居る、而して

第二は音の艶

ださうですが、世間の語り物などを聞きましても、如何に音聲に品格があつても、其品格のある間に此艶氣といふものがないと客を引付ける事が出來ないと同樣です。

第三は咽喉の玉結び

といふのであるが、この玉結びといふものは丁度語り物のサワリと云つたやうな格で、最も甘味のある

所で、人の心を恍惚とならしむるも實に此所に存するのである。

第四は啼方

であると言ひますが、是は前にも述べた如く、時代と共に嗜好の變遷がありますから、是は其時々々の啼音を最良とするより外ないのです、丁度今より十七八年以前から、此啼音に就て何とか變化させたいといふので、其道の人々は種々に苦心して居るとの事であるけれども、いまだ其後の變調は出て來ないとの事である。

啼く音の事は先づその位で切り上げまして、序でに少しばかり此鳥の性質をお話いたしませう、御承知の如く、鶯の身體は極めて細小なるものでありますが、その悧口な事は實に驚くばかりで。

卵を產むのは四月中旬

であるが、雛を孵化のは五月に入つてからである、ソコデ其卵を產みますにも、決して人家の近い處や、又は平地などには巣を營むものでは無い、それといふも、一は人の爲に捕へらるゝ事を恐れ氣遣ひ、一は蛇などの襲來を避くるが爲である、それ故に巣は大抵平地よりは一丈二三尺も高い樹の枝か、または地勢によりては四五尺位離れた處に營むのである、

而して

其構造が最も巧みで

あつて、根笹の枯れて白くなつた柔らかなもののみを集めて來て、大凡五六羽の雛が棲むことが出來る程の大きさにぐるりと取卷て造るのである、それさへ隨分巧者であるに、出入り口は其横の方に直徑凡そ一寸位の圓い穴を開けて置くのであります。

一たび雛が孵化ますと、親鳥は時々出でゝ餌を求りに行くのであります、けれども其が巣に歸つて來る時には、決して直ぐに巣のある所に下りるものではない、必ず。

一たび他の場處へ下りて

而して其から本統に巣のある方へ行くもので、その行くにも彼方此方と樹の枝を潜り〳〵つて巣へ歸る

ものであるから、却々容易に素人などが捕らうとて、決して捉れるものでは無い、それから是は少し黒人の云ふ事ですが、雛がまだ巣の内に在る間には、かいわり、裸子、だいし、小ばり、大ばり、さきじらみ、さきびらき、小いてふ、ぶつと出、ざる尾、牛尾、ばらり、つめを、かごで、獨りゐなどいふ種々の名稱が附せらるゝのであるが、却々一人前に仕立てるに並大抵の困難ではない、斯く非常な困苦をして飼育ても、雄鳥は決して啼くものでは無い、それは雌鳥に限るのであります。

東西婦人の美容術

孤舟女史

化粧は婦人の身嗜みで、色の白いのは七難隱すといふ古い諺もある如く、先づ我國で化粧といひますれば、誰も彼も白粉を塗つたり臙脂を注したりすることを思ひ浮べるのでありますが、何もそればかりが化粧といふものではありません、成程一口に化粧とは云ふもの丶、實は中々一通りや二通りや乃至五通りや十通りでは無いので、それを一々書立てますれば大冊のものになるのでありますから、その細々しい點は他日に讓ることゝ致して、爰には東西の婦人が、如何に己が姿容を美化するのに苦心しつゝあるか、又その方法は何の位異ふかと云ふことの大要を御披露して見やうと思ふ。

ソコデ第一に極手近の自分の國のものからいへば、目下我國に行はるゝ所の化粧を見ますると、ザット三通りに分れて居るやうに考へる、即ち第一には昔からの仕來り法、約めて云へば舊式と、第二には維新已來新らしく出來た法、即ち新式と云ひませうか、第三には西洋の風を參酌した、所謂折衷法とも云ふべき、是等の三通りが行はれて居るやうですが、それとても身分や職業柄等に依つて異る點は數多あるのであります、是は強ち我日本ばかりではありません、何處の國へ參つてもあるのです。

それで其舊式とは如何なる化粧法を指すかといふに、普通御婦人社會で

厚化粧と稱するもの

を云ふのであります、此厚化粧と稱するものは、云ふまでもなく最も舊式で、又最も自然に遠い化粧の仕方で、例へば、白粉で顔中を埋めるといふ仕方で、今も尚ほ田舍の花嫁さんや、又は或社會の婦人などは此法を施して居ります、妙なもので、此化粧も一つは土地や人情に關係を有つて居るものと見えて、東京と西京とを比べますれば、一目にして能く分る、即ち西京のものは重に厚化粧を施しますが、東京の者は致しません、全體この化粧は全で白粉を以て顔の地を塗隱すのでありますから、云はゞ造作もないのでありますが、併し塗りさへすれば好いからと云つても、自から其所に塗り工合があるので、所謂鼠が粉箱から飛出したといふやうでは、折角白粉を塗つたが爲に容姿を損すのであるからして、即ち手際よく行らねばならぬ、餘り態とらしくては見榮えがしない、此の厚化粧で困難なのは何であるかと云ふに

瞼と生際

とである、他の額や頬や頸などは不同なく塗つても好いが、此瞼と生際とはさうは行かない、餘り瞼の縁まで白く厚く塗ると、却つて眼が淀んで見えるもので、生際は是また餘り厚く致しますと、頭の地とカッキりしすぎて見つともないものですから、先づ瞼と生際とは程々にボカス心持にするが好いのである、而してこの厚化粧の時の口紅は

所謂下唇に玉虫光

を見せるので、古來は主に上流の社會に行はれたもので、何となく上品に見えるものですけれども、今よりは多く用ふべき化粧法では無からうと思ふ。

第二に新式とも云ふべきものは、通俗之を薄化粧と稱するもので、更めて説くまでもなく、白粉は成るべく薄く施す方の化粧で、是は目下廣く行はれて居る、この薄化粧は前の厚化粧のやうに、瞼とか生

際とかいふものに就ても別に心配はないのでありますから、大層造作も無いやうなものであります、所が、薄化粧は其主眼とする點が、元より白粉を用ゐても又口紅を注しても、それを他人に目立たぬやうにするのであるから、その手際は非常に六ケ敷いのであります、何故かといふに、元來化粧といふものは只形式に白粉や口紅を使ふのではありません、是等を用ゐて一層天然の美を發揮



させやうといふのが主眼でありますから、眼元、口元は云ふに及ばず、鼻筋に至るまでも美しく仕立てねばなりません、であるからして前の厚化粧に於ては、左程着附に苦心しなくても好いのでありますが、此薄化粧となりましては、餘程着附に心配しなければなりません、故に馬士も衣裳からといふやうに、衣裳は裝飾の第一義ではありますが、自から是も化粧と相待つて双美を成すのであります。

第三の折衷法は、以上の二種と違つて、單に從來の純白なる白粉のみを用ふるのでは無くして、所謂舶來の種々なる白粉等を使うて化粧を施すのであります、それに斯法は、日本で化粧する前に湯に浴するとか、又は湯を遣ふといふやうな單純のものでは無くして、更に進んで根本的に肌膚を艶麗にすることを勉めるのであります。

我國に目下以上述べましたやうな化粧法の三種が存して居ると致しまして、是までの日本の化粧の仕方の中で、何處に一番重きを置かれたものであるかといふに。

第一は顏面である

顏面は直ぐに誰にでも見える所でありますから、爰に重きを置かれるのは最で、又さうなくてはなりません、併し同じ白粉を塗るに致しましても、前にも云ひます如く、態とらしいのよりは、何方かと云ひますれば、見る人の側からいつて、餘り目立たぬ方が美を感ずるのでありますから、常に化粧に心掛けのある婦人は、例へば、若しも自分の眦が下つて居ると思へば、下瞼の鼻筋に寄つた部分は、割合に濃くし、上瞼の眼尻に近い方は薄くするとか、又鼻が低いと思へば、鼻筋に少しく濃い目に白粉をつけるとかいふやうに注意をしますから、自然美しく感せしむるものであります、まづ斯樣な工合にして我國の婦人は化粧を施すのであるが、一つ飛び離れたる。

西洋の婦人の化粧法

は如何といふに、西洋といひましても廣いので、それに國々に由りまして異ひますから一樣に引括めて御話も出來ませんから、名高き二三ヶ國の模樣を紹介して見ますれば、まづ第一に

世界の花

と稱せらるゝ佛國巴里の婦人の化粧法を擧げなければなりますまい、何故かといふに、巴里の婦人は他から見て化粧したと見えぬやうにしたものでなければ眞の化粧でないといふ考へからして、中流以上の

婦人になりますと牛乳で顔を洗ふのであります、尤も冷たいのではない、所謂人肌に温めたものを用ゐるのでありますが、何と贅澤なものではありますまいか、併し是は彼方でも中流以上に屬するのでありますが、中流以下のものは微温湯又は此微温湯の中へ化粧水を混入したもので顔を洗ふのであります、而して次に水白粉をつけ、それからクリームを塗つてよく〳〵摺りこみ、最後に白粉を塗けるので、是だけは大抵同じやうであります、尤も白粉と云ひましても、我國のものゝやうに純白の物のみではない、青に近い色と、黄色いのと、赤に近い色と、只の白といふ風に種類が分れて居るのみならず、同じ白の中にも七十種以上もあるといふ塩梅に澤山の白粉があるので、殆んど總計では何千種あるか判然分らない位であります。

そればかりでは無い、此巴里に於て最も贅澤といはうか、はた又凝つたといはうか、一種の美容術を施すものは、最初牛乳または化粧水を投れた微温湯を使つた後、白粉若くは塗料を用ふることは別に換りは無いのであるが、此く一旦念を入れて凝したる化粧を、イザといふ時に悉皆奇麗に洗ひ落してしまふのであります、であるから素顔になつてしまふのであるが、併しタヾの化粧を施さない前の素顔とは違つて、實に一種いふべからざる艶が存して居て、その美しさは想像の外であります、併し是は誰でも行るといふのではない、俗に所謂生粋の婦人のすることであります。

第二英國に付て見ますれば、此國の婦人は氣象からして男子風でありますからして、自然化粧といふ方面に對しても、餘りニヤケタとか、又はオシヤレとかいふやうなことは好まないのであります、去ればといつて化粧をしないかといふに、それは女の身嗜み一通りは必ず爲るのでありますが、兎に角或旅行家が、凡そ世界各國殊に文明を以て知られたる國

の中で、英國の婦人の齒ほど汚ないものは無いといはれましたが、是は實に適評であるばかりで無く、實に英國婦人の氣質を言ひ表はして居るのであります、尤も物も見やうで、是を以て英國婦人の無精を示して居るのであると云ふ方もありますが、何うして中々英國婦人は、齒を磨くことだけは無精でも、その他の事には決してさうではありません、その快活なることは實に我國婦人が倣ふべき風が澤山で、殊に家庭のために勤勉なることの一事は、恐らく世界一等であらうとのことであります。

であるから、一般に化粧法は佛國式を摹倣するといふだけで、別に取立て御咄する程のこともないのであります。

第三に米國式は如何といひますれば、近年我國でチラホラ見えまする。

美顔術の祖先

でありますが、一體この美顔術といひますのは、重に顔面を奇麗に掃除するといふのが主眼でありますか

ら、苟くも交際場裏に顔を出すほどの婦人は、必ずしなければならぬ必要な方法としても非常に流行して居るのであります、同じ顔を掃除するといつても、只湯や水で洗ふのではない。

電氣球や按摩術

等を施し、その他あらゆる方法を以て顔を美しくするに勉めるので、實は米國の理髪屋では大抵之を行つて呉れるのであります、少し市中の商賣人に障るか知れませんが、聊か左に此雜誌の讀者に限りて無料で其施術法を御傳授いたしませう、それは最初に受術者を椅子にかけさせ、丁度床屋が顔を剃る時のやうに、施術者が仕事をするのに便利なる角度に仰向かせおき、尤も前の方には白布か又は毛布等を覆ふておかねばなりません。

その第一の支度が調つたならば、初め蒸氣で蒸したる西洋手拭を、竪に二つ折りとなし、その眞中の所を顋にあて、右と左りの端を折り返して、兩の頬から額までをかぶせますと、丁度眞中に鼻の頭が出

る事となります、而して此手拭が冷めたならば、更に別の手拭で尚一回顏を蒸すのであります。

次に顏中へ按摩水と稱する物を少しく多量に塗り、手の指頭で暫らく所々を揉みますと、其按摩水は皆氣孔から皮膚へ吸ひこまれてしまふのであります。

それが済んだら、ゴム製のスポイトのやうな形をした、口徑六分位の硝子で出來た俗にいふ吸フクベと稱するもので、顏一面を吸上げさせるのでありますが、臉や



鼻の近所は小形のものを用ゐるのであります、而して次には表面一杯に章魚の吸盤のやうになつたゴム製のルーラで顏中を摩擦するのであります、ツマリ此吸盤で殘りの汚物を吸ひとらしむるのである、最早これで大抵汚物は無いからして。

別に一種クリームやうの脂肪劑を塗り、暫らく指頭にて摩擦したる後、冷水に漬けて絞つた手拭で、顏を冷しながら拭き取つて、更にライラックと稱する化粧水を塗りおき、之を柔

軟なる紙で悉皆拭取り、その後を鞣皮で摩擦し、顔の全面を拭て終りとなるのであります。

此術は如何なる効能があるかといふに、尤も受術の回數にも依るさうですが、雀斑を取るとか、或は一種肉の落ちたものを隆起せしむるといふやうな効驗があるとの事であります、依つて米國式は化粧法といふよりは寧ろ顔の掃除でありますが、以上の諸器具さへあれば誰でも出來るので、即ち衞生上の注意と娯樂とを以て、根本的に容貌を美しくすることに努むるのであります。

結婚は女子の獨立を妨ぐるものにあらず

秦　節

女子といへば直ちに結婚と云ふことは聯想さるゝものであるが、一體同じ女子を觀るにつけても自から二つの觀察の仕方があらうと思ふ、即ち

個人本位と家庭本位

との兩面である、併し此兩者は暫らく二樣に別るゝものゝ、乃ては一となるのである、といふものは、個人を離れては家庭の成立つものでも無ければ、又家庭を離れたる個人といふものゝ在るべき筈のものでは無い、譬へば、四肢や五官等がありてこそ人體もあるのであるが、苟くも個々手や足のみを以て人體といふことの出來ないのと一つで、恰も人體は家庭の如く、四肢や五官等は個人の如きものである、去れば眼や鼻のみを主として論ずる時は個人本位と稱し、人體を引括めて說く時は家庭本位と稱するやうなもので、女子個人を主として說く時と、夫妻即ち家庭を主として論ずる場合があるからして、讀むものは宜しく其論旨の那邊に在るかといふ事を認めて見誤らぬやうにせねばならぬ。

ソコデ予が今爰に說かんと欲する所は、約めて云

へば、個人を歸納したる家庭本位に就て御話して見やうと思ふのである、云ふまでもなく女子は體質上および資性上よりして、先天的に異性なる男子と結婚すべき默約があるのである、決して社會といふものは文野に關はらず、男子のみを以て相續することも出來なければ、又女子のみを以て繼紹し得るものではない、是は單に人類のみでは無い、汎く他の動植物の類を見ても、必ず雌雄あり牝牡ありて能く其後繼を蕃殖して行くのである、假りに吾人々類が、社會といふものを離れて考へて見ても、己が種屬を將來に存續して行かうとするには、如何しても異性の男女たる者が相依り相合して行かなければ、到底己が種屬を遺して行く事は出來ないのである、是を以つて見る時は

　結婚は即ち先天的の默約

であると云はなければならぬ、然るに近來如何なる機みよりしてか、頻りに女子の獨立といふ事が盛んに唱へらるゝと同時に、如何やら世間の女子達も此の煙に捲かるゝ者が尠なくないやうに見受ける、而して其女子の獨立といふ聲を聞けば、頗る畸形兒のやうな感がする。

　予といへども固より依賴心の惡むべきもので、獨立心の確守すべきものであるといふ事は、男女を擇ばず等しく有つて貰ひたいといふのは宿論である、併し世の

　所謂女子の獨立

といふ事は予は容易に贊同することは出來ないのである、何故かといふに、其は前にも少しく述べたるが如く、家庭を離れたる女子は、女子としての存在を無意味にするもので、極言すれば、家庭を成さゞるの女子は、女子としての社會に對する價値の無いものであるといふに憚からぬのである、現時世上に唱ふる所の女子の獨立といふことの主眼とする要義なるものは、學術なり或は技藝なりを女子が修めて、縦ひ藝に身を助けらるゝ不仕合せといはれやうとも儘よ、その學藝を唯一の生産力として、是に依りて

毫も男子の力を藉らないで、何處までも孤獨生活を營む、是を以て女子の眞面目を保たれるものである、またさうなければならぬものであるといふやうなのが、所謂今日女子の獨立といふことの主要であるやうに察せらるゝが、その學若くば藝に依りて女子が獨立すなはち孤獨生活を營むといふことは、是は始めより希ふべき性質のものでは無くして、萬止むを得ざる事情の下、例へば、最近年に於ける日露戰爭といふが如き、實に吾人の豫期以外に生じたる事情の爲に、一家の支柱と賴むべき良人は外征して、遂に國家の爲に砲煙彈雨の間に殉したとか、又は不幸病に罹りて歸らぬ黄泉へ旅だゝれたとかいふ、それらの事後、獨立生活を營むといふやうな場合を指すべきものであると考へる、決して始めより女子が嫁せずして孤獨生活を營むなどいふ事を夢想するのは、女子が社會に出でたる先天的の默約に背反するものであると信じて疑はないのである。

一體我國では、學校敎育の方面は暫くおき、いまだ家庭敎育といふものが過渡といふよりは、寧ろ渾沌時代にあるのではあるまいか、といふものは、子女の一たび生るゝや、必ず生母か又は乳母かに添寢せしむるのであるが、抑も此添寢といふものが宜くない、何故かといふに、成るべくと云はんよりは、いつそ始めよりその子女をして一人で寢かす習慣をつけさへすれば、長じて後決して他に依賴するといふやうな心を懷くものではない、けれども生後直ちに誰かゝ添寢をする習慣をつける、そこで不圖眼を醒して側に人が居なければ直ちに泣出す、又小兒が泣きさへすれば乳又は食物を與へる、少しでも時間とか分量とかいふものを限らずに與へるから、なんでも泣きさへすれば得らるゝものであるといふ是が即ち

依賴心の芽

を植ゑ込む發端となるのである、殊に富豪とか貴紳とか、少し身分の宜い人の子となれば、無暗に付添人が世話をやきすぎる、であるから、歩ける道でも

車に乗せてやるから、自分で歩けるだけ歩くといふ忍耐心が起らぬ、而して若しも溝の縁か椽側へでも行けば、やれ危ないと引止めるから、從つて自分から危險の處を避けるといふ心が發り難い、何でも自分で出來る事をも下女下男にさせるといふ、所謂旦那樣風も是また一種の依賴心を増長せしむるので、尙ほ此外にも、親たるものが殆んど病人かなんぞのやうに、衣物を着たり脫いだりまで人に世話をしてもらふ、それらを小兒に見せるのも宜くないのであるが、何うも是等の風習の廣く行はるゝのは誠に遺憾千萬の次第である、といふて、予は此頃世間の一部に唱導するやうな社會主義とやらを振り舞すのでは無い、たゞ成るべく節し得らるゝならば、出來得るだけ婢僕の數を少なくして、大人たるものが大抵の事は自分でするといふ手本を示して、聊かなりとも依賴心といふものゝ萠芽を助長するの機會を減少して欲しいのである。

　而も前述の如く幼少の時から、兎角依賴心を起させ獨立心の出ないやうにして置て、稍長ずるに及んで、急に古人苦學の例に倣はせやうとするのは抑も

無理な注文

である、成程貧乏な家に生れ、志を立て必死の苦學をして大成した人は豪には違ひないが、中流以上の家に生れた子弟は、迚も依賴心を免かれぬ筈のものであらうか、貧窮不幸の人でなくては大成しない譯のものであるか、もし貧より外に人を刺戟する所のものがないのであらうか、隨分王公貴人または大資産家の子弟でも立派に身を立てたる者の例は他外國に澤山あるとして見たならば、なんぞ特り我日本のみ出來ないといふ筈はなささうなものではあるまいか、それは畢竟學校教育よりも家庭教育の力が與つて居るのである、然るに我國現時の家庭教育は、前述の如く渾沌時代であるから、その中に教養せられたる子弟、殊に女子の如きは資性溫順なるものなれども、惜いかな果決に乏しいものであるから、一たび樊籠を脫して學校生活を營むやうになると、諺に人

生字を知るは憂患の始めといふ樣に、稍文字を解するを得るが爲に、手に任せて時流に迎合するが如き著譯を繙き、甲を見ては甲に泥み、乙を見ては乙に荒むことは恰も萍や今日は向ふの岸に咲きといふやうに、朝夕少しも己が心に取り止めといふものが無いのみならず、北極 己 が先天的の默約あることをも忘れて

獨立と孤寡とを混視

して、あられもない囈語を口走つて得々たるものがある、否、是を實現せんと夢みつゝある者が尠ないのであるが、果して是は國家のために賀すべき現象といふことが出來やうか、ソハ兎も角として其が女子として社會に出でたる本分を盡すの道であらうか、之に關して予は前に縷陳したから、今更爰に繰返すの必要はないと考へる。

予は以上の立塲より詮じ來る時は、不時の災難等を除くの外、女子は結婚しても決して女子の獨立を妨げないといふ歸結を得るのである、それは家庭を

本位として、女子は結婚すべきものとして、サテその結婚したる後、女子には女子の獨立して動かすべからざる地位があらうと思ふ、元來女子が男子と結婚するのは

所謂愛の結合

であつて、それより家政を齊へ子女を敎養するといふことは、是即ち女子にして始めて爲し得べき神聖なる獨尊作用であつて、決して男子の企て及ぶ所のものでは無い、之に反して、外社會に出でゝ活動するのは是即ち男子の本領であつて、如何しても女子の與り知るべき所のものではない、去ながら斯く內外二つに分るゝとは云ふものゝ詮じ詰れば一となる、といふのは家庭といふものに包括せらるゝのである、さうかと云つて、一つ立塲を換へて見るときは、夫は夫たり婦は婦たりといふやうに二つとなるのである、併しながら苟くも女子たる者が、既に主婦となりたるにも拘はらず、克く夫を助け、家政を整へ、子女を敎養するの任に堪へない、言を換へて

云へば、何處までも男子にのみ依頼して、殆んど家庭の女王たるべき資格がないとすれば、丁度蔦蘿が他の樹幹に攀縁して居るのと毫も異ならないのであるから、最早女子として社會にも又家庭にも生存の價値を沒したものと斷言せねばならぬのである。

讀者諸嬢には決してさういふ御方の無いことは保證するが、廣き世間には何うも女子達が自己の本能を自覺しないで、兎角男子の寄生蟲たるに甘んじて居る者が尠なくないのであるが、二十世紀の新天地に活躍せんとする諸姉は、須らく積極的に一身一家乃至社會の爲に奮勵せられん事を勸むるのである。

家庭と社會の影響

江原素六

私は突然ながら諸嬢に向つて訊ねたいことがある、それは外の事でもない、現今我國の國債は幾何有りますか、直ちに之に答ふる事が出來ないやうでは、迚も日用の役に立つものではない、實に我國現今の國債は、積り積つて

二十二億圓以上

あるのです、口で二十二億の乃至五十億百億といふのは造作もないのであるが、却々容易な借金では無い、此事に關しては男女老幼を論せず、等しく忘れてはならぬのである、一體國債の額ばかりではない、我日本に生れたものは、教育の制度とか又は政治の振合とかいふ事に就ては、餘り深くなくとも宜いが、ザット一通りは知つて居らねばならぬ、或人は婦女子は何うでも宜いといふ方もありますが、私は決して左樣で無いと思ふ、何せなれば、社會の半面は男子であらうが。

他の半面は女子である

即ち女子は國家の半面を成して居るものとすれば、その自分等が住んで居る國家の事を知らず顔に過す事は出來まいと思ふ、否、私は何處までも國家の事を處理するのに

婦人の援助

を乞はねばならぬのである、先頃國會などでも大部入ケましかつた問責案などゝいふものも、考へて見ますれば、昨年の冬、私が越後の高田を通つて見ますと、彼方の小高い處に工兵の營舍、此方の丘には騎兵又は砲兵の營所といふものが立派に建聯ねてある、また其より會津の方へ行つて見ますと、此所に名高ひ人參畠を潰して兵營が建てられてある、斯ういふ風であるから、孰れも材木や人足の直段が昇るといふ工合で其爲に利益するのは、僅に少數の材木商と人足位で、その他の者は何れも困難を訴へて居るのである、それにも拘はらず一方では巨大な軍艦が進水式を行ふといふ有樣で、軍備といふ方の側は隨分それ〳〵進んで行くのであるが、偖振返つて他の方面を視れば、即ち富の方面には一の大會社が設立せられたといふ者のある事を聞かない、であるから、歐米人なども安んじて資本を投ずるものも無い、と云ふものは、先年マンチユリア號といふ大汽船が

横濱港へ入ると、御承知の如く横濱港も遠淺であるから、海岸へ汽船を直着にする事が出來ない爲に、多くの小船を以て海岸まで客や荷物を運び、それより棧橋を上り、その棧橋より停車場まで客を一人々々搬び、荷物は一台の車で間に合はないと、二台も三台も要する、而して漸く汽車に乘ることが出來るといふ始末、此樣國は歐米の何處へ行つても有るものでは無い、それ故に外人なども厭いて資本を投じないのである、けれども何も他人ばかりを頼みにすべきでないから、我國は我國だけで出來るだけ實業教育を發展して行かなければならぬ、而して陸と海との聯絡を計らねばならぬが、まだ今日の分では何時かは分らない、此の陸と海と聯絡して、歐米各國に於けるが如くに、汽船は海岸へ直着になる、それから直ぐ汽車に乘るといふ風にならなければ、迚も實業の發展は望まれない、ソコデ私共は苟くも代議士として、將來國防上に租稅が遣はれて、陸軍や海軍は十分備はりましても、此の陸と海との聯絡が出

來なければ、何時までも國家の發達を期するといふ事が出來ないといふので、それで我々は八ケ間敷いふのであるから、マサカ政府でも解散といふ二十八珊の大砲も向けられぬのである、一體代議士といふものは恰も兵士と同じく、常に節操を堅く守つて居るものであるのに、政府が無暗に解散などゝいふ事をしては無理である、縱ひ解散にならないまでも、一たび議員の年限が切れて、其次の選擧となると却々其騒が大きい、



のみならず其入費も容易なものでは無い、手近い所が、東京で云つて見れば、戸毎に候補者たる者はお辭儀をして廻らなければ、受が惡いといふので、湯屋でも游髪床でも一々自分が行つて頭を下げて頼まなければならぬ、ソコデ少し番頭でも遣つて居る所の主人などは一回や二回で容易に會へぬ、會はなければ頼めぬといふので、會へるまでは幾度でも行くといふ始末、

また中には彼奴今度は議員の候補に立つたが、三千圓位の融通は利くであらう、それだけ利くとすれば其倍は都合が付くに相違ないから、擔ぎあげて遣はせて行れといふやうな事もある、それも遣つても果して選擧して呉れば宜いが、それも急度といつて當にはならぬ、であるから、代議士の選擧は全で私生兒の難產のやうなものである、まづ其は兎も角として、女子たる者といへども、代議政體の一斑位は知らねばならぬのである。

右は重に國家の上から見た話であるが、今度は今少し手許へ切込んで見れば、隨分是まで家庭と敎育との關係とか、又は家庭と育兒の關係とかいふ問題は澤山に現はれたが、いまだ家庭と社會との影響といふやうな問題は論ぜられないやうであるから、少しく是に就て話をして見やうと思ふ、能く世間で家庭が惡いと、從つて惡い子が出來るといふものがある、けれどもさう一概に斷ずるのは酷である、尤も其も無いでは無いが、時としては召使ふ所の下女や下男の爲に惡い感化を受けて成る者もある、或幼稚園主の話に、毎朝七十人の幼兒を集めて演說をする時に、非常に感心したやうな風に、堅く目を瞑つて居る兒は、決して感心して聞いて居るのでは無い、是は

反抗の意を表はして居るのである、此反抗は習慣性をなして居るか、或は家より出て來る時に其根を萌したものか、又は其所へ來てから芽ざしたものか、兎に角それは反抗の意を顯はして居ることは疑ひないのである、夫から格言などを話して、剛い子は泣かぬ、弱い子はなく抔といふことを云つて聞かせましても、若しも其目を瞑つた兒が、眼を開きながら他の小兒に笑はれでもすると、チヨツト他の時間に其所へらで躓づいて轉がり、クス〳〵泣く時に、剛い子は泣きませんネーと幾回繰返しても、却々泣が止まぬ、最早その時は終日精神的作用が違つて居て格言も效を奏せぬのである、私は今尙ほ每日曜日に日曜學校といふ者の世話

をして居りますが、兎角我日本人殊に女子方は、物を言ふのに誠に判然と言はない、ソコデ他日の紳士淑女とならるゝ愛らしき幼男幼女に對して、ハイと判然返辭をするのですヨと言ひましても、兎角ウームなど丶答へまするので、再三之を矯め直す事を專一といたし、次に汝は何んと言ひますかと問はれたなら、是また判然と、私は春雄です、私はお梅ですと言ふのでありますと云ふ事を繰返し授けますが、何にいたせ、まだ四ッや五ッの頑是ない幼兒の事であるから、容易に全部の生徒に感化を及ぼしませんが、隨分小兒と云ふ者は取扱の六づかしい者であります、先年私が甲州へ參つて日曜學校を參觀しますると、生徒は重に尋常四年か、精々高等一年生位の者であつて、先生は頻りに熱心にイソップ物語かアラビヤンナイトのやうなものを話して居りますと、一人の生徒は俄かに手を擧げますので、何か質問でもある事かと見て居りますと、その生徒は先生に向つて、先生この椅子は低くて衛生に害がありますから、私は是に腰を掛けては居られませんと云ふので、先生は暫時の間だから辛抱なさいと言ひ聞かせますと、その生徒は再び口を開いて、先生それでも是に腰をかけて居れば脊骨が曲るではありませんか、そればかりでは無い、先生は何時ぞや一たび惡いと思つた事は二度としては成らぬ。と被仰つたではありませんかと、何處までも反抗するのであつた、ソコデ講演が濟んでから、私が其生徒に向つて、御前の言ふ事は道理だけれども、此所は大勢の者の集まる所であつて見れば、御前一人の爲に椅子を別に拵へるといふ事は出來ない、のみならず他の大勢の人も我慢をして居るのであるから、御前もさういふ時には辛抱するが宜いと諭しますと、矢張前に先生へ言つたやうに喰つて掛りますので、お前も知つて居やうが、彼の皇孫殿下の如き高貴の御方でさへも、避寒避暑等のために御旅行遊ばす時には、矢張我々と同じ汽車にお乗りなされて、御不便をも御耐へなさるゝのであるから、それを思へばお前などは何ん

でもあるまいと申し聞かせまするど、漸く得心が行つた樣子でありましたが、實に斯樣な惡性の者が一人ありますと、啻に家庭ばかりではない、社會に影響する所が尠なくないのである、それには尤も咄しの仕方も感心である。

一體不良の少年といふ者を感化する事は極めて困難なものである、彼等は槪して怜悧であつて、其は却々普通の少年などの及ぶ者でない、故に他人の心持を見て取る事が極めて迅速で、謂ゆる眼から鼻へ脫けるといふ塩梅で、その

性質は至つて善い者

であるから、妻を娶り戶主とも成れば自然に直るものである、けれども何うも其以前即ち少年時代には反抗力の强いもので、實に是が矯正には苦しむのである、私も直接ではないが不良少年の感化事業を行つて居るが、何時も修身談などを爲る時に、一體講演や演說を爲る時に、聽衆が辯士の顏をよく見詰めて居る時は成効したのである、然るに此不良少年は

却々言事を聞かない、併し時としては成効する事もあるが、又時としては斯ういふ事もある、何時か講演を聞く前、袂に茶碗を一つと箸を一本入れて來て居て、軈て講演の了るや否や、その茶碗を叩いて念佛などを稱へる者がある、すると其日一日は何をしても好く行かない、又講演の主意は善くとも、その話しの仕方が不美と、最早聞きながら身體を左右前後に搖つたり、或は机に凭れて居眠をしたりする者がある、斯ういふ工合で、朝の一時間で其日の成効不成効が卜知せらるゝ、言を換へて云へば、

朝の一時間は一日と正比例

するのである、それ故に、多くの中に唯一人惡戯をする者が居ると、單に其者のみでは無い、他の多くの者までも迷惑を蒙むるのである。

是を以て見るときは、苟くも家庭に於ては下女下男を雇ふにしても、餘程之が撰擇を愼しまねばならない、若しも一朝之を誤るときは、其者の不從順な反抗力を有つて居る者に小兒が化せられて、爲に小

兒を惡性に導くものである、一たびその導火線が附くと、最早中々軍隊で兵士が上長官に對するやうに、如何に服從を命令したからとて、さうは行かぬ、若しも之を强るときは、必らず反抗的または冷笑的の態度を取るばかりでは無い、屢次催告をすると、遂には五月蠅といふやうになつて、益々反抗の度を高めて來るものである、故に家庭は勿論、之が內外に於ても父兄若くは長者たる者は、

小兒の面前に於ては不眞面な言語動作は謹しまねばならぬのである、而かも此事は造作もないやうで、その實は六ずかしいもので、輙もすれば忘れられ易いのである、曾て千の利休が茶事の七ケ條を說いた中に、相客に心せよと云ふ事を書いて置かれたが、之に就て私も苦い實驗を得た事がある、曩に日露戰役の際に、知人なる陸軍大佐某氏は名譽の戰死を遂げられし後、その未亡人の某は重き病氣に罹つて某處へ入院して居られたので、私は病氣見



舞に行かうと思つて出掛けますと、丁度病院の廊下で是も知人の某貴婦人が七八才の女兒を携へて來らるゝに出逢つたから、その由を語りますと、その幼女は私の訪ねやうとする病室を知つて居るとて、愛らしくも先に立つて案内してくれますので、續いて病室に入り、懇ろに病苦を勦つて居りますと、卒然幼女の可愛らしき口から、お爺チャン、この看護婦チャンはお錢を澤山遣らないと、キイ〳〵を治して與れないのよと物語つたので、傍らに居られた母親の顏をソーット覗き、竊かに此家庭の程を察したのであります、故に成るべく小兒が傍に居たならば物事に遠慮をせねばなりません、何んでも平常其樣ことに構はない家庭は直ぐに分かる、と云ふものは、是も前年の事であつたが、新潟縣で中産以下の内の靑年が、父母に乞ふて東京へ遊學に參るに就き、懇々誡しめ且つ東京の風俗や人情等に就ても種々諭されたので、出京匆々彼方此方と奔走して、只ある儼めしき玄關構の家へ飛込み、案内を乞ひますと、生憎主人は不在中の事ゆゑ、然らば奧さんにといふと、未聞不見の方には面會せぬとの事であるから、止むなく玄關の片隅なりと拜借したしと云ふ事を申出でますと、一も二もなく取次の女中は、家の奧さんは書生は大嫌ひだと被仰いますから、取次いでも駄目ですと斷られたので、遂に私方へ參つたとの話でありますが、何もさう斷らくとも、只今少々お宅も取込んで居りますから、折角では御座いますがお斷り申すといへば濟むのに、頭から奧樣は書生は大嫌ひ云々と取次の者の申すのを聞けば、此家の奧さんは、始終下女下男の前でも、斯やうな端たない口を利くといふ事が直ぐ分るのである。

以上は主として言語の上に就てのお話しですが、擧動に就ても大切なもので、昔し後水尾天皇の時代に、一種風の變つた盜賊があつて、何んでも貧乏人の物は盜らぬ、併し金持物持と稱せらるゝ者の名前を一々手帳に控へて、甲某は何々の事をして暴利を貪つたものである、乙某は何々の陰險手段を以て身

造つたものであるといふやうに書き留めて置いて、而して其等の家を荒したのである、然るに此者が一夜其所此所と當途もなく彷徨て居ると、フト雨戸の隙間から燈が射すので、見るとはなしに家の中を覗きますと、親とおぼしき者は濕き布團に裹まれて居る枕邊に、一人の少女が、今や鍋の中から箸を持つて米粒を鍋蓋の上に取り出し、之を箸にて壓し試み、まだ少し硬いといふて再び鍋の中に投れたのを見てその賊は甚く感心して、遂に一物をも盜らずして去つたといふ事が物の本に出て居る、併し是は昔の話で見た譯では無いが、一つ私の實驗談を話しませう、先年私の知合の御孃さんは、縹緻も十人並勝れて、その上女一通り所ではない、茶の湯生花等も出來る方で、此お方に許嫁があつて、その未來の良人は當時佛國へ留學をして居られたが、軈て目的とする所の學問も卒業して、况して歐洲流行の中心ともいふべき生粹のハイカラ仕込みで歸朝せられた早々、まだ互ひに訪ねもしない中に、圖らずも其未來の夫人たる孃さんが、漬物屋でヒシホのやうな物を買つて居られたのに邂逅したので、互ひに絶えて久しき挨拶を換はした後、その孃さんは何氣なしに、此ヒシホは美味かと云ひながら、チヨツト指の頭で掬つて嘗められたのである、この時壻さんは無意味で行つたのであるが、遂には其が原因となつて其緣も破談となつて了つたので、その後之が媒酌人は、チヨツと味噌嘗て大味噌つけましたと話した事がある、實に人物としては其孃さんも不足は無いのであるけれども、氣が附かぬとは云ひながら、ホンの舌切り雀ではないが、チヨツト一嘗めヒシホを味はつたばかりで、結構な良緣も破談になるやうな事に立至つたのであるから、擧動のみでは無い、物言も共に愼しまなければならぬ、併し斯ういふ事は重に家庭より發するものであるから、何も人の前に出た時ばかりでは無い、常に家庭に居る時から注意を拂はなければ、急に人の中へ出た時に氣を附けやうと思つても、其は却々さう行くものでは無い、例へば、平素自分

等が交際する人の事なども、その人と顔を合せた時には、松本君とか、澤田さんとか、又はお梅さんとかお豊さまとか尊稱するにも拘はらず、たゞ家内の者だけになると、彼れとか彼奴とか、少し好い所で岡本、伊藤、若くば清が、竹がなど〻いふやうに呼捨てにする、是を傍らに居て小兒が聞くと、それで善いものと考へて矢張さういふ風になる、又奴婢を召使ふにも、無暗に權式張つて物事を言ひつける、すると小兒は其で宜いものと思つて、遂には高慢心や倨傲心を増長して、果ては其者一人の生涯を過らしむるのみでは無くして、延いて社會をも茶毒するのであるから、既に一家の主婦たる者、および未來に家庭の女王たるべき諸孃は、須らく此點に注意して、平素已が品性の修養を怠つてはならぬ。



主婦の責任

阿久澤外記

世間の者が女子のことを論ずるに方りて、多くは男子と比較して何事も餘り重きを置かないやうであるが、之は少しく片手落の沙汰ではあるまいかと思ふ、尤も予が此に謂ふ所の女子なる者は、彼の未婚者若くば幼女を指すのでは無い、即ち既に國民として男子と共に起つて家庭を爲せる所の

主婦たる者

を謂ふのである、この家庭の主婦たる者は、男子のやうに外に出て働きはしないが、矢張り社會に對する責任といふものを有つて居ることは、敢て男子に讓らない、却つて或場合に於ては、男子より以上の責任を社會に對して有つて居る、例へば、家政の整理に就て見るも、如何に男子が外に働いて、一家五口を撐ふるに不自由の無いまでに收入を齎らし來つても、若し一家の主婦たる者が家政整理の能力、平

たく云へば、身上の繰り廻しが下手であつたならば、止むを得ず、欧米の家庭では一の罪惡とまで恐れて居る所の借金をしなければならぬ、尤も此の借金も、時としては目下我國でさへも十何億といふ國債まであるやうに、個人としても不時の災難等の爲には借金もしなければならぬ必要もあるものである、けれども前に云へるが如く、平素男子が外に働いて、別に不足も無い程にやつて來ても、主婦たる者の不始末の爲に、啻に一家の家政を安全に保つて行くことが出來ないで男子に累を崇らしむるばかりでは無く延いて他の家にまで迷惑を及ぼすやうな事があつては、是即ち累を社會に及ぼすものと言はなければならぬ、又子女の教育もその通りで、若しもその教育が宜しきを得ない時は、祖先に對して不孝の責を免がれることが出來ないのみでは無い、爲に害毒を社會に流すのである、固より是等の責任の大體は男子が負ふのであるとは云ふものゝ、その半面に於ける責任は、決して主婦たる者が辯することの出來るものでは無い

此くの如く一家の主婦たる者の責任は重且つ大なるものであるが、世の男子は比較的之に向つて深く咎むることはしないで、却つて他の枝葉に渉る事柄に付て咎め立てをするやうに見受けるのであるが、之は本末を顚倒した話ではあるまいか、予は飽くまでも之が責任を分つことにしたいと考へる、否、分つべきものと信じて疑はないのである、否、更に進んで主婦たる者に之を自覺して貰ひたいのである、一體我國の民法では、女子たる者の事に關しては僅かに數條を規定せられてある、例へば、女子特有の財産とか、又は夫婦共産制とか、若くば女子が獨立に營業する場合には夫の許諾を得なければならぬとかいふやうな數個條で、その他には餘り女子の權利および義務といふやうなものゝ規定せられた條文は無い、併し法律家の口調で云へば、如何も日本はまだ法治國たるに適しないと云はるゝが、予は成るべく法治國たるに適する資格を得たく無い、殊に女子

の側よりは

之を聞く事さへも厭ふのである、併しながら予は法律もなく制裁もなき暗黒なる世界を望むのでは無い、固より人世が發達進歩するに從つて何事も複雜になつて來るから、その盤根錯節を截裁するには、必ずや豫め之が成文律を設けて置く必要のあることは、予といへども之を認めないでは無い、けれども之なくして行ける程結構な事は無いと思ふのである、此く云ふたならば、或は予を以て結繩の政を夢想する者ではあるまいかとの見を起さるゝものが無いとも云へまいが、予は決して今の世に其を再現しやうと希ふものでは無い、唯我國は、古來君臣の義、夫婦の別等が、殊更に文字の上に顯はされなくとも、油然として行なはれ來つたので、實に萬國に比なき所の美風を成して居るのであるから、成るべくは今後ともに之を持續して行きたいと思ふのみ、他に邪念は無いのである、

右に關しては餘りに西洋かぶれになつて、男子は斯うであるから、女子も亦此くなければならぬと云ふやうに、無暗に杓子定規に流れたくない、それと同時に今日のやうに、尤も過渡の時代とは云ひながら、男子と女子との責任が混沌たるものではならぬのである、茲にも、夫婦は同心異體のものであるといふが如く、一家といふものは、夫婦相依りて始めて全きを爲すことを得るものであつて、その孰れか一つ缺けても完全なる家庭といふことは出來ないソコデ夫妻相依りて一の家庭を成した以上は、縱ひ女子に關する規定が社會に明らかに示されて無いとても、之を以て責任を避くることが出來るものでは無い、少し理窟ッポイ話だが、元來今日の所謂法律といふものも、その始めより成文のものがあつたのでは無くして、當時は凡てその社會の風俗習慣であつたもので、言を換へて見れば、默認せられてあつた所の掟である、その掟が時代を經ると共に今日の法律のやうに成文となつたのである、例へば、今日男子は重に荒ッポイ仕事をなし、女子は内氣な業を

すると云ふのも、何も初めから仕事そのものに男女の區別があつたのでは無いが、數世の久しき習慣より因襲して今日のやうになつたのである、けれども今は慣れッこになつて誰一人として別に怪しみもせず默認して居るではないか、

その如く孰れの家庭に於ても既に夫妻相依る時には此の默認律があるのであるから、世に成文律が有る無い抔といふ末の事に拘はらずして、必ず主婦たる者は主婦たるだけの責任を盡さねばならぬのである、併



し物には自から順序のあるもので、千里の遠きに達するには必ず一歩より踏み出さなければならぬと同じく、主婦たる者が其責任を盡すだけの力を養ふには、必ずまづ其順序を踐んで行かなければならぬ、その順序とは外でも無い、即ち學校時代のことである、別言すれば、學校時代は即ち女子が將來主婦たるべき資格を作る修養の時期である、女子は男子と異つて、最早一たび家庭を作つた

以上は、中々薫修の機會を得るといふことは難いのである、それにも拘はらず、その大切なる修養の時期に於て頗る徒勞の行り方が多いやうに思はれる、その原因は子女の側より、寧ろ父兄たるものゝ不注意と現時女子教育の方針が散漫なるとに基づくものであらうと考へる、その

父兄の不注意

といふのは何であるかと云へば、己が子女を學校にさへ託して置けば、それで十分一人前の者になれるものと速斷して、殆んど家庭の實務といふものに就て、日々家庭に於て造次顛沛の間に訓練することを忘れて居るものゝやうである、故に學校出たての嫁御寮が、到る處に評判の良くないのも一つは是である、次に約めて云へば

女子教育の不備

の點といふのは、隨分今日では科外の訓誨、校外の提撕などゝいふことを云ふけれども、是は亘に告朔の餼羊であつて、多くは讀書に依つて教育を完成し

やうとして居る、成程讀書に依つて或部分までの智識を授くることは出來るであらう、けれども品性の陶冶といふことに至りては、到底讀書や口授の小刀細工で完成を期することが出來るものでは無い、

全體教育といふものは、智識を授くるのは固より其一面ではあるが、尙ほより以上の目的があるのであらうと考へる、そのより以上とは

有用なる人間を作る

といふことが最終の目的でなければなるまいかと思ふ、論語讀みの論語知らずといふやうに、縱ひ萬卷の書を讀破したからと云つて、之を受用することを知らなければ所謂活字引とかで何の役にも立たない寧ろ憖じつか文字を覺えると懶惰になるから、授けない方が良いのである、假りにものぐさにならないで、その覺えたものを他に授くるにしても、單に鴉や雀の囀づるやうに鸚鵡返しや口移しでは少しも効がないのである、例へば、裁縫を一つ敎ゆるにしても、丈のある反物も、また丈の無い反物も構はずに、

袖丈は何尺何寸、身頃は何尺何寸、衽は丸衽に積るものであるといふやうに數へたばかりでは役を爲さないのである、成程一應はそれでも宜いけれども、若しも丈のない反物などの時に、衽を丸衽に取つてしまへば、袖丈を詰るとか又は身頃を縮めるとかしなければならぬといふやうな事になつて、ツマリ初めから不具の着物を作るやうなことになるのであるそれでは折角裁縫を敎へても、又習つた方でも共に用を爲さないのである、であるからして、同じ反物でも、丈の有ると無いとによつて、或はカキ衽にするとか又は丸衽に裁つとか、若くば袖丈と身頃とで都合をしあふといふ風に、所謂應用工夫といふものを敎へなければならぬと共に習ふ者も此の心得が無ければならぬのである、

然るに方今女子敎育の傾向を見るのに、概して形式に流れて實用を缺いて居りはすまいかと考へる、これは學術でも技藝でも孰れの方面にも此の傾きがあるやうである、例へば、文字の方面で云つて見れば、互ひに讀書の數を誇るのみでは無く、文章を一つ作るにも、成るべく古代の判り難いやうな語句を拾ひ出して來て、古雅だとか婉麗だとか云つて、己が學識を衒ふことにのみ腐心して、サテ病氣見舞の狀を書かせても、たゞ自分のみ判つて先方の病苦を十分に劬はる實意は勿論、それらの文字さへも並べる事が出來ないといふやうなのが尠なくない、また技藝の側で云つて見れば、假りに造花を一つ拵らへるにしても、その色の配合の不自然なることは云ふまでもなく、無暗に材料を粗末にして、所謂御座敷藝に流るゝ者が多いのである、而して半面には他に向つて自己の學藝を誇示するに努めつゝ、他の半面には窃かに學藝の未熟を喞ちつゝあるのであるが、凡そ社會の事といふものは、如何に容易き、例へば、平素三度食べる御飯でも、只御膳に向つたばかりでは腹を滿たすことの出來るものでは無い、必ず箸を取りて口腔に運び、而して齒を以て之を嚙みて喉に下さなければならないのである、けれども之に慣る

れば左程面倒とも思はず、容易く日々之を行つてゆくやうなもので、他の事とても是と同様である、然るに方今の弊は、兎角成効を急ぐの癖が一般に瀰漫して居る、この成効を急ぐといふ事は、裏面より見れば時日を短促するといふことである、別言すれば速成を希ふのである、早からう惡からうと俚諺に云ふが如く、此く時日を短促して急に仕上げたものに良いもの丶無いのは、今更めて云ふまでも無い事であるが、是も世の中の趨勢で據ないと云へばいふもの丶、如何か是等を自分の身に附けるといふ事に今少し頭を入れて貰ひたい、所が何うも今日此の心得のある人が尠ないやうに見受ける、是は過言ではない、所謂修養の爲に學校へ通つて居る間、若くは學校から出た二三年位は、幾らか教へられた事を覺えて居るが、最早四年と經ち五年と過ぐるに從つて、例へば、自分の子女が學校へ通ふやうになつて、時として有馬の温泉は何處に在るのでせうと問ふても、直に之に答を與ふる事が出來ないといふ樣な母親が、隨分世間には尠くないのである、

それといふも畢竟は、米は肉であるといふやうに速了して居るからではあるまいかと竊かに察するのである、成程吾人は、日々身體の補缺の爲に米穀を食するのであるが、之を食したからとて、若しも胃や腸で十分之を消化なければ、毫も吾人の身體に益するものでは無い、それと一つで、吾人が學藝を修めても、只教師から教はつたと云ふばかりでは是また何の役にも立たないのである、必ず能く自己の智識や意志の力で十分之を消化した上に、倘ほ之を同化しなければならぬ、此の同化するだけの力がありさへすれば、故らに氣遣はなくとも、一家の主婦となりたる曉には賢妻となり、又良母となりて、十分國家に對し女子の本能を發揮し得らる丶のである、



學習院女學部長　下田歌子女史題歌

前共立女子職業學校刺繍主任教授
學習院女學部教授　木村仲子女史編

刺繡教科書

全一冊

和装美本
定價金五拾五錢
郵税金六錢

本書内容の概略を示せば●刺繍の起源及び變遷●刺繍と繪畫との關係●刺繍するもの丶姿勢●刺繍用の器具及び材料●畫の組立及び布帛の張方●下繪の寫方●布帛に對する注意●針の持方及糸の使用法●糸の縒方●仕上げ方●繍方の種類及說明●紋繍●旗章の繍方●金繍等にして其繍方の如き各種の花鳥草木は勿論景色等五十數節に分ち各節に綿密なる圖畫を挿入し精密に說明したれば初心者も本書に據れは容易に會得する事を得故に各種の技藝學校に於ては其教科書として家庭に於ては獨習用として無比の良參考書たるを疑はず

共立女子職業學校編物主任教授　豐原繁尾子女史編

編物教科書

全一冊

近刊

同校造花主任教授　金子支江女子史編

造花教科書

全一冊

近刊

發行元　東京築地　國光社
發賣所　全國各書林
振替貯金番號壹壹七八番

教育と植物

棚橋絢子

教育といふ事は、自分も多少手觸つて居りますので、十分とは申されませんが、少しは承知いたして居りますが、植物の事に至りましては、實際の素人でございますから、之に就ては口を開かれないのでございます、尤も小さい草花などは、多少庭前に植て居りまして、朝夕心や眼を慰むることに致して居りますが、それとても何角忙しいので、自から手を下して培養するといふ事もよう致しませんから、是また實地の處は分りません、併し先頃人様から梅の盆栽を一鉢贈られましたので、その栽培法に就きまして植木屋に聞きますると、三日乃至四日目位に少しづゝ水を遣れば宜いとのことでございますから、初めの中は其教へ通りにやりましたが、兎角極つて毎日する事でないと忘れ勝になるもので、ツイ忘れるとは無しに忘れて居りますと、最早餘所さまの盆栽はみな花の盛りとなりましたにも關はらず、私の所の梅は一向に咲きません、

いつまでも半開

で居りますから、何うした譯かと考へて見ますと、前申したやうな手ぬかりのあつた事を覺つたのであります、この外に一鉢の水仙も矢張そんな工合でありましたが、是はツマリ素人のせいであらうと存じます、

凡そ人たる者が其子を教育いたしますのは、云ふまでもなく

愛より成立つて居る

ものでありますが、サテその愛が變になりますと、教育といふものが完全にまゐりません、植物の培養もそれと同じでございます、元來人が子を愛するのは本心でありまして、善い上にも善くしたいと望むので、誠にそれは結構な事でございます、併しさう一から十まで、揃ひも揃つて善い事ばかりといふ譯には參りません、然るに愛に溺れますると、少しも

其惡い所に氣が付かないのでございます、植物にいたしましても、何うかその葉や枝を茂らせ、花もまた澤山咲かせたいといふのは本心でありますが、その愛が過ぎますと、折角の盆栽をも枯らすやうな事に立至るのでございます、

誰しも自分の子女を教育いたしまするに、學校へ行つても負けないやう、またソコラで遊んで居ても、體格は他の小兒より立派に育てたいといふのは人情でありますが、それが爲に學校から歸ると無暗に温習をさせたり、又は時に構はず食物を取らせたりする者がありますけれども、是は善くしやうとして、實は反つて惡くするのでございます、私は萬年青の一鉢に餘り水をくれすぎて枯らしましたが、丁度それと一つでございます、何んでも物は古人の言はれたやうに過不及のないやうに行らねばならぬのでございますが、サテその過不及のない即ち中庸を得るといふ事は却々六づかしいものでございます、殊に我々の弱點とも申しませうか、兎角一たび之は善いと思ひ込みますと、偶々少しぐらゐの惡い所がありましても氣が付かないのでございます、否、氣が付きましても、まづ／＼といふやうに見遁しをしてならぬのでございますが、それでは中庸を得やうとするには、自分に確乎たる信念を持ちまして、惡い事は惡い、善い事は善いと明瞭區別を付けなければ不可ないのでございます、所が世間多くの場合に之を失するのでございますが、それは何が爲であるかと申しまするに、何事に向つても

過當を望むからである

その過當を望む所より偏するのでございます、既に偏しますから、知らず／＼自然に背くといふやうに立至るのでございます、

同じ教育を施しますにも、學校の先生と御醫者では自から主張が違ふのでございます、學校の先生の側では、固より體育を重んじないのではありません、けれども何方かと申すと、マア學問の方に重きを置きますから、少し位身體が弱くとも勉強するが宜い、

學問といふものは幼少の時に限る、中年になつては駄目のものである、學問さへ出來れば、後に幾らでも養生などは出來るといふ工合に、無暗に注ぎ込み主義の敎育を主張いたさるゝのであるが、御醫者樣の側になりますと、諺にも、身體あつての物種といふ事もあり、又健全なる身體には健全なる精神が宿るといふ格言もあれば、何人でも身體を達者にいたさねばならぬ、この身體さへ丈夫であれば、それほど學問などが出來なくとも、決して社會に出で丶生活に困るものでは無い、故に何方かといへば、學問などは措いても身體を達者にせなければならぬと斯樣に被仰るのであります、

成程兩方の御言を聞いて見れば、孰れにも一理あるのでございますが、實に極端と極端とに走られた御說で、みな御自分の方へ過當の望を屬せられますものから、遂に右樣の御說が出て來て偏してしまはれるのであらうと存じます、凡て我々人間たる者が世の中を渡つて參りますには、病身でも無敎育でも困るのでございます、それ故に其所は互に折衷して行つていかなければなるまいかと存じます、若しさもないと、丁度私が前に申し述べましたやうに、餘り水を加減した爲に梅の盆栽を半枯しの病身となし、一方は餘り水を遣り過ぎたが爲に萬年靑の一鉢を枯したやうな過ちに陷るのでありますから、何うかその邊を折衷して行つてお貰ひ申したいのでございます、最早大きくなりました者はさうでもございませんが、まだいたいけな子女といふ者は、紫にも赤にも何方にも染めなさるゝのでございますから、その敎育の仕方は恰かも植物の培養法と同じ手加減で行かなければならぬものであると、深く自ら感じましたので、聊か此事を御披露いたします、チヨツト御斷り申して置かねばならぬ事は、私の此に敎育と申しまするのは、單に學校の事のみを指したのではありませんから、もとより家庭をも含んだもの此事の御承知置を願ひます、

新式菓子製造法

梅田矯菓

●長芋煉切餡

原料調合率　△茹長芋肉百匁　△粗目糖五拾匁　△浮粉三匁

長芋の土を能く洗ひ落し、上皮を剝ぎ三四寸位に切り離して水中に投入れ、一日間程惡汁拔をして取り出し、土鍋か釜の如き厚い鍋へ入れ、清水をビシヤ〳〵と注ぎ込み、七輪烈火に掛けて暫時煮沸し、小楊子が容易に突通るやうに柔かく茹復して火から下ろし、其熱い間に毛張の裏漉篩へ上げ、杓子で手早く擦漉出して漉芋を拵らへ、其多少共に前記の分量に準じて漉芋と砂糖の量目を計り、全體を銅鍋か琺瑯塗鍋へ投れて七輪烈火に掛け、其中へ砂糖を少々づゝ加へ、萬遍なく掻きまはし、煉交せる樣にして濃厚に煉詰め、乾いた掌に押當てゝ引離し、粘着かぬ位の堅目を程良い煉加減として下ろし、更に毛

の裏漉篩へ煉餡を上げ、杓子で徐々と擦漉出して稍熱氣を發散し、其中へ前記分量の如く加へて能く揉み交せ、其儘又は各種の着色等を施して其餡を上皮とし、内部に赤小豆餡玉を詰め入れて細工用に供するなり

●煉切蓬萊

前記の長芋煉切餡を五匁程づゝに切り分け、手頭を濕して押し擴げ、其中へ拾匁の早仕立赤小豆餡玉を載せ、指先で壓詰入れ、種皮を寄せ合せて確と括りつけ、腰高き圓形に格好を整へてから龜甲形の金網を七輪に掛け、稍々燒き熱したる編目に胡麻油を布き、前の饅頭を載せ押附けて、狐色に燒目を着けて取離し、板上に列らべ置き、其周圍に寒天糖の熱汁を刷毛に浸して塗りつけ、漆塗板上へ取り列らべて冷し、凝固まるを待つて靜に摘み、取離して菓子皿へお盛りなさい、

●煉切友白髮

長芋煉切餡を參百匁程拵らへ、其全體の三分の一

程を取り分けて四匁位づゝに切離し、掌で押延べ擴げ、其中へ七匁程の早仕立並割赤小豆餡玉を載せ、指先で徐々と壓詰入れ、種皮を寄せ合して括りつけ、隨圓形に格好を整へ置き、次に口徑二寸五分、長さ五寸位で節附の竹筒內へ（此竹筒は俗に細多卷筒と云ひ、其節面に一分圓程の小穴を四五個、各少許づゝ離して穿ち置き、尚其竹筒に差込み出入自在の棒を要するなり）前に殘し置いた煉切芋餡を五六分目程撚り延べて入れ、更に棒を突差入れ、其竹筒を兩手で確と握り、棒端を下腹部へ當がひて徐々と壓迫し、竹筒穴から垂出づる餡紐を前の小判形の饅頭面へ縱横に段々と搾出しつゝ載せ重ね、飾つてお用ゐなさい



●甘露長芋

良質の長芋を能く土を洗ひ落し、上皮を剥ぎ去り、更に庖丁にて長さ二寸位づゝに切分けて土鍋か釜へ投れ、清水をピシヤ〳〵と注ぎ込んで七輪烈火に掛けて暫時煮沸し、小楊子の突通る位に茹殺して下ろし、笊に揚げ、上から清水を少々注ぎかけ、熱氣を發散し濡布巾を被せ置き、次ぎに其茹芋一升に對し上等粗目糖二百匁の割合に計つて琺瑯鍋へ粗目糖二百匁と清水一合貮勺とを投れ、七輪烈火に掛け、時々杓子で攪まはしつゝ糖塊を融解し、稍沸騰して下ろし、其中へ前の茹長芋を入れ、半日間程其儘浸しおいて水分を吐出さしめ、其蜜ばかりを鍋へ絞り取つて七輪烈火に掛け、暫時沸騰せしめ煮蜜の吹上がる泡粒が細まかく整つて煮上がるやうに濃く煮詰りなば取分けおいて長芋を入れ、徐々と萬遍なく杓子で攪まはしつゝ雜と長芋を熱して火から下ろし、別器へ笊を當て移しあげ、長芋と蜜とを別々に分離して蜜ばかりを以前の鍋へ戻し入れ、再び七輪烈火に當てゝ煮沸し、前同様に濃く煮返して試みに煮蜜を少許掬ひ取り冷水に浸し、柔かく粘々と冷め凝集する位を煮詰め加減として其中へ再び長芋を入れ、靜に杓子で攪きまはしつゝ雜と沸騰せしめて火から外づし、其儘一兩日間蜜浸し置き、お用ゐの際は金網へ長芋を掬ひ上げ、網下に容器を受けて蜜を能く絞り、更に遠火に翳じ、徐々と充分熱して後其芋の周圍を蠟紙か銀花鉛紙を捲包み、外形の體裁を裝つて菓子器へお盛りさない、

●糖衣掛人參

原料調合率　△茹人參一升　△上等粗目糖三百匁　△清水二合五勺、外に白砂糖六拾匁

先づ良質の人參の上皮を剥ぎ、更に木口から四分位づゝに輪切にして土鍋か釜へ投れ、清水をびしや〳〵と注ぎこんで七輪烈火に掛け、小楊子が容易に突通る位に柔かく茹殺ぼして火から下ろし、煮汁を絞り、更に清水を一二升注ぎかけ上に濡布を被ぶせ置き、次ぎに其茹人參一升に對し上等粗目糖參百匁の割合を以て、先其粗目糖參百匁と、清水二合五勺

とを琺瑯塗鍋か銅鍋へ投し、七輪烈火に掛け、杓子で攪まはしつゝ糖塊を悉融解し、暫時煮沸してから其中へ前の茹人参を一升投れ、萬遍なく杓子で攪廻しつゝ雜と沸騰せしめて火から下ろし、別鉢へ笊を當て注ぎわけ、茹人参と煮蜜を別々に分離し、蜜ばかりを以前の鍋へ戻し入れ、再び七輪烈火に當て暫時沸騰せしめ、煮蜜の吹出でる泡粒が細かく整つて煮上がるやうに濃く煮詰め、其中へ再び茹人参を投れ、攪廻しつゝ雜と煮沸して火から下ろし、其儘一兩日間浸しおいて後糖衣掛を行ふのです、而し其糖衣掛方法は、先づ一兩日間浸漬を施した人参と蜜を七輪烈火に載せ、杓子で攪拌しつゝ暫時沸騰せしめて火から外づし、別器へ笊を當て注ぎわけ、人参と蜜とを別々に分離して其蜜ばかりを以前の鍋へ戻しわけ、再び七輪火に掛けて充分煮沸し、蜜の煮泡が細かく泡沫を整へて吹き出でる樣に濃く煮詰りなば前の人参を加へ、稍火力を減して弱徐と煮沸し、試みに煮蜜を少許杓子頭へ掬ひ取り、水中に浸し見計り、忽ち柔かに冷め凝固する位を程良い煮詰め加減として下ろし、例の如く別器へ笊を當がつて注ぎわけ、煮蜜を絞つて直に塊ない白砂糖内へ移し入れ杓子で徐々と攪まはしつゝ人参の周圍に萬遍なく糖衣を塗し着け、充分熱氣を發散し乾かし、毫も濕氣のない壺か硝子壜類中へ取入れ、上蓋を被せて風通しの宜しい室内へ入れ、貯藏しつゝお使ひなさい但し人参は餘り柔かく煮過ぬやうにして揚げ蜜漬にすべし

◎生姜糖

原料調合率　△上等粗目糖六拾匁　△清水四勺　△生姜搾液少々別に美濃紙を用意すべし

先づ琺瑯塗鍋か銅鍋へ上等粗目糖六拾匁と、清水四勺とを投れ、七輪烈火に掛け、時々杓子で攪まはしつゝ糖塊を融解し、暫時煮沸し煮蜜の泡沫が細かく粒を整へて吹上がる樣に濃く煮詰まりたれば、少許掬ひ取り、水中に浸し見計り、忽ち稍柔かに冷め、凝固する位を程良い煮詰加減として火から下ろし

直に擂棒を持つて徐々と擦交せ合し、其蜜が稍白く變色しなば手早く其中へ生姜汁を注ぎ入れ、掻きまはしてから更に美濃紙を敷延べたる上に流し延べ、稍熱氣を發散し、其冷め凝固するを待つて紙から剝き取離し適宜の形狀に折分けて乾いた硝子壜類へ移し入れ、貯へつゝお使ひなさい
但し生姜汁の拵らへ法は、生姜根を山葵擦で擦下ろし、木綿袋へ移し入れ、袋を捻ぢ締めて絞り出した液をお用ゐない。

長閑けき野邊

中山幸子

菫さく野はなか〱におもしろく
　暮るゝもしらで摘にける哉
こゝろなき人にふまれしすみれ草
　つゆのめぐみの花の咲きけり

柳

青やぎのいとあたゝかき春の日の
　みどり色そふ空のゝどけさ
春風に柳の糸のむすぼれを
　とくかと見ればまたも結びぬ
はるかせに靡く柳のもえ出でゝ
　みどりの色ぞうちかすみける
うら〱とかすみながらに里川の
　岸のやなぎに春かせの吹く

雲雀

今までは野澤にうつる夕ひばり
　ゆくへもしれずなりにける哉
けふもまた雲雀きゝにと野に來れば
　かすめる空にこゑぞ聞ゆる
田せりつむ野澤のおもに影見えて
　そことも知れず雲雀なくなり
おのづから心のどけき春の野に
　雲雀の聲のおもしろきかな



一

照りつける梅雨あがりの、路を埋めて繁り合ふ夏草の香が高い。舊道の小さな峠も、上れば汗が總身に浸む。五尺の莖に八寸の花びら、ゆらと首垂るゝ山百合の美しさ。白衣の天つ少女かとも。栗の花、妙に薫り、茂る薬潮、そよ風に波立つ、雜草の蓆の柔さに腰を下して肌を拭ふ。山路はゆかしいものである。詩心しきりに動きて、うつとりとせる男の眼に、今、入つたのは坂を上つて來る美しい女、羞ぢらいもせで行き過ぎやうとする。

『あの――小網代へは此道を行けばよろしいのでせうか。』

男の間は突然であつた。女はふりむいて、

『は、この道を行らつしやればよろしいのですが。』

立ち止つて風呂敷包を持ちかへながら、
『小網代はどこへおいでなさいます？』
燦と光つた眸は涼しい。
『海藏寺と言ふのを尋ねて行くのですが。』
案内を知らぬのでと言はうとする語氣を抑へて、
『あなた、また、この邊は始めてゞゐらつしやいますか。』
田舍娘の言葉らしくもない。「そうです」との答をも待たで、
『私もその海藏寺の邊へ歸るのですから、何なら御一緒に參りましよ。』
親切は十分わつても、田舍娘の蓮ちらつて言ひ得ないところをこの女は言ふ。暑さで上氣した頰は櫻色の、どことなく愛らしいとよりは氣高い顏だちである。
『では、さう願ひませう。』
願つてもないと言つたやうに、男は立つて後につゞく。
『これから先は知れにくい道ですから。』
ちらとふりかへる。眸が光る。
『物數奇に僻道を通つたので、此處まで來るにも、見る人見る人に訊いて來たのです。』
半、髮に隱れた耳元から首筋のわたりの、柔かげに美しきを男は熟々と見ながら言ふ。女はそれに應じて、
『そうでございましたでしよ、初めての方では。』

道はだら〳〵下りになる、薬湖の手を鎖す中から、山百合が装てらしてしほらしう頭さしのべてをる。
男は見とれて、
「ですが、道が知れ難い代りに、美しい百合の花が見られます。」
「さうでございますよ、今が丁度眞盛りでございます。」
一寸、立ち止つた女はふりかへつて、
「あなた、お好きなら採つてあげましよか。」
といふ。さらでも詩心づける男の胸に、極めて床しい響を傳へる。が、さらぬ態に、
「ありがたう、ですが――」
女は早や伸び上つて莖に手をかける。
「ですが、折るのはよして下さい。咲いてゐるまゝで眺めませう。」
「かまひませんよ、こんなに澤山あるのですもの。」
もう折り取つて立つてをる。
「でも可愛さうです、折つたら直ぐに枯れてしまひます。」
「ほほほ、まあ、たいそうお優しいことをおつしやいますのね。」
「全くです、全く可愛さうです、斯う美しう誇らしう咲いてゐるのを、むざと折りとる人の無慈悲に花は
どんなに恨むでせう。」
男は道理らしく氣取つたことを言ふ。女は平氣で、
「大丈夫でございますよ。私が折つて貴君におあげ申すのですもの。」

花の心は私がようく知つてをりますと言はぬばかり。鼻のあたりへ寄せて見て、

「ま、よい匂ですこと。」

と、今度は男の鼻の前にさしよせる。男は詩人ではあるがまだ若い、美しい女の手から、これあげませうと百合の花をさしつけられて、床しいやうな、氣味のわるいやうな、妙に胸の時めきを覺えて、頰にも手を出しかねるのを女はもどかしげに、

「お厭なら捨てましよ。」

パサと音して大地の眞半、六つの花瓣しどろに崩れて、花粉の綠の草の上に、黄金の小花を咲たがやう。

「美しいもの丶最後はみんな斯うなんでございますよ。」

女は冷やかな一瞥をこの無慘なる死骸の上に與へて、やがて、

——咲いた花なら手折るもよかろ、散るが運命の花じやもの——

と小聲で歌つて歩行き出す。男は崩れた花を杖の尖で衝きながら、斷腸の思ひ入れはわざとらしい。

「散るのは自然の運命としましても、手折つた上に、道の眞中に投げすてるのはあんまりでせう。」

同情に堪へぬとやうにじつと見入る。女はそれに答もせねば、又ふりかへつて見もしない、さつさと歩行いていつてしまふ。男も今は足早に歩行きながら、

「女の人の心は、まつと優しいものじやないのかしら。」

と獨言のやうに小聲でつぶやく。

「ほほほ、何ですね、いつまでも。散るのが自然なら折るのも自然でしよ。」

女の鋒尖はなかなか鋭い。男は眞面目になつて、

「手折る人には自然かも知れませんが花の心になつたらどうでせう。」
いかにも同情心が深いらしく熱心な口調で言ふ。
「滿足でしよ、盛りの中に折りとられるのは花に取つても滿足でしよ。」
愈〻出で〻愈〻鋭い。敗け氣味になつた男は、
「しかしそれは疑問でせう、あまりに勝手な理屈じやありますまいか。」
と、立て直す鉾尖を女は抑へて、
「何ですか私理窟は存じませんが、畑に作りまする鐵砲百合なんぞ、花を早く摘み取つた方が、根の球が大きいと申しますよ。」
話はあらぬ方へ向けられてしまつた。男は默つて考へる。
谷一つ越えて又小高い丘に、波の音が耳に近い、畑が盡きると道が二筋に分れる。女は立ち止つて一寸首を傾けて、
「かう行きましよ。渡船で行く方がずつと近うございますから。」
右手の、人の通りさうもない細道をたどる。
小松の茂る根方には花薊、釣鐘草などの微笑む九十九折坂路を四五丁も下りると、目の前に美しい入江が開ける。二人は無言で下りて行く。

二

磯には捨小舟が二つ三つ、引き上げられて草のからまるにまかせてゐる。
小屋もなく、舟もない、人も居らぬ。

「此處ですか、渡船場は。」
男は不審に思つて訊く。
「は、此處でございますよ。」
女は、波の洗ふ岩の上にすらりと立つて向ふの岸をきつとながめる。
男は狐にでも誑まれた氣がするので、
「だつて船も人も居ないじやありませんか。」と重ねて訊く。
「御心配なさらんでも大丈夫でございます。私に任せておおきなさいよ。」
何だか昔の女盜賊とやらが聯想される。が、二十世紀にまさか、と男は默つて女の後姿を見る。
白地に矢飛絣の單衣、帶は瑠璃色に浮模樣の巾狹なのををとなしくくしやんと結んだ腰のあたり、すらりとした肩付の、丁度かうして岩の上に立たせるに應はしい。と見てゐると、もう女盜賊の聯想は消えてしまつて、こんどは洋風の畫を聯想する。自分は畫ができるなら寫しておくに、さうだ、實によい畫だ、慾を言へば眞裸體にして、無縫の純白の羅布を肩から斜に裾を曳かせて、髮はさばいて七尺を、風に任せて靡かせたら、わお海、この荒海の波打際の岩角に立たせるに、いかによく應うであらうか。さうだ、裸美人、岩角に立つて、髮を風のまにまになびかす、畫だ、詩だ。
男は今、單衣も帶も剝ぎ去つて、直下、裸形の少女を幻想の中に見てをる。と、この時、岩角の美しい人はふりむいた。
「急に風が出ましたので、渡船の老人、どうかと思つて愚圖愚圖して居るのでございますよ。」
男は始めて合點が行つたらしく、

「では、向岸からわざわざ迎ひに來るのですね。」
「さうですよ、船一つ、人一人なんですもの、夫に年老てゐますから、少し波でも立ちますと――」
「では、今日はだめなんですか、こんなに波が立ちましては。」
「なに、今に參りますよ。私だといふことがもう分つてゐるでしよから。」
この邊に女王たるの權威を持てるものゝ如く言ふ。
「なるほど、それで先刻からそこにさうして立つてゐらつしやるのですね。面白い。渡船守を岸に立つて呼ぶなんて、二十世紀には見られさうもない圖ですな。」
と、男はいよいよ興に乘る。
「田舍は暢氣でございますから。」
風が出たので、沖邊は白う波立つ。が、此處、入江はそれほどの波でもない。
「あ、出ました。老爺笑つてゐますよ。私だと知つたのでしよ、きつと。」
「ああなるほど、來る來る、あれですね。」
老人は、波に搖られながら掉をとる、これも畫の中のものだ。男は突然に、
「小網代は、この渡船を渡つてから遠いのですか。」と訊く。
「おや、貴君もよつぽど暢氣でいらつしやいますのね。向岸に見える村が小網代でございますよ。」
「さうですか。」と稍力ぬけのした容子。
男の心には、行き着くに日の暮るゝ程、遙か彼方が小網代であつて、そこまで此の美しい人に案内せられて行くならば、と思つてゐたので。

あの向岸に見える村が小網代？。すると、渡船を渡つて了へば、もう美しい人と語ることがあるやらないやら。それならば老爺さんが、見つけて呉れぬ方がよかつたに。假令、岸で夜を明すやうなことがあつても。

しかしだめ、老人の掉の手は動いて止まない。刻々、自分の嬉しい運命を縮めて船はこちらへ近づいて來る。

と、次の瞬間には、いつそ灣内が大暴れに暴れゝばよいに。船の通へないほど。老人が懼れて引き返してしまうほど吹かんかナ風が、狂はんかナ波が。

だが、もし海が暴れて、船が通へないといふことになれば、陸を廻つて歸るといふことになるだらう。それでもよい。此處を眞直に渡るよりは時間が幾倍か長い。或は又、そうなると、美しい人は、あの氣性だから、一旦思ひ立つてひつかへすのはつまらない。凪ぎるまで待たうと出るかも知れない。さうだ、さうなれば思ふ通りだ。「私の力で暴れ狂ふ波をしづめて見ましよ」と出るかも知れない。おもしろい、ほら、風が吹く。波音が高まるやうだ。思ふ通りになりさうだ。吹け風。狂へ海。と、この時、

「孃さん、どこへ入らつしやつたつぺ。ねつからはあ、似た人だがと思つたがよ、お連がある様子じやや、逢ふけえなわと思つてゆるめてゐただ。」

と言わけでもするやうに、言ひながらも掉の手は止めない。

「どうでもよいから早くね。」

美しい人はやゝいらだつ。

「ハハハ、待たつしやい、今に着けますべい。」

さらばと言つて急ぐ氣色もない。

「この方がね爺や、初めてだとおつしやるので、案内して來たのだがね。あまりお前か遲いので、待ち疲れてゐらつしやるから、早くね。」

決して待ち疲れてゐない案外な言葉に男ははら〳〵する。風もさほど強くならぬ。波もさほど立たぬ。船は眼の前に來た。



「なに僕、決して急ぎはしませんよ。」と怨じけに言ふ。

「貴君がお急ぎでなくとも、私は急いでをりますわ。」

と更に案外。もうかうなつては、二人船に乘つてゐる時、俄かに海が暴れて、波のまにまに何處とも知ら流れて行けば、などゝ飛んでもない空想に耽る餘地がない、船が岩角につくと、

「お先に御免あそばせ。」
と三尺も離れた船へ、飛び込んで平氣で衝立つてゐる。
「爺やはほんとに今日は長く待たせたのね、じれたくてじれたくて。」
「へイ、どうもすみましねえ。」
男も續いで乗り込んだが、ぐらぐらするので直ぐ横木に腰を下す。
「これで、沖ではなか〳〵の暴れでがすせ。」
「さうだらうね、それで、わざとゆるめてゐたの。」
と言つて美しい人は男に向ひ、
「あそこに見えます石階、あれを上つた高い處にあるのがお尋ねの海藏寺でございます。」
と立つたまゝ指さす。灣内とは言へ波はある、船は一度は波の峯へ一度は波の谷へ。男は指さされた方へ眼を走せる。がよく見えぬ。見えぬのではない、得見ないのだ。
「見えましよ。見えませんか。一寸こちらを。」
美しい人に袖をとられて、恐しいとも言ひ得ぬ男は、危く立つて見ようとする、と、ぐつと横波に乗つた船は烈しく動いて男を倒さうとする。倒れかゝつた男は僅かに美しい人の腕に倚つて支へられた。
「あ、見えました。」
「見えるでしよ。よいお寺でもないですが、高い所ですから、涼しくて、見晴しがよくて。」
「さうでせう、涼しさうです。」
と男は、動悸を高めて、震へながら夢中に答へる。

「貴君、船がお恐いのですか。もう直き着きます。」
「今日の波ぢや、馴れない人にや立ちきれねえ。」
爺さんに辯護するやうに、汗を流して櫓を採り／＼かういふ。
「私は又、男の方はそんなじやあるまいと思つてゐましたの。」
「女でも、嬢さんは別だ。」
と男の顔を見て笑ひながらいふ。
「爺や、私、そんなにお轉婆に見えるかい。」
船はがちりと磯の波打際に着いた。男は、何も言はずに女の眼の光りに從つて船から上る。
「此處が小網代でございます、お疲れなすつたでしよ。お寺は、あの向の石階からお上りになると表の門の處へ出ます。私は一寸そこに用事がございますから、どうぞお先に。」
男の豫期してゐた時は來た。柔かい手の暖みばかりはなほ殘つて。
「どうもいろ／＼有難うございました。いづれ……」
「いづれ」の次の句はつぎ得ない。「いゝえどういたしまして」と丁寧に頭を下げて美しい人は左の道へ。男は暫時立ちとまつてゐたが、漸く敎へられた方に足を運ぶ。

三

石の階子百十二段、上れば寺の境内になる。右に六地藏、左に南無阿彌陀佛を草で彫つた竪碑、大きな樹の翳す下に小さな蓮池もある。正面には朱塗地に金文字で圓敎院と鮮かに表した大額が掲つてゐる。
去年の夏、この寺に世話になつてゐたといふ友からの紹介狀を男は取次の小僧に渡す。

案内せられたのは樹の間越に海の見える八疊の座敷。男は魂のぬけたやうな身體を椽先に持ち出し、見るともなう外の景氣に眼を放つ。

正面の大杉と小さな樟との間に見えるのが富士。七分以下裾野に通けて一體に紫灰色の薄衣に包まれ、上は次第にぼけて頂上のあたり黄樺に耀く。左の方、箱根足柄、灰黒色に包まれて、南へ伊豆は薄うぼかされてをる。右の方、江の島の眞黑うに灰色の霞の中に浮んで見える。

風は今、凪ぎたと見えて沖の方にも白い波はたゝぬ。灣内は碧琉璃を湛へて靜に、沈まんとする夕陽は眞鶴岬のあたりよりその七色を波上に投げて、白銀黄金の珠を碎く。

新井岬と三浦が岬とを右左に、近く灣内に眼をおとすと、最前渡船して來たのはあの邊だつたらう、美しい人の手に支へられて立つたのはあの邊だつたらうと思ふと、愈以て床しいやうな、嬉しいやうな、恐しいやうな氣持になる。

好い、實に好い景色だ。友は決して自分を欺かなんだ。願くはこの夏を此處に過すを得たならば、然らば或はその間にあの美しい……などゝ茫然考へてをると。

「や、おいでなさい。貴方が岸部さんの御友人で。」

と言つたのは當寺の住職、男は我にかへつて、

「はい。どうもよい景色で。」

とまづ賞めて、さて座に直つて一通りの挨拶、次いでこの夏をお世話になることは叶ふまいかと尋ねる。

住職の答はかうであつた。

「二三日前に東京の方で、是非借りたいと言つて來てをる。確定はしてをらぬが、極く懇意な人から頼ま

れてをるので、その方が何とか定るまでは確答はしかねる」とのこと。男はいさゝか失望した。住職は更に言ひ足す。

『で、一先、お歸りになつて待つてゐなさるにしても、今日はでゆるりなさい寺の馳走も珍しからう。汽船の直行のは十一時でないと出ませぬから。』

男は、仰に從つてゆるりとすることに極めた。住職は、話をつゞけて、此處は景色はよし、不自由もないが、高い處で水には困る、風呂を立てるにも下から水を吸み上げるのが大變だから、いつも墓守に立てさせてをる。今日も立てゝをるから何なら汗を流してござれ、など親切に語る、強ひて湯に入りたいとは思はぬが、折角の勸めであるから、男は

『ありがたう、どうぞそれでは』この受け答へをすると、住職は、田舍の事故、風呂と言つても家外に立てゝをる、家の中は反つて穢しいので、など說明やら言譯やらして、小僧を呼んで案内するやうにと命じた。

男は、家の外で立てる、野風呂であると聞いて一段の趣味を感じつゝ小僧に連れられて海に面した裏坂を下りて行く。

墓守の家とは言へ、門を入つて兩側が可なり廣い庭園。掃除は行き屆いて、美人草、孔雀草、月見草など思ひ思ひに咲きみだれ、右の垣根には夏菊も二株、蘇鐵の小さなのが所々に綠ふかく、灌木喬木程よきに配置せられてある工合は、お寺の庭園よりもずつと優つてをる、これでは亡者もさぞかし喜ぶことであらうと男は思つた。と共に、墓守の床しさも思ひやられる。

見廻す左の海の上、波の音の近う響く蘇鐵の彼方に煙が仄かに立ち昇る。

小僧にそれと数へられて行つて見ると、驚いた。

風呂桶の中から、すと立つたのは、如來か、あらず、女神か、あらず、幽靈か、素より然らず。腰から下は見えぬ。肩付、首筋、脊、胸の肉付ふくよかに、身内をめぐる清き血潮は絹をあざむく皮膚を透けて、何と言はうか、その色、その光澤。足音に聞きつけてか、ちらと此方をふりかへる時、涼しい眉の下から、うつとりとなれる眸が光る。咽喉下の骨のあたり、しつくりと肉に包まれて、乳房のあたり何物の力か、此くは美しう造りなせる。まこと神々しきまで美しきその姿を、男は正面に見やらずて、そつと眸を反けた時、

「おや、いらつしやいまし。」

鶯のやうな而も力の籠つた美しい聲が響く。

聲の主は野風呂の中の女、見れば今日、案内せられたあの美しい人なのであつた。

「貴君が入らつしやるのでしたらお待ち申すのでしたに、お先に失禮してをります、一寸お待ちくださいまし。」

と體を屈めて上半身を桶の中に埋める。

「どうぞ、ごゆるり。」

男はたゞこれ丈け言つて見えぬ方へ歩を移す。――胸の裏はどんなであつたらうか。――種々の想像が浮ぶ、その想像がある形を取らうとすると、「おやいらつしやい」が耳に響いて掻き亂す。又、想像し始めると、裸形の美、渡し場で船待つ間に岩の上に立てる人を想像した時の美、それを今眼のあたりに見た幻

の現れて他の想像を許さない。
「お待ちどうさま。さ、どうぞお召しなすつて。」
第二の聲はかく響いた。櫻色の裸形の一部を包むに純白の湯卷一つ。五尺の黒髮を手握つて解しながら
美しい人は立つてをる。
男は上氣した顏を半向けて、
「今日は種々とありがたうございました。」
やつとの事でこれ丈け言ふ。
「ほほほ　どういたしまして、大層改つたお言葉で恐れ入ります、こんな姿で御免あそばせ。」
言ひ捨て丶家に入る。男は現なの思ひで湯に入る。匂うつり香の去りやらぬ風呂の中に現の夢を繰り返して、現に夢の中をたどる。
「お加減は如何でがあすかよ。」
と火口に立つたのは五十ばかりの寺男。顏に皺こそ寄つてをれ、色こそ潮燒で黒くなつてをれ、冒されぬ品格はどことなく具つてをる。ははあ、これがお父さんかしら、と考へながら、
「結構です、丁度よい湯です。」
と答へて更に想像の綱をたぐる。これがお父さんとすれば、はてな、なぜこんな處にをるのだろ、墓守、見る處どうしても武士の果、それが墓守、これには何か深い仔細がありさうだ、待て〳〵、と考へて居ると、
「お脊を流しましよ。」
第三の聲はかく響いた。

「ありがたう、恐れ入ります。」

と答へた時には、もう柔い手が肩にかゝつてゐる。潮染の秋草を拔た浴衣に桃色の襷を彩つた美しい人の、洗ひ髪は肩から垂れて男の腕のあたりを撫でる。

「おそれ入ります。も、どうぞ、ありがたう。」

男は嬉しさの餘り、言葉の響きに限りなき感謝の意を含めてかういふ。垂れかゝる髪をうるさげに振り上げながら、

「そんなに御遠慮あそばさなくてもよろしいじやございませんか。」

と、急に流してをつた手を止めて、

「御覧あそばせ、あの富士にかゝつてをりまする雲を。」

見るとなるほど美しい。朱のやうなのが中央に流れて、上へ紫に、下へ瑠璃に、程よくぼかされて嶺を包む。空と海とは一つ色に澄んで深く深く。

「あゝ美しい。僕、こんな壯麗な景色は、生れて今、始めて見ます。」

「理想の國、詩の國つてあんなでございましよか。」

二人の視線は、遥けき富士が嶺に耀く雲のあたりで一つに融け合ふ。

❀　❀　❀　❀　❀　❀

男は十一時發の滊船で歸京の途についたが甚の女については殆ど何事をも知り得なんだ。その年齢も、その名も、その氏も、その生ひたちも。けれども男にはかの女を忘るゝことが出來ない。（完）



佐々木信綱先生選

春の月

天

酒のせて下る小舟に一しきり
花吹雪する春の江の月

宮城　山形さち子

(評)舊の如き歌原作二句下る筏にとあり。小舟にあらたむ。

地

牧の子の笛に醉ひたる小羊の
夢の行方か春の夜の月

名古屋　中村ちよ子

(評)草みどりなる廣野の牧に月讀める春の夜のさま有聲の畫ともいふべし

人

春の汐よする小磯の夕月夜
かにもとらへぬ貝も拾ひぬ

千葉　益子智子

(評)着想おもしろし

秀逸

白梅のかをりつめたきおはしまや
友なつかしき春の夜の月

下野　井上倘子

梅匂ふおほろ月夜を扉によりて
ものをやおもふ髪ながき人

美濃　多田さとる子

流れゆく水もねむりてさくらちる
花のおばしまたゝ春の月

近江　石王かず子

駒とめて花の木蔭にたゝずめる
貴人わかし春の夜の月

東京　奈良八重子

美濃　芳賀敏子

芝居はてゝ一群かへる小女子の
青柳なはて月さえにけり

美濃　長縄みの子

さく花を見てやおくれし山かつの
負へるま柴ににほふ月かな

美濃　吉田のぶ子

山かつの家路にいそく聲すなり
月もおほろの春の夕くれ

長野　岡田千穂子

雁かねのかへるひとつらほの見えて
おほろにゝほふ月のかけかな

横須賀　柏原美奈子

梅が香に夕月匂ふ離れ屋に
琴はこばする十六の君

岐阜　山田はぎ子

花陰を水色紅衣の舞姫の
車つゝきぬ春の夜の月

東京　平塚白百合子

おぼろげの菜の花月夜小あせみち
かすみのそこをひな歌のくる

東京　吉岡鑑子

けあけたるまりかと見えて夕庭の
さくらの上に月のいてたる

東京　河下しづ子

春の月江の島山は朧にて
霞にたゝよふ灯の二つ三つ

東京　原三幸子

夕まりはいつしかやみて大庭の
やなきにかゝるおぼろ夜の月

千葉　益子操子

若芽ふくむ垣根のあなた梅手折る
妻にものとふ夕月夜かな

大阪　川島梶子

高殿の琴のしらへにあふき見る
月もたゆとふ春の宵かな

相模　藤原下枝子

停車場に兄を迎へて夕月に
つれ立ち歸る菜の花の道
岩代　岸野常子

三とせ昔し泣きて別れし故郷の
母なつかしき朧夜の月
岩代　岸野菊子

花の上のみ塔に春の日は落ちて
堤路一里月おぼろなり
新潟　岩本芳子

佐士の海や海士の小舟のかけくれて
なみよりいつる春のよの月
秋田　長谷川薫子

金屏をうしろにさかる十二尺
月のおぼろに姫琴ひかす
美濃　兒島八重子

菜の花の十里の廣野日はくれて
ひな歌低し春の夜の月

甲

せり摘ふ乙女のかいなしろ〳〵とおぼろににほふ春のよの月
○　名古屋　不破きみ子

櫻花咲亂みたる下陰の庵より見たき春の朧月
○　神戸　しみづ子

大空の月もおぼろに匂ふなり花のさかりの春の夕へは
○　美濃　金森じやう子

うち仰ぐせとの柳のめもはるの梢にかすむつきのかげ哉
○　大阪　下川登美子

住吉の社の杉にくぎうちて女いのりぬ月の朧夜
○　美濃　多田瑞枝

君も我も歩みつかれて言葉なく長き野路行く朧月の夜
○　大阪　木村春江子

ゆくりなく逢ひ見し友と語るまに影も匂ひて月出にけり
○　埼玉　横田やな子

花瓣おつる音して苔の上に淡月にほふたそかれの庭
○　埼玉　横田政子

牛引てかへる嵯峨野の小松原おぼろ月夜に笛の音ぞする
○　神奈川　鈴木まつ子

棟さけるわら家の軒に春の夜のつきはおぼろにかゝりけるかな
○　日向　江夏わかえ子

山のはに咲き匂ひたる花の上にかすみて出し春の夜の月
○　播磨　田淵きさ子

松風はまた寒けれど月かげのかすむや春のしるしなるらん
○　名古屋　山根しげ子

ひら〳〵と花ちりかゝるおばしまに箏の音ゆかしおぼろ夜の月
○　土佐　秋月廣江子

讀者文藝

山寺の鐘のしゝまを綴ちりて靜かに更くる春の夜の月
○　東京　秋田登志子
平和に佐保姫舞ひて遊ふらん梅が香薫る春の夜の月
○　岐阜　櫻井とら子
世を捨てし野中のいほの茅軒に老梅さきておぼろ月宿る
○　美濃　加藤里子
おばしまに欄ながむる少女の黒髪照りぬ春の夜の月
○　名古屋　中村濱子
電燈や瓦斯の火あをきやちまたにてるとも見えぬ春の夜の月
○　尾張　伊東はま子
夕月夜歩に入りたるおん姿朧に匂ふ白梅の花
○　愛知　荒木登美子
髭髯張る翁家路に日は落ちて梅の下道月おぼろなり
○　長崎　秋山虎子
春の夜の月のおぼろに霞めるははなのかほりや空にみつらん
○　三重　北村みつ子
舞衣春は祇園の月の夜にふと落したる舞扇かな
○　石見　山根直子
花かけに語りし友は今いづこ其の花園の春の夜の月
○　愛媛　秀子
高とのゝうたけはてしかこゑやみてふけゆく夜半に月おぼろなり
○　福島　會田たみ子
見渡せば海原遠く小夜ふけておぼろに匂ふ春の夜の月
○　神戸　梶原京子
ひばりなく畔なほのこる野末よりおぼろに月のにほひいでたる
○　和歌山　植木秦子
我が宿も春にはもれし朧月あやなくかすむ今日の庭かな
○　常陸　岡田萬子
傾城と禿と語るおばしまの影おぼろなる春の夜の月
○　東京　今泉劍千鳥
春の月朧にかすみ花の木の狂女が鬢蓬う照しぬ
○　美濃　傍島みゆき子
やさ手あらふ君がゆび輪のきらめきや南天もるゝはるの夜の月
○　岐阜　傍島曉子
たふれたる松そのまゝに橋わたす小川にきよし春の夜の月
○　美濃　目島眞砂子
春の月峠の松にほのめきて山彦すなり馬子の追唄
○　美濃　松田せき子
山の端のかすみかくれに見えそめてあけゆく空にのこる月かな
○　美濃　落合かき子
うら〱と波間をわけてさし出し霞が浦の春の月かな
○　美濃　小石こう子
白雲か花かさたかに見えかぬるおぼろ月夜のおもしろきかな
○　美濃　吉田よし子
大空はかすみの袖につゝまれて雲間の月も影おぼろなり
○　岩代　菅野和子
きえのこる雪のたかねにいでながらのどかにかすむ春の夜の月
○　北海道　佐藤央子
かたなりにうたふこゑさへあいらしく母まつかどに春のよの月
○　山口　村田まつ子
草遠く一水見ゆる野面にかゞやき出でぬ春の夕月
○　佐賀　藤松りか子
ほの〱と花はしらみてやまのはのかすみにくもるありあけの月
○　東京　青木たま子
うすはたの霞の袖につゝまれておもはゆげなる春のよの月
○　神奈川　服部八重子
歌書きて君住む方に流しやる小川つたひや春の夜の月
○　東京　西村直子

花くもり雨にやなりしおほろよのかすみにしづむ春の夜の月
○　東京　河合清子
よぶ千鳥なく山陰のおほろつきしくもゝなしとうそふくやたれ
○　東京　小島榮子
咲き匂ふ花のかほりやみちわらんみやこの空にかすむ月かげ
○　神奈川　飯田白露子
日は今し松の影よりくれそめておほろに匂ふ月となりゆく
○　越後　松永しげ子
我事のなりて二人が踊り合ふ窓をてらせる春の夜の月
○　越後　杉山節子
童の子が薄げしやうして面おでに櫻見る夜の月おほろなり
○　東京　田代糸子
うら〳〵とそらにかすめる月影に花なきやともはなくもりして
○　相模　杉森登代子
姉妹袷などがきぬる窓さきに桃の散りけり春の月影
○　府下　鵜澤蓋女史
神のみ手肩にかゝれる心地して袂とらへぬ月のぼる時
○　長野　北澤千枝子
河岸につなぎとめたる屋形船のともし火淡し春の夜の月
○　神戸　田尻保代子
うめかほる軒端に琴の音はさえて外山にかすむゆふ月のかげ
○　千葉　松丸はな子
なつかしき君がめでたる白梅を軒端に植ゑて春の月見る
○　松山　上原のぶ子
咲く花に光ゆつりてかすめどもあはれはおのが春の夜の月
○　松山　田村多豆子
なか〳〵にかすまさりせは大方の光ならまし春の夜の月
○　東京　服部やゑ子
吉野山匂ふ櫻の雲間よりおほろに霞む春のよの月

櫻川花ちる川の水の上に行くとしもなき月の影かな
○　茨城　金澤すゑ子
夕月のかけもおほろににほふなり花咲みたるゝみよしのゝ山
○　大和　栗山俊子
馬洗ふ里の小川もけぶるなり柳やおほろに匂ふ月かな
○　愛知　金野その子
梅の香をうくむ霞やへたつらんおほろに昇る春の夜の月
○　東京　林環子
何はあれと今に忘れぬ思出よ若草山の春の夜の月
○　越後　水野やすゑ子
佐保姫のかすみの袖につゝまれておもはゆけにも出てし月かな
○　大阪　小西まつ子
薄絹につゝめる玉とまかふまで花の梢にかすむ月かな
○　岩代　岸野せい子
入りぬへき山は霞にとさゝれて花に宿かる春の夜の月
○　河内　竹内敬子
かすみつゝてりそふ月のなかりせは春のながめやいかにさひしき
○　神奈川　長谷川すみ子
春の夜は分けて戀しき故郷の山も霞みぬ月淡くして
○　磐城　木暗きよ子

乙

秋の夜の月の光りもさもあらはあれおほろに霞む春の夜の月
○　大阪　磯俊子
吾かせこと庭に眺むる春の月霞めは霞みて池にうつれり
○　東京　松浦きよし
散らぬまとよるもながむる櫻花匂へる月のみちしるべして
○　下總　中川千鶴子
○　鳥取　圓井かう

讀者文藝

おぼろ月てらす磯のうるはしやひるにまさりて去りかぬる磯

○　　相模　中島類子

今宵しも梅は霞に埋もれて梢に匂ふ春の夜の月

○　　兵庫　古東靜子

いみじくもおぼろに照らす春の夜の月かげばかりめでたきはなし

○　　埼玉　横田秋子

くまどりて梅のにほひもかすみけりまた春寒き月の瀬の山

○　　伊賀　佐々木いすゞ子

天の女神よそほひ如何に金鏡のくもれるがごと春の夜の月

○　　播磨　田淵ふじゑ子

かるたどりふけてぞかへるみちのべをうれしやてらす春の夜の月

○　　播磨　田淵みき子

佐保姫のかすみの衣ぬきたなうすみもれてもてるか春の夜の月

○　　兵庫　古東壽美子

春の夜の露さへなくて照る月にほこり顔なる庭の老松

○　　神戸　今西操子

戀ひもつ人の宛らうす衣被るに似たり春の夜の月

○　　神戸　染山あき子

花の上に行き交ふ雲もおぼろけてやよひの空に月やとるらん

○　　美濃　八十銀子

湖畔に春月出でぬうき人の眞白き胸の血のはくににて

○　　岐阜　吉田まき子

さよふけておぼろ月夜に窓近く誰がしらべにや笛の音ぞきく

○　　福村直江

手折らんと咲く梅が枝にかけし手もかすみて見えぬ春の月夜に

○　　飛騨　南峰子

花車とよみし子弥の聲絶えて空に霞める春の夜の月

○　　兵庫　木村まさの

眞盛りのさくらは匂ふあかつきの月かげ淡く霞たなびく

○　　廣島　鈴澤きみ子

月おぼろ墨繪に似たる富士淡したゞ大空に一つうかみて

○　　東京　千勝ふく子

行きかへる人もそゞろとうき足の柳のちまた月おぼろなり

○　　白河　會田とよ子

かすみたつ霞が浦のはるの月朧はよそにまさりけるかな

○　　白河　深谷けい子

さくらさく山のあたりにたつかすみ月のかげには障らさりけり

○　　神田　小山てる子

遊ぶ舟いそしむ舟もけじめなく一つ瀬に照る春の月かな

○　　白河　川音そめ子

江の岸の白梅さきし春の夜に朧の月は浪にくだけて

○　　伏見　寺内ちく子

梅さげつ橋を乙女の行く見えて川瀬にかすむ春の夜の月

○　　美濃　長濱蘭子

召せとよぶ辻うらうりのはしき子のふりそでにさす春の月かな

○　　美濃　服部せき子

やまひいえて風あたたけし窓あけて久かたぶりに春の月見る

○　　美濃　後藤よしゑ子

晩鐘の聲も聞えて春の夕へさし入る月の影おぼろなり

○　　美濃　武藤きう子

花の香のねやのふすまに通ひ来て寐られぬ窓にかすむ月かな

○　　美濃　清川とし子

去年の春君と語りし夜なればこよひの月はいともこひしき

○　　美濃　梅田芳子

春の夜にかるた遊の歸り道ち夜は更け行て月はおぼろに

○　　美濃　梅田艶子

はなれ家にかるた遊びの歸り路をおぼろに照す春の夜の月

○　　東京　永井しげ子

夜の梅は香にこそ知れと朧なる月の心ぞみやびなりける

○　横須賀　高橋つれ子

晴れ渡る春の月夜に舟出して蓬萊島の春に浮かれん

○　東京　松原半子

咲き匂ふ花におもてやはづかしきはるはおぼろに月のかすむは

○　美濃　芳野富美子

かげうすう天原影をおぼろして歌をうましむ春の夜の月

○　美濃　花園まき子

月うすう天原影をおぼろして思ひ出多き春の夜半かな

○　岐阜　後藤英子

朋友と別れを惜む茶話會の昨年をし忍ぶ春の夜の月

○　東京　金子逸子

ふくろふのなくれ夜更行花のえにかすみてにほふはるの夜の月

○　伯耆　錦織千代子

薄衣のかすみの中にてりくもりうき世にとほき秋の夜の月

○　府下　[illegible]澤喜[illegible]子

新しき小橋渡りて迎へ車霞にかくれる朧夜の月

○　伯耆　錦織とみ子

この月を忘れなせそと君いひし春は七とせもち月おちぬ

○　伯耆　錦織ちよ子

さまよひの夜は早やふけぬ月かげに花に芳りのうすれつゝゆく

○　伯耆　錦織さわ子

月やあらぬむかし忍ぶの嵯峨の奥一本さくらかげ淋くして

○　伊賀　菊山かね子

春の月京[illegible]ひわたる姉君とわれとをなごむさまに照しぬ

○　伯耆　錦織たま子

花と水にかげおもしろく照り曇り長堤三里月高くして

○　東京　中村千代子

我が家の破れ障子のひましもれて霞みてうつる春の夜の月

青柳いとものとかにかすみつゝかゝれる月のかげのあはれさ

○　大和　栗山高子

春の夜やほの紫に月落ちて優しき雲の陰や行くらん

○　横須賀　渡邊ひさ子

うきくもはかゝらざりけり春の夜の霞に匂ふ月のかげには

○　山口　村上操子

見渡せば櫻か霞か霞たつ隅田堤の春の夜の月

○　東京　服部光子

送り香にこゝろもいとゝ長閑なり花のみ山に月おぼろにて

○　茨城　莊野とく子

花さきし大和島根もあだなれや月の鏡は今くもりつゝ

○　東京　林[illegible]子

三年ぶり學の友に逢ひにけりひゝな市場のおぼろよの月

○　美濃　杉山靜子

草にねむる胡蝶の夢を思ひつゝ野みちすぎ行く春のよの月

○　美濃　杉山藤枝子

姉妹ともに文よむ櫺子窓梅が香かほる春の夜の月

○　長野　北澤誠子

十年ぶり乳母がり行きて日は暮れて霞む川瀬の月を見るかな

○　東京　佐々木[illegible]子

妹君と櫛笥をせはり合ひし昔戀しや春のよの月

○　長野　小澤清子

白梅の素影をながく地に落とし心もきよき春の夜の月

○　栃木　草場いはほ

春の嵐は外面にみちて世はいれぬいれし昔てらすおぼろげの月

○　東京　くれなゐ

土筆

天

千葉　金子智子

つみためし袂のつくし一ッつゝ
植木の棚に稚兒がならべぬ

評　可憐なる幼子の振舞寫し得てよし

地

大阪　磯俊子

思はずも乳母か里まできつるかな
畔道つたひ土筆つみつゝ

評　柳もゆる乳母が門音なふ小女を髪白き乳母はよろこびて出迎ふるなるべし

人

大阪　木村春江子

つほすみれ匂ふあたりのつくづくし
昨日わすれし繪筆とぞ見し

評　若き畫工のおもかげもうかびておもしろし

秀逸

美濃　小野木梅子

いとし子の土筆つみつゝ唄ひつゝ
京の母まつうはの家かな

[illegible]

石見　山根直子

妹の机の上の筆たてに
ならぶ土筆はくびうなだれぬ

埼玉　横田秋子

つみはやす庭の垣根のつくつくし
くきたつみれは春更にけり

下野　井上侑子

里川に土筆のせたるさゝ舟の
流れをきそふうなゐ子のむれ

名古屋　中村奈美子

少女子の霞を分けて土筆つむ
花野の床に雲雀たつなり

愛知　荒木登美子

家つとにまつ手折らまし春浅み
まためつらしきこのつくつくし

常陸　岡田萬子

春の水ゆるく流るゝ里川の
堤の土筆もえにけるかな

常陸　岡田萬子

草刈りの野邊にすてたる破れ籠の
中にもえ出しつく〳〵しかな

愛媛　秀子

たかための心つくしか花かたみ
さけてそいそく少女子のむれ

神奈川　きみ子

おもしろきひはりのうたを聞きながら
けふもつくしをつみてけるかな

美濃　目島眞砂子

つく〳〵し耳にはさみて一群れの
男の子かへりぬ川そひの村

横須賀　柏原美奈子

友禪の袂ふかせて春の野に
土筆摘む子の愛らしきかな

美濃　長濱園子

ほしわかめかけならべたる磯の村
小家のめぐりにつく〳〵し生ひぬ

東京　小山てる子

病やゝおこたる姉の御手とりて
土筆摘みけり川そひの里

越後　松永繁子

土筆摘む少女の袖にむつれけり
花よりしばし胡蝶はなれて

横須賀　渡邊比佐子

妹と土筆つむ野の日は長し
名なし小川の花野めぐりて

東京　河合節子

振袖を脊に結びて七つなる
妹立ちぬ土筆つむ野に

東京　吉岡龜子

つく〳〵しあまた摘つるうれしさは
籠にも袖にもあまりぬるかな

伯耆　錦織よし子

このかけに今年も土筆生ひいでぬ
おもひで多きはなの下みち

伊賀　菊山かね子

春雨に袂ぬらしゝ日を思ひ
　路の栞かげのつくし摘むかな

岐阜　山田はぎ子

川堤溺死の人の枕邊に
　弔ふ櫻の土筆かな

相模　藤原下枝子

窓の下でふと見つけたる土筆
　やさしき影をたゞなつかしむ

甲

○　美濃　八木銀子

土筆つむ幼なはらから三五人唄ひ美くし朝風の岡

○　近江　石王かず子

歌のまゝにつくしつみつゝむつましう姉も妹も霞に消えぬ

○　神奈川　鈴木まつ子

少女子のこゝろになりて我もまたおかべの土筆いでやつまなん

○　美濃　加藤愛子

つゝましき二人少女土筆つむ小唄嬉しき春野の朝

○　兵庫　古東靜子

家にまつ母のつとにとつくづくしかはのみぎはの岸にてつみぬ

○　埼玉　横田やな子

菫のすみれましりのつくづくしゆかりたつれてつむやたか子そ

○　埼玉　横田政子

うちむれて野邊のまとゐの土筆つみはやすらん子等のこゑする

○　美濃　兒島八重子

學び屋のかへりの道の土筆とりて妹の家つとにせん

○　美濃　多田瑞枝子

月のよひ春の野原をともにわけて君ともとめし土筆かな

○　岐阜　吉田ます子

世はなれし沖の小島も春や來し濱風なきて土筆出けり

○　名古屋　山根しげ子

櫻さくらいつれおとらぬ姉妹つくしつむなる春の野邊かな

○　飛騨　南峰子

美しき小尼に似たり夕川を舞ひて流るゝつくづくしかな

○　兵庫　木村まさの子

畦の道春來れりといひたけに土筆出てけり頭もたげて

○　長崎市　秋山虎子

うなゐらの聲優しくも土筆つむ花野三里や霞流るゝ

○　白河　倉田たみ子

城山のふりし塲に萠え出てゝなにかきつゝゐるこれの土筆は

○　横須賀　高橋つれ子

土筆幾本となく折りとりて文字書き習ふ里の少女等

○　美濃　花園女史

畦の男か息ふあたりにおさな子が土筆を摘みぬ夕日さす頃

○　東京　奈良八重子

小さなる奥津城かなし花かれて我ものがほに土筆もえ出ぬ

○　山口　村田まつ子

瀟湘の入江晴れたる雨の後ち野につくし摘む人多きかも

○　美濃　長谷川ひろ子

土筆見つけて走る小女子に驚きて立つ蝶一羽二羽

○　美濃　服部せき子

雪つたひ畑けにつゝく岡野はらくまなく生ふるつく〳〵しかな
○　美濃　芳翠敏子
糸きれてふき捨されしやつこ紙鳶の紙のやれ目につく〳〵し出ぬ
○　岐阜　傍島曉子
ものゝけの出づてふ野べの古池のまはりに生へるつく〳〵しかな
○　美濃　西口學子
このまはりくろくなりたるもえあとにやせつく〳〵し二三本出ぬ
○　美濃　兵繩みの子
かはのへの石にかくれて少女子にとりのこされしつく〳〵しかな
○　岩代　菅野和子
生ひ出てし畑の土筆のやさしさに子等とまじりてつみきそひけり
○　北海道　佐藤央子
春風のはこひきぬらんことの音のしらへすみゆくつくしつむ野に
○　相模　杉森登代子
土筆野の遠く暮れけり鄙唄のやさしく消えて小川流るゝ
○　和歌山　植木業子
春雨のふる野に生ふるつく〳〵しつとにつまなん袖はぬるとも
○　東京　河合清子
うら〳〵とかすむ春野のあさちふにつくしあさりてけふも暮しつ
○　靜岡　西村直子
つく〳〵し籠にあまるまで摘ためてせこが夕げのあつ物にせん
○　美濃　杉山芳子
關ヶ原昔ほろひしものゝふを葬ふ様に土筆出てけり
○　岐阜　後藤英子
長き袖もてあましつゝやさ姫の乳母とつみます土筆かな
○　美濃　杉山靜子
土筆蝶舞ふ野邊に少女らと摘み競へする春日和
○　東京　松原岑子
少女子のちひさき籠にあまりけむつくし一とたば春のこみちに
○　東京　平塚白百合
春の野にすみれゑがきて姫靜のわすれたまひしつく〳〵し哉
○　神奈川　服部八重子
睦しく花野を飾る姉妹籠にあふれて土筆二本
○　大和　栗山高子
をとめ子が袂にあまるうれしさはつみし土筆のかすにみえける
○　大和　栗山俊子
きのふまでゆきやのこるとみしのへにはやもえいでし土筆かな
○　東京　服部彌惠子
長閑なる春の野に出て姉妹心つくしの今日のいへつと
○　長野　北澤誠子
あたゝかき春のひと日を岡のべにうなゐと共に土筆つむかな
○　越後　岩本芳子
いまつまん朝日のとけき岡のべのゆきげのつくしもえ出にけり
○　大阪　下川とみ子
つく〳〵し摘みて歸らんたらちねがよるのおものゝ代のひとつに
○　下總　中川千鶴子
引きし手を稚子ははなして蝶のごとつくし摘みゆく春そのとけき
○　磐城　木幡きよ子
土筆摘むや少女の影さへも見えつ隱れつかすむ春日野
○　京都　船津澄惠子
棚引ける霞のなかにをとめ子が土筆つむ手に春風そ吹く

乙

○　東京　秋田登志子
佐保姫の歌書く小筆わすれけん野に一本の土筆見ゆ
○　美濃　加藤里子
緑なる伊香保大野のつく〳〵し心こまかにつむ乙女かな
○　土佐　秋月蘭江子

夢に見し姫さながらの少女子は野なるがへりと土筆もちたる
○　　神戸　栗山あき子
春雨のめぐみなるらん萌え立ちて野面にそろふ色土筆かな
○　　神戸　今西操子
佐保姫も履すり流し迷ふらん野邊に生ひ立つ土筆眺めて
○　　伊賀　佐々木いすゞ子
地の神にさゝぐる土筆佐保姫の御筆なるかも歌かき給ふ
○　　東京　松村登志子
目黒なる神に詣るといでゝしをつくしつみゐて時はすぎけり
○　　兵庫　古東都美子
友たづね急き足止めて我は見ぬなりおもしろき岸のつくしを
○　　秋田　長谷川薫子
せゝらぎや水の清きにつみとりし土筆の束を流してみたり
○　　尾張　伊東濱子
土筆遠くひろがる天地の中に相見て子等に折らるゝ
○　　美濃　多田覺子
何となくものなつかしき古塚に萌えいでにしよ土筆かな
○　　廣島　鈴森きみ子
春の野におさけにしたる姉妹がこを片手に土筆つみゐる
○　　岐阜　櫻井とら子
春來れどとふ人もなき山里は道の眞中に土筆出たつ
○　　三重　北村みつ子
いつの世に文字の聖の捨てにけむうらみ顔なる土筆見るかな
○　　白河　川音そめ子
遂限の川の堤につとひして拾うてめつるつく〴〵しかな
○　　白河　深谷けい子
磁褓車を守る娘子が土手つとに見えつかくれつ土筆つむ
○　　白河　合田とよ子
そのむかし兵をれりたる原の上につくしでそめて面影とも見ゆ
○　　美濃　芳野紫水子

兎追ふ兎の方の野邊をふむ踏む足下に土筆の花
○　　美濃　芳野富美子
村はづれ兎を追ひし狐塚社の影に土筆の花
○　　美濃　花園まき子
をさな子が子守の背なに土筆は唄調子に蝶とまりけり
○　　美濃　芳野萩枝子
幼子が霧の住める春野べに摘みぬ夕へに土筆の花
○　　岐阜　岡崎つる子
鐘樓のうしろはひろき奥つきや石ふみうもれつく〴〵し出ぬ
○　　美濃　西田ひで子
あやふしと母はまとべによはふなり池邊にあまた土筆とる子等
○　　美濃　中村たま子
もゝのふのふみあらしたるしべりやの野べも今年は土筆出ぬ
○　　東京　今泉磯千鳥
長閑さや一人の野邊に伏しあらば富士も土筆の高さにぞ見ゆ
○　　美濃　梅村弘子
春の野に小犬と共にかけくれは土筆にくるふ蝶おひにけり
○　　美濃　梅田芳子
野に遊びこしうちかけて妹と詣る足邊に土筆の花
○　　美濃　芳村香代子
妹とかたりし野邊に來て見れば今年も咲けり土筆の花
○　　美濃　梛田とし子
三年ぶり積る思ひを話りつゝ歩む足邊に土筆のはな
○　　東京　青木たま子
春の野をゆきかへりつゝ家つとゝこゝろつくしやてにみてなまし
○　　長野　岡田千鶴子
うなゐ子がまたのひやらぬ土筆こゝろながくもつみためにけり
○　　佐賀　藤松りか子

ながき日を野へに暮して君がためむつくしをつみにけるかな
○　東京　永井しげ子

みどりなす若菜の中に佇みて世悍り顔のつく〱しかな
○　美濃　傍島みゆき子

雅子がおもちやのなべにつく〲し入れて遊へり乳母もたづねず
○　越後　松永繁子

春雨の跡にかゝりいたみたる土筆二本摘みてよく見る
○　越後　松山節子

むつれ合ふ胡蝶あまたと春の日ののどけき野邊に土筆摘みけり
○　神戸　梶原京子

なれぬればあまたおひ出しつく〱し摘てゆけともつむ人もなし
○　東京　小島榮子

おぼろ夜の月となるまでつく〲し摘つゝけふも暮しけるかな
○　東京　田代米子

つく〱しかなたこなたにさまよひてみやこの人も摘争ひかな
○　神奈川　飯田白露子

土ふての名はありながらなか〱に文かくしなにあらぬくやしさ
○　伯耆　錦織すち子

つみとりし去年のうらみもしらずして垣根かわゆく土筆生ひ出ぬ
○　伯耆　錦織千代子

病む母のえみのまく〱に春またき雪がきわけて土筆摘むかな
○　長野　北澤千枝子

のどかなる春の光に生ひたちし岡のべの筆きほひてぞ見ゆる
○　大阪　小西松子

舟とめて摘まはや岸の右ひだり間なくつくしの生ひ茂るなり
○　越後　水野やすゑ

つくしつむその手をしはしやすらへば山よりたかき凧も見えけり
○　美濃　杉山藤枝子

思ひ出のかなしき野かなつく〲と君思ひつゝ摘むつく〱し
○　岩代　岸野常子

わかゆつる川添堤うちむれて里の少女の土筆つむみゆ
○　岩代　岸野菊子

電線に燕二三羽さゝやきて土筆つむ子に日は長閑なり
○　岩代　岸野せい子

緋桃咲く平和の村に鶏なきて土筆つむ子の唄長閑なり
○　東京　林　艶子

野邊たどりいさや友かり訪れむみちの土筆を家づとにして
○　神戸　田尻保代

来ゆふにこゝろひかれておもほえずたもとにあまるつく〱し哉
○　東京　中村千代子

あらそひてつみしつくしを携へて日くれて歸る里の少女子
○　東京　服部光子

春の日は菫たんぽゝ蓮花草ひときはめづる土筆かな
○　松山　田村多豆子

此春ものとかにつみけりつく〱しつく〱思へば嬉しかりけり
○　山口　村上操子

若菜より野べに心をつく〱しつむはのどけき春になりけり
○　松山　上原のぶ子

種まきし人はきかれとつく〱し野べにあまりて生出にけり
○　東京　佐々木壽子

平和の神守ります春の野の眞中におふる土筆一本
○　河内　竹内敬子

道々につみしつくしをつとにして夢もたのしき乳母か宿かな
○　神戸　志みづ子

つく〱し春の野邊に遊ばんと生れば摘まる世をな恨まむ
○　名古屋　不破みき子

春の野や雅子のねむれる乳母車つくしつみつゝ母は唄ひて
○　鳥取　岡井かう子

つく〳〵しむらきえし野に萠出てゝ子供まちがほかしらのはしぬ　栃木　草場いはほ

○

心あてにわけしちかやの中よりぞ數をもしらぬ土筆出にけり　長野　北澤清子

○

つくし草つむ妹なかへり見てつくしつくさんやよ二人して　神奈川　長谷川壽美子

○

ふるさとの妹がもとよりつく〳〵しともにつまんと文にそへつゝ

女鑑投稿規定

投稿はすべて婦人に限り、〆切は**毎月五日**と改め翌月の本誌に掲載す、但し俳句は選者の都合により爾後締切期日を掲載前々月末日迄とす、兼題和歌の甲乙、短文、新體詩、兼題外の短歌俳句それ〴〵別紙用紙に認められたく、又同じ用紙に二人またはそれ以上の名を並べることなきやうに願ひたし。

短文、新體詩の當選者には各天賞二圓、地賞一圓、人賞五十錢秀逸楡葉書を呈す。

兼題和歌、雜題和歌、俳句の當選者には各天一圓、地五十錢、人三十錢秀逸楡葉書を呈す。

●和歌兼題

四月　雲雀・蝶

五月　新樹・藤



文學士鹽井雨江先生選

天

默想　土佐　秋月廣江子

夕暮の窓に、思ひ出多き野を、うつとりと失心した樣に見入つてゐた私は、細法寺の入相の鐘に、はつと我れにかへつた。あゝそが聲をきくのも、今霄を限りなのである。長い年月ほんとにいゝお友達であつたあの森も、この流れも、明日別れたらば、又いつ遇へるかわからない、私の旅立を何と見てゐるであらうか。幾年をあくがれてをつた都の人となるべき私は、どうしてもほゝゑまずにはをられない、お友達はみんな、花樣あなたはおしあはせね、お羨ましいと仰しやるし、何だか勝ほこつた樣な一種の得意の胸はをどるのであるが、かう靜かに一人居ると

どこからとなく、止めよの呼がある樣にも思はれて、只美しいに近よつて、花かげのとげに、思はぬ心の痛手を泣きつゝ、昔の自然を友に飾りのない生活を戀しく思ふ時があるのではあるまいか。けれども、明日の門出を、どうして悲觀する事ができませう、刻一刻近よつてゐる私の運命は、とにかく死んだ樣な過去の夢よりさめて、現の境に入るのではないか、もう迷ふまい〳〵と、今更のやう又樂しい空想をたどつてほゝゑんだ、不意に「早くやすみましねーでは、朝の一番でがすよ。」と爺やの聲、作爺は今得も何よくねむるものと思つてゐるのであらう。

いつの間にか、あたりは夜の幕につゝまれて、鎮守の杜が一層黒く、何か秘密をさゝやく巨人の樣……森としもない淋しさである。今夜は月も遲いのねとつぶやきつゝ、戸をしめた。

(雨評) 捉り來たれる情景面白し筆も輕妙に　其の情景動きたり。

地

[illegible]方文[illegible]

燈火

埼玉　高橋よし子

學年末の調査で今日の退けは五時、校門をでるともう海紫の夕暗は漸時に迫つて、ただ花の村のみパッと暮れ殘つてゐる。家に待ちます母上は、さぞや御案じなさるゝであらうと、只管路を急げば瞬きそめし四邊の燈火は、一つ増し二つ増し、果ては碧落の星の樣に輝いた。登校の朝の景色にひきかへて、霞みし山も、汕を潔はしたやうな川の流れも、森も林も、悉く自然の母の懐に眠つてしまつた。

此處天滿宮の社頭、神燈が社の奥にかすかに點つて、往き來の人を見守るかのやう。御手洗の手拭が、社前の梅が香を暗にあふつて、杉の梢には鳥の羽音、身におく露を拂ふのであらう。

もう此處で路も半ば、扇の地紙のやうに光の出てゐるのは富士見亭。これから右に曲ると、常燕寺の森陰。朝ならば木魚の音であるが、夜はさすがに本堂の燈明ばかり、眞如の光を見せて、久遠の寂靜に歸つた別天地である。墓地の生垣を左へ折れ、二軒の茅屋の灯と灯が向ひあつた間をすぎると、直に長い利根川堤。炎陽もゆる晝ならば、花

に眠れる蝶々の飛び立つ羽風の響るもあらうに、袖ふく風もうら寒く淋しさは、身にしみ〳〵とこたへる。

蘆芽の畔にも萌ゆる川添の一軒屋、がたぴしの戸の隙間よりチラとさし來る光は、渡守の灯であるいつも柳の糸を潜つて出ては、水馴棹に手を掛くる禿頭の翁が、目に彷彿とうつる。玉の水、玉の礫の、底、隙々と數へぬ可き鋭の上を、巧に舟を辷らす馴れての業は、見るからに氣も晴るれど、さて夜の想ひは又一種、あはれ幾度の霜を此の小屋に、送り迎へしことであらう。ちら〳〵と靡く火影は、翁が孤影をいく冬寒う照し來しか。さゆる霜夜の夜更け小更けや、雪に霰に隨分叩かれもせう、起されもせう。

いつか其の灯も後に消えて、闇の中にかすかに認めしは、停車場の色の變つた燈火。あれこそ吾が住む町の標的と、近けば尚足も早みて、いつか町の入口に來た。右側の美しい灯はお醫者の梅澤さんで、夕餉の膳に向ひながら洩すうら若い笑聲は自分と同窓の清子さん、其の團欒の樣を垣間見ては、すぐに家の母……妹……と、闇にも面影が浮むでくる。

稻荷樓には灯がポッと、障子に映る影法師、流れるやうな撥の冴え、折から起る唄の聲………

それが隣家の離に隔てられると、うれしや、わが家の燈火が目の前に……門には佇む母上と妹、私の歸りを待ち詫びたのであらう。

（雨評）御神燈をはじめて我が屋の燈火に至るまで燈火をとり來たりては途上の情と景をのべたる意匠また其の優美によく整ひたる筆致苦心の作と見えてゆかしい文である

人

琴の音　　大阪　木村春江

又雨らしい、雫の音がする。大分濕て居るので、入れて置かなんだ干物が、氣に掛つて、雨だれの音に、耳を澄すと、ふと琴の音がする。好む道とて、一種懷しい思ひにかられて、耳を傾けた。北樣であらう。曲は狹莚である。歌は聞えないが、優かな音色の絕え勝なるは……「松に甲斐なき村時雨、時しも分かで降からに」……のあたりらし

い……「色もあせつ、何時しかに我袖のみやかはるらむ」……と、今や手事に移つて、調は漸々せまる、變調又變調、彌々酣になりては、落ちて砕くる瀧川の、岩にせかる、それのやう、千々に分る、音色と音色を巧に響かして、調べ流す面白さ。氣も魂も弄ばる、程に、ふと爪音は途絶えた。糸でも切れたのであらう。今か今かと耳を澄したが、もう音はせぬ。

花樣は十八だが、あの愛くるしい顏立では、まだ十五六にしか見えぬ。繼母樣ではあるが、あの中の好さ。親身の親子も及ばぬと、近所の噂。たとひどんなに心強き人で有らうとも、眞心もて仕たならば、なんで



邪慳に憎まれ樣。あゝ、私も、お母樣と呼ぶ人が現にあつて欲しい。戀しい〱お母樣。お寫眞もなければ、面影は知らねど、お色の白い細りとした優しいお方であらふとは、毎夜の夢でお逢ひ申して居る。幼き折は唆い唇に接吻もして下されたであらう柔なみ胸に抱き占めても下さつたで有らうに、あゝ一目お逢ひ申したい。又しても甲斐なき思に、雨夜の淋さが、一入身に染む。ふと襟元に人のけはひがした。見返つたが、誰れも居ぬ。外らした目を、琴に移して、其儘取り出した。幾月か積りし塵を拂うて、調べ

初めたが、思はいとゞ亂れて、どこをどう彈いたやら。心付し時は、曲は最早終りに近い。思ひ出した樣……「嵐の末の鐘の聲、結ばぬ夢のさめやらで只偲ばるゝ昔なりけり」……とひくゝ歌ひ終れば、ほろりとびざに一雫した。

(評) 優美にして情可憐なる文章、愛すべし。

秀逸

◎春小品　岩代　岸野常子

(お嫁さん)暖かい春の日影を一ぱいに浴びながらお化粧の水を捨てた其儘、お池の邊りを逍遙うと、汀の玉藻が、小波につれて、緩う搖られながら、清い清い香を放つて居る。餘りのゆかしさに、手を差し延べて、そを、水面に出て居る其一莖を引くと、それに驚いてか、孵してゐた緋鯉の一尾が飛び出して、又向ふ岸の藻の中に隱れて了つた。岸邊の櫻が、美しい其姿を、靜かな水面に落して居る。私はうつとりとして眺めて居ると、今迄、無言に笹舟を見つめて居た靜ちやんが、あはたゞしく走つて來て、

「姉ちやん、アノー赤い鯉は、黑い鯉のお嫁さんなの?。」

(鶯の聲)「花咲く春の陽を、早や疾く起きて、見よかしと、鳴く鶯も心して、人の夢をぞ醒しける、ホーホケキヨ……」と、聲張り上げて歌うた刹那! 花を隔つた向の櫻山で、一聲、朗らかな鶯の聲! 道理で、私の聲の反響には、餘りによすぎると思つた。

(春宵)「お父樣、直つてお休み、」まだ醉が醒めぬか、唯「ウム」と仰しやるばかり。「サア、私がお連れ申しませう」と、唯正體もない、お體を抱き起して、肩をかすと、何だかむごい樣な、一種の哀感が胸を衝いて、やう／＼の事に、お部屋にお連れ申して、ホッと一息、あゝ、御存命中だからこそ、此樣な御奉公も出來ると、思はず一雫零れた。

(かゝる夜)夢と云ふ物を、模樣にした樣な仄かな雲が、美しう星を鏤めた大空を被うて居る晩、私はぼくり／＼と心地のよい香を立てる、庭下駄を引掛けながら、そゞろ心に、花の下に彳むだ。

堆う落ち積つて櫻花、手に取ると、丁度柔かい天鵞絨を撫でるやう、云ひ知らず心地がよい。又はらくと花が零れる。靜かな、寂しい、ぼくぼくと云ふ木魚が、向ふの野寺の方から傳はつて來るかゝる夜、はらはらと亂るゝ落花を踏みながら、松影暗い奥の方、方丈を敲いて、孤燈の下に、白鬚の禪師と、此世を語つたならどうであらうなど、そゞろ幽玄の感に打たれた。

（評）靜かな淸い中にやさしい暖げな氣もこもりたり何んとなうゆかしい文である。

◎鎭守森　東京　奈良八重子

恐ろしく靜かな夜だ。家毎に福は内と呼ぶ聲がはつきりと聞える、高く低く絶え間なく響く、紡績工場の機械の運轉する音なども、今宵はすつきりと徹つて特によく聞かれる、多分大氣が澄み切つてゐるからであらう、などと思ひながら、蕎麥や、菓物や魚類の匂ひが絶えず鼻をつく、狹い龜戸の町を、伯母と只二人、人家の軒に沿うて行くと、泥濘が其儘凝固してでこぼこの道、一尺もあるかと思はれる深い轍の跡、その中にはまだ水が白くたまつてゐるのを、硝子戸から漏れてくる光や、おぼつかない瓦斯燈の光をたよりに、かたみにいましめながら、道を右に折れて、香取神社の一の鳥居をくぐつた。

道の左側には、枝の少ない、細長い檜の木が、一列に並んで、その黑い影が、薄白く凍りついたやうな溝にうつつて、その梢に輝いてゐる星も、眉のやうなやさしい三日月も、影を水に映してゐる行手にあたつて、巨人のやうな鎭守の森が、黑く黑く恐ろしい影を作つて、その奥から、かすかに漏れる御神燈の光は、丁度怪物の眼のやうに見えたので、一種いふべからざる不安の念が、犇々と私の胸に詰め掛けた。

路はだんだんと細くなつて森に入る。入口まで來たときに、森の奥から、非常に冷たい風が、スーと流れる來る、草木もそよがぬ位の微かな風ではあるが、ひやりと鋭く斬るやうに頸を撫でゝ行くこれは定めし永劫に沈默なるこの森の吐く溜息であらう。

大な樟が枝を交へた下を、敷石に下駄の音をさせ

ながら、神前近くまで行くと、そこには、二つの燈籠が、ぼんやりした光を放つて、高麗狗や樟の幹の半面が、夢のやうに浮き出て居る。

凍るかと思はれるほどつめたい御手洗の水で、兩手を清めて、階の下でぬかづいた、さうして、伯母が豆を供へ、祈禱にしづむ中、傍なる柱にもたれて、うつとりとして梢を見上げ、何處となく神秘を呼くやうな響に耳を傾けて居ると、突然拍手の音が高く鳴つて、この森の靜寂を破り、暫くは反響してゐたが、次第に遠く微かに、はては、森の彼方に全く消え去つたあとは、あたりは前より一層靜かに、恰も誰かの一喝にあうて沈默したかのやうに靜まりかへつた、私は身も心も慫う引緊つて、何とも云へぬ深い／＼偉なる感に撲れた。

(雨評) 筆も整ひ、情し景もきこえたり。

◎我が子　　茨城　桧山ひさ子

今日も亦、終日畑の仕事をして、黄昏近き頃、家路を急ぐのである。

ふと思ひ出だしゝは、我が子のこと。あゝ輝坊は今頃は何をして居るだらう。

歸りの遲いのを、さぞ待らわびてと思へば、はや心は、身より先に、我が家にと走る。

乳も今朝飲せたぎりで、さぞひもじくなつたらうと、思ひながら歸つて見れば、可愛や、ちやんと椽に出て、待つて居つて自分の姿を見るより、まはらぬ舌に、かあさんと、それを見るより、鎌も籠も投げんばかりにして、輝坊や、よく待つて居つたねと、泥手も洗はずに抱き占めた、子は母の暖き手にかい抱かれて、にこにこしながら、紅葉の如き兩手をのべて、乳房かいさぐり、一つは口に、一つは手にまさぐりつゝ、あまりの可愛さにそのゆたかなる頰にキッスをした、子は氣持ちよくてか、はやすや／＼とねむりかけた、ああ、罪なき此のかんばせ見れば、うき世のあらゆる苦勞は忘れてしまふのである。

ああ、愛らしの我が子よ。

(雨評) 筆はまだしきところはあるが、其愛情がいかにもこもつて見ゆるところが、可憐な文である。

◎雪景色　　越後　海野幸子

淋しきを常なる山里も、花に紅葉に人の訪ひ來て賑はしき折りもこそあれ。

み冬たつ頃としなれば、人目も草もかれ行きて、たま〳〵おとなふものは、朝風に散る木葉ならでは、小夜ふけて、なく狼の聲、さては、峯の松風の音のみなるこそ、げにもの淋しさ一入まさりけれ。

かゝる淋しき冬の山里にも、おのづから都にまさるながめもこそあれ、そもいはぬ寒き夜すから馴れにし松風も音たえて、いと物靜に更け行くまゝに、村鳥のすさまじく鳴き喚ぐに驚き、とく起き出れば、峯にも尾にも、庭の籬にも、白妙の雪ふりつもりて、いぶせき山かつの庵も玉のうてなとなり、見渡すかぎり銀の世界とかはり、見所なき冬枯の梢も常磐の松も、ひとつなみに、六つの花さき出でゝ、春のさかりにもまさりぬる景色となれるぞめざましきや。

明けはつれば、朝日のかげ、山の白きに輝きて目もまばゆき頃しも、こゝかしこ二軒三軒むら立てる、杣が家より、朝けたく煙の立ち上る、稚兒の雪よ々々と喜ぶ聲、犬のいさみてかけ廻る、など見るもの聞くものにつけて、治まる御代の惠のいたらぬくまなき樣も知られぬ。

けふはいみじう寒ければとて、炬燵はなれぬ老人あり、榾火に酒あたゝむる賤の男あり、橇引き出せる樵夫あり、銃を肩にせる獵夫あり、晝の程は兎角して、黄昏頃夕風さと音して梢を渡れば、はら〳〵と散る樣落花の亂るゝが如し。

入相の鐘の殊に近くきこえて、くれぬと見るまに、積れる雪に磨かれて、外山を出づる月の光よ月は雪に、雪は月に、移りうつろひて、氷より冷かなる、影しろかねより輝ける、白妙、何にかはたとへん。

「月雪花の時」と、奏したりけむ兵衛の藏人の、みやびさへ思ひだされぬ。

あはれ、朝に夕におかしきは山里の雪景色にこそあれ!

あはれ、夜に日にあはれなるは山里の雪景色にこそあれ!

（雨評）文は綺麗に整へられたるが、ありふれたるを惜しむ。

◎火事　　東京　是永象子

時は夜半の二時半。
道樂な娘が毛虫を見出した時の聲のやうな、けたゝましい警鐘に、夢を破られて、門に走り出で見ると、二町とはへだゝらない位の所が、今や盛に燃えて居る。
思はずアレヨ〳〵とさけんだが、もとより甲斐のあらうはずは無い、ます〳〵火の手は勢をましたふと氣がつくと、寢着のまゝである。どうりで寒むかつた。
胴ふるひがして居るのも、火事の爲ばかりではなかつたのだらう。
隣り近所の人達も出て居るのに、見つともなくもあるから、一寸羽織でも引きかけて來やうと家に入る。
出て見ると、もう白煙が立つばかりである。
小火であつたさうだ。
聞けば物置小屋だけてすんだとやら。
マー〳〵とホッと息をしたとき、火事場がへりの人達が、ガヤ〳〵通りすぎる。
「もうこれからは、花々しい火事は見られませんねこれぢやあんまり消し方が早やすぎますサー」
いかに人事とはいへ、餘りなる言葉よと、其の後姿をにらんで居ると、隣りの山の神さんの聲で「ホント二人騒がせだよ、今頃起されては又朝ねすぎて仕舞ふとの獨言。
あゝ、女のくせに少しの同情氣もない其の言ひぶり、たゞ〳〵呆れはてゝしまつた。
（兩評）一寸面白い場合をうつされたり。

◎下宿生活　岩代　菅野和子

寒いとては炬燵入り、腹飢きたとては戸棚あさり、婆や足袋が汚れた、下衣も洗つて頂戴！氣儘三昧我儘爲放題。然し道かは水入らずの一家族、憚らしとて排斥する者もない、といつて機に乘ではないが、澄みわたる海を滑く船の如く、獨天下？
君しも廣い世界の同胞と比べては、女の道は兎も角縫ひ裁ちの業だに人の後へに居らねばならぬ恐さ。普通の學問は一通り終へてをる、專門に針の道を辿る必要は兩親も認めて呉れた、嫁に行つて亭主の股引も縫ひ得ぬ位では駄目だと兄も大贊成更に二年間の自由を與へられて、昨日の嬢様、今

日より下宿住ひの身となつた。机一つ離れた向ふさへ、赤の他人。一言彼の不利益な事をいふものなら、感情上敵視せらるゝ。誤つて障子の開閉に横がつくと、最お轉婆組。ほんに大きな咳拂ひも出來ぬ。

喧。汽笛の響、曉鷄の聲、街辻に子守等の歌を聞いて、家に歸りたいと思ふばかり。然し歸られぬ身と諦めて寢ね、曙光の彩色に元氣ついては勤めてゐる。

飯ー飯も十分に胃の腑を滿足せしむる事ができない。女だもの、家庭に居たやう、旨いとて一杯餘計に食ふ事もなるまい。間食はおさつ？これとて他所にありては、お錢が先き。一厘半毛でも肩身に關係が直接だ。

火ー冷たい手を焙るに五分間も要する。それも火鉢故、腹や足には効が無論ない、家の榾火が戀しい。夜業も油に關係するだらう。早く寢れば、宿の主婦の機嫌がよい。ア、繼母と考へて接して居れば辛いこともあるまい。下宿料八圓といふ親が汗の金を拂つてをりながら、何を苦しんで、細心戚々してゐられやう。誤つて熟思すれば、他人から堅された名譽は恢復できさうもないから。

妾は社會といふものは𢠇麼ものであると思へば、渡世上の修養が積んでくるのだ。四海兄弟？何の力とならう、寧ろ追剝だといふが適當語だらう。すると、二三の親しくなつたお友達も、何の心か解らぬ。

砭すやうに寒くなつたと思ふと、戸外は大吹雪。埋火は螢よりも淡くなつた夕暮、ランプの用意が來ない、炭も請求せねばならぬのに。

（同評）今少し内ばに上品に言うて貰ひたいが、題は考へられたるものと思ふ。

◎短　文　　　東　京　楢　皮　與　志　子

昨日からのさわぎもしづまつて、今日ののどかな桃の節句は來た。奥の座敷には、小さな御客樣と御主人とが、ゆびの先ほどの盃にくみかはした白酒にゑうて、目のふちやほゝを櫻色にそめて、段の上のひいなの樣に、にこ〳〵として居る。日の長さに、まゝ事や手まりにもあきて、何か面白いお話があると見え、可愛らしい笑聲は、いく度か我耳

を打つ。外はひもないらしい、障子にうつつた南天のかげが、少しも動かず、丁度うすゞみの畫の樣である。ガラスごしに庭を見ると、あたゝかな日は、栗の木の上から光をなげかけて、二つ三つほころびた桃の枝を、あちこちと小鳥がとび移つて居る。今日雛まつりしてよろこんで居る少女たちの心は、この天氣の樣にのどかなのであらう。

（選評）　一寸のどかなところは見えてゐる

◎春の窓　　横須賀　渡邊比佐子

窓を明けると、モー暖い春めいた日和、午近き光りのいと柔らかに廻椽を滑つて、九尺に足らぬ庭を徊徊うてゐる、小雀の二羽三羽、よき歌もたらして、下に上に飛び交ふので、細き梅が枝の靜かに花を落して、自分ながら嬉しい。

佐久良川の春を尋ぬる人にやあらん、スケッチブックを片手に今日の日曬を北ほとりに、一人二人見えて遠く、孫を相手に寺詣うでの嫗も、奇な牛の聲に驚されて、せはしく菜の花路に隠れた。

「山は暖に雲晴れて、景色優れしよき野邊に……」

近く村外れの土橋の上に聞えて、可愛らしく鎭守の森影に消えた。

靜けさの春風は、桃咲く草屋根低く徊徊うて、美しき梭の音色を染めて、廣き草野間にくゝ戯れて牛驅ふ童の後を追うてゐるかの樣。

多加良山の頂に見えた燕、屋根棟近く聲を落して高く雲井に入つた、北れかあらぬか、泉水に水輪を描いて浮いて來た緋鯉、また落葉を抱いて水底に沈んだ。

まだ彼の草屋から、梭の音が面白く、草刈唄に和して一入奇に……眠むさうに聞える。

（選評）　水彩畫を見る心地す

◎同級通信　　越後　水野やす子

雪の降る日なりき
ストーブの側懷かしき日なりき。

かたみに卒業の後の疏さを思煩ひて、せめてものたのしみに一月に一度はと定めたりし同級通信のともすれば四月五月、面影見えずなりにしを、今日しも手に入りしうれしさよ。

疎かりしもことわり、その袋のふくらみて、二枚

の切手まで張られたるは、如何なるたよりをや齎しけむ。

すみゑ子は眠につきぬ。燈火かゝげいざやよまむ四年睦びしるしには、水莖の跡さへ見れば、誰とは直に知らるゝ業を、誰かあてよとは、すねたるにも程てそあれ。廣田先生そのまゝの筆つき、關野の君ならで誰ぞ誰ぞ。

八重子は嫁きぬと。自分は何も告げずして。かづ子に報告せられしをかしさよ、もう隱すべき年にもあらぬに……

荻原は三人。驚きたりな。みつ子は二人。おゝさても。妾の如き一人位は既に威張らん資格もなきか……この地は人口稠密にて一家急に三口を增し……おもしろき言ひ廻しにもある哉。さても「あばちやん」は如何に候やと……瓢逸な、洒落な、あゝ微笑の堪へかたさよ。おとなしき竹子の、いつかはかくもかはりたる。會はゝまた「梅林會議」の話をして笑はせんに。よしの君は明年卒業とや嗚呼、四とせ五とせ、卒業の後の日は短きものよふり行くものは我が身にもあるか。

讀みもて行けば、趣味津々としてつきず。いといそのかみのことのみ忍ばれて、うつゝなの心に、遠き幻の國に遊ぶ心地するを夜やふけぬらん、窓をおとなふ風もなきに、南天の葉には雪や積りけんばさ／＼としづるゝ音す。

（兩評）書き方に一寸面白みがある

〇梅咲く宿

東京　永井しげ子

霜月半ば、高砂を謠ひ納めてより五日目に、夫の君は某の技術研究の爲め、外つ國へ旅立ましぬ。其の折のみ言葉に「三たび梅咲く頃こそ」との仰せを便りに、都なる知るべの許にかり住居して生花音樂など足らはぬふしを導かれ居りぬ。初めの花は程もなく散りをすぎ、學びの業に忙しき中に、二度目の花も封じ込めて送りまゐらせしが、それより後の殘る一と年はいかに／＼長かりしよ、人々は秋の日の短かきとかこつを、妾は心に長きと聞えぬ、風身にしみる頃よりは、朝に夕べに、軒の梅が枝を仰ぎ見ぬ日はなかりき。蕾はやう／＼ふくよかになりければ、こたびは開かぬさきに送りまゐらせむと思ふ折から、嬉しくも御文は届き、早御歸國の御仕度とか、妾は都より實家へ戻りて、今日か明日かと待ち暮しつる今日しも、夫の君は目出度歸り給ひて、叔母樣のお家近くに住居を定められし由。あゝ三とせが間待ちにまちたる此の報を得たる妾の嬉しさ父母は妾が二度嫁ぎ行くかの如くに、又もや行く末の心得ども、こま／＼と云ひきけらるゝを後に、身は早迎への人と共に、停車場に運ばれぬ。夕暮近き頃、一と先づ叔母

樣の家に旅鞍をとけば、眞は明日の事として、今宵は此處に宿りて、昔語りでもせずやと、仰せらるゝにぞ、心は先きに走れど、み言葉のまゝに、夕餉の膳に向へば、叔母樣は打ち笑み給ひ「此の地は其文字が好む梅の花今猶盛りなれば、風情ある夜の梅にても探らばやと」伴はれ出でぬ、春には珍らしき冴え〴〵たる月は我が身の幸を照すかの如きにいづくともなく薫りくる梅が香の得も云はれず、折しもさゝやかなる門の塀より、此方へと枝さし出たる墨絵の如き老木、さきの薫りは此處よりぞと、暫し佇み仰ぎ見るに、叔母樣は、こは妾の知人なれば一枝をと、裏手に廻り「門外の花」とのみ言葉はきこえぬ、やがてくゞりは開き「約束の花を床に」と仰せらるゝ其み聲、いかで〳〵忘るべきか。でも叔母樣の御人の惡きとは心よりの言葉にてはあらざりき………仰げば月さへ心安んぜしか、朧々とうす衣に包まれ行きぬ。

（兩評）嬉しさのあまりにも候はむが、筆のたど〳〵しくなりて見ゆるところは、御思案のほどを祈り上げ候、

、、、○緑日　東京　高橋牧子

夏の緑日は賑かだけれども、鼻をつくやうな人の臭ひ、カンテラの油煙などが、實に氣味がわるい。

冬の緑日は淋しいけれども、何處となく人生の反影を見るやうな人の影、盲人の顔、私は一種の好奇心を以て、寒いのを我慢して行くのを、常としてゐる。

實際淋しい、炮碌頭巾を被つて、火桶を圍みながら寒風の中に悄然と、並べてある荷物に一瞥をくれて、物思はしげに客を待てゐる老人もゐる。

私はいつも初更に行くので、淋しさは一層である。

今迄盛に聲を張りあげて、喋つてゐたらうと思はれる瀬戸物のせり賣屋も、已に客がないので、所在なさゝうに欠伸してゐる落魄の泪にやせほけた頰をぬらして、とぼ〳〵とかへり行くうら若い書生——それは、今までかの仄暗き陰に男三郎の歌を唄つてゐたのであらう。けたゝましく咳をしたが、何とか獨り呟きながら、どこにか隠れてしまふ。

破れ三味線に、九つ許りの少女に唄はせて投錢を乞うてゐた老婆も、最早席をたゝんでゐる。

あゝ荒涼たる冬！　都大路の眞中までも、寒い烈風はふきすさんで、行きかふ人も足早く、悄然として夜店の老爺も木を揃へ出した。

車の音が轆轆とさるのは、植木屋であらう。

私は必然と夜店の老爺の影を眺めてゐた。すると何だか、小說的の感想が、むら〳〵と湧いて來て、その落ちくぼんだ兩頰、眼の下から鼻へかけて、何ともいへぬ一種の寂寥の色が漂うてゐるのを見ると、彼の家の貧困——妻や子や嘛今宵の投錢の多かれかしと祈つてゐるとであらう——又彼の前半生の歷史、それはどんなに悲痛の泪を持つてゐるだらう、などゝ考へるとしかすがにもろき泪のうるむのを覺えた

やがて、彼は荷物を車につみ、他の商人等と入り亂れつゝ、街の暗に消えうせた。鼻歌一つ唄ふものもなくて、夜はたゞ沈々と更けて行く。

うしろ影さむき彼等、彼等は過去と現在と未來とを思ひあはしそして妻子の生涯の運命を考へ及ぼす時、果してどのやうな感慨があるだらう。

私はかう思つて、たちすくんだ。寒い〳〵木枯が頸元をかすめ

て吹きすぎる。

（附評）今少し心の底から情をはたらかしてほしい文である

〇雪の朝　上毛　甲斐春江子

夕べからの寒さは夜明から雪となつて學校に出かける頃は萬物皆白金と化した。けれども猶盛んに降つてゐる。母や姉の情けに身もあたゝかゝと家を出て丸木橋の所迄出來るとこゝは人家もなし。打ちつゞく畑はさながら綿の海のやう不風流な私でさへ別天地の感が湧く。吁よい景色と歌をうたひながら行くと向ふから十一二の男の子が來る。見ると身にしむこの寒さに袷着物だ。そして手袋もない少さな手に酒樽をつるしてゐる、おゝ冷たさうと思ふと何ともいへぬ哀れな感が胸に迫つてくる。その後姿を見送つてゐたが不圖「雪の朝アレモ人の子樽拾ひ」彼の有名な古句が浮んだ吁、昔も今も哀れは同じと思ふと得しれぬ涙がこぼれた。學校についた時友のたれかれが迎に出て私の泣いた顔を不思議さうに眺めてゐた

（附評）結末の泣いた顔は、どうしても尤らしくない。

〇朝寢　東京　河下靜子

ふと眼を覺ました時は、もう障子に澁い日光が一杯に差して居た。それが一枚開け放してあつて、朝の涼しい風がサーと入つて來る。もう姉さんも起て了つたと見えて、八疊の室に自分の床ばかりである。往來にはガタリ、ゴトリといふ轍の音が聞える汚穢の車や東京へ賣りに行く野菜を積んだ荷車だらう。ガタリ、ゴトリと段々遠く消えて行くと、あとから又ガタリ、ゴトリと新らしい響が來る。知らない内に、お母様が上つていらしつて、「何ぼ日曜でももう起きてもいゝでしやう、姉さんは最う髮を結つてますよ」と仰有る「起るから、その障子を閉めて頂戴」と云ふと、「今日は大變暖かいから、皆な羽織を脱いで居るんですよ」と仰有つて、障子に凭れて戸外の方を見下してをらるる——家の前の家並や、竹越さんの西洋館の方を見ていらしやるのだらう。

恁うして仰向いて見て居ると　お母様の横顔と二階の廂と、羅で包んだやうな藍色をした空が見える。起きたいけれどもかうして身體を伸ばして寢てゐると、伸々して身體がとろけてゆきさうに思はれる。急に家の玄關に人力車を引き込む音が聞えた。お母様は「もう順一さんが入來しつたよ、早くお起き。」と仰有つて、階梯を急いで下りて行かれた。すると、玄關の方に順一さんの聲がする。自分は狼狽てゝとび起きて了つた。

〇罪？　下野　井上尙子

例の竹林に近づいて耳をすませば、大谷川の水音が烈しくきこゆる。向を見れば雲にそびゆる黑髮山、今しも山の中頃を鳥が五六羽とんで行く、生花の料を得んものと、かれこれ撰びつゝわけ行けば、ふと目についた一本梅而も古びのある枝に小さい哀れげな蕾が五つ六つ。思ひがけなきよき得物と惜しげもなく一枝ほちり傍の竹の葉から、あわ雪がさら〳〵音して落ちた。何處からか鶯の聲、自分はきがついた、もしや今のは鶯が恨のごゑではあるまいかと、鶯宿梅のこと迄おもひ出て、急に何か重大な罪でもをかしたかのやうな感じがした。

〇幸ある人、幸なき人

（極月の日記より）

東京　鵜澤喜舞子

夢らしく風なく晴れたる日なり。二疊の書齋の南窓を開きて、詩集に耽ける。やがて倦み果てたれば、冷壁に背をもたして、さまざまの樂しき空想を湧して、獨り樂しみぬ。夢と空想は實に妾の慰藉者なり。晝は空想の籠の中に現世を離れ、夜は、夢のパラダイスに苦悶を忘る。空想は人爲的快樂にして、夢は天與的快樂なり

晩餐後、散歩かたがた銀座に行く。

飾れる兩側の店、華瓦斯の光りに燦然として、かゞやき物質的美を極め、各々多くの慾を引んと競へり。妾は何物も慾しき物なし慾しきとて、妾にはそを得ん資格なし。など〻心に微笑みながら單に美なり麗なりと意識して歩みぬ。

天賞堂の店に、ブローチの寶石燦く美しき二人、指輪をあれよこれよと取り出さして、樂しげに互に語らひ居るを見たり。さても、麗しく幸福なる人と羨みぬ。博品館の横を茫然として歸りくれば、暗き處にうごく者あり。近よりて見れば、老婆の乞食、凍れる煉瓦敷の上に額きて、あはれみを乞へるなり。

あゝ、妾は瞑目してしばし、不可解なる人生を思ひぬ。

○雀五趣

愛知　荒木登美子

恐ろしき夢に目は覺めた。恐ろ〳〵蒲團の中から首をだして見ると、はや夜が明けたのであらうか。戸の隙間、窓の節穴が、薄明かくなつて居るので、起きやうかと首をあげたが、餘り寢心地よさに、又枕を着けて見たもの〻、窓の外には雀の聲。あゝ妾は朝寢坊だ、怠慢者だ、朝寢坊怠慢者の爲には、雀は實に良き鞭撻者で、早や起き者で勉強家である。

今年十五の腕白盛りの弟は、何日の間にか、屋根の雀の巣を下し一羽の小雀を獲たとて喜び勇み、鳥籠に入れて軒端に下げて置いた。親は悲しげに鳴きては、日每〳〵幾度となく、餌を拾つて來て、籠の外から我が子の口に、口から口えと移して、喰はせるのであつた。優しい雀の心にほだされて、三日めの朝、小雀を籠より放してやつた。優しい雀は、日每書齋の窓に來て、鳴くのであつた。

日曜とて獨り南窓の机に繪を習ふ。日南に廻つて、書齋の前の桃の木に、ばさ〳〵と優しく聞こゆる羽音。ふと頭をあげると、障子に映る雀の影三つ、樂しくちゆちゆと囀つて居たが、隣の松に鳥がとまつた荒き羽音に、雀は驚いて、ちゆと何處ともなく逃げ去つた。

滿開の緋桃の下を緩かに流れて居る水は、急勾配に遮られし處に行つて、急に激流になつて、其所には古い水車がある。日當りの桃の下には、十二三の小娘を相手に、六十路の坂を二つ三つ越した嫗が、針仕事しながら、昔し話しを續けて居る。人恐れせぬ小雀二羽、かはる〴〵傍の泉水の淺みで、餘念なく水浴しては、桃の木に返り羽振ひをして居る。其每度、水に花片を散らすのである。

春とし云へば、心浮きたち何となく長閑なれども、夕間暮ばかりは、秋のそれの如くうら淋しい。今し永福寺の鐘樓で、ごうんと撞き出す鐘の音、永き春の日の夕暮を告げた。音に驚きて、今の今まで農の藁屋根、遠近の枯田で、無暗矢鱈に騒いで居た雀の群が、慌しく竹籔の方へ飛んで行つた。

○心地よげなる數々

名古屋　中村浪子

朝まだきに起き出て日の出をがみ、菫、蒲公英咲き匂ふ野面に、未だ昨夜の夢結ぶ胡蝶を驚かし、霞の中に囀る雀の鳴音聞きつゝ家路

を辿る、いと心よげなり。

舞臺の面に立ちて、妙なる技藝に觀客を醉しめ、劇場も割るばかりの拍手、拍手を受し俳優の得意のほど、さこそと思はる。土俵に相撲て、一方の重鎭たる、肥えふとりたるべん〳〵腹の大關を投げて、勝ちたる新進力士の、數多の人より囃したてられたるは、鼻高き得意さへこそ見ゆれ。

長き病の床に苦しみし人の癒えて、湯浴に身體を清め、見舞ひうけし人々の宅へ禮にとて、衣服着替ふる心地、如何ばかりにやあらん。

年長なるは學校より歸りて、復習に餘念なし、妹の優しくもそを聞きつゝ「お母さま、わたいも早く學校へ行きたいわ。」とせがみ乳呑子の懷にすや〳〵眠る樣。

紅梅の花盛りなる日當りよき庭石のもとに、ジョン犬の四つの足を長々とのばし、心地よげに眠れる樣。梅が枝を飛びかふ鶯の羽風に、ちら〳〵花片二つ三つ、ほうほけきようと鳴く音、如何に優しう心地よけなる。

酒に醉ひ千鳥足あふなげに、鼻唄謠ふは、他見に可笑しけれど、醉ひて歌謠ふ人の心や、愉快ならん。

岸の柳は萌えて、柳の糸にかゝる春の月、朧に霞みて、さながら畫を見るやう。流るゝ水は玄妙の音をたてゝ、いとなん心地よけなり。

新體詩

文學士　鹽井雨江先生選

天

暮春の湖畔　陸前　山形すみ子

くれなゐ匂ふ夕ばえの　空ゆく雲をうつし見て、
流れもいでず波たゞず　とこ平和の湖の面。
朝五彩の花うけて、　夕に沈む水の色、
變えぬ刧初の水底に、　藏しゝ春は幾何ぞ。
山脈影をたゝよはす、　岸べの彩波うすらけば、
浪は音なき水をたて、　鐘や湖心の底になる。
夢かさゝやく明星の、　啓示の光かゞやけば、
聞は浮世のわれながら　浪に奇しき響あり。
夢よ、現よ、こゝだくの　あとなき霞覆ひては、
水心なく影失せて、　殘るはわれと峯の松影。

（雨評）詩韻深く響きたり

地

雨の夕　東京　秋田登志子

幾千人萬人の、
薄鼠に薄靑ませて、
幾千人萬人の、
聲力なげに、
塵を燕氣に溶きて、
小門をくぐりぬ、
傍の店に錆錢投げて、
懐に奥深く、
急ぎ足、

吐息燻ゆるか、
ノロノロと煙は昇る。
嫉妬か呪咀か、
笛は今鳴る。
うす黑く塗られし、
女は草履男は跣足。
パンの三片二片、
父病む家に子臥す家に、
雨降る夕べ。

（雨評）悲惨々々

人

廢社　愛知　荒木登美子

その昔し詣る人の絶えし事なきと聞く此宮、
今はたゞわれにわれはて清めむの司も住ます。
たか山の上なる社訪ふは、たゞ峯の嵐よ、
幾千本椿はさけど、おち椿たゞに散りしく。
星まれに銀河斜に、松の露苔をすべりて、
寂寞の境をしめて、折々にましら鳴くなり。
幾千年嵐をしのぎ、天そゝる杉の老木に、
寂寞の境をしめて、ものすごく梟叫ぶよ。
宮居たゞ朽ちに朽ちはて、とばりたゞ破れに破れて
蜘蛛の糸徒らに繁く、さにぬりの跡も止とめず
鬼氣滿て空は燒かれて、風荒く木の葉捲く夜を、
今も猶終業者泊らば、おそろしき物をや占めん

（雨評）寂寞の景は見えたり

秀逸

◎春病みて　名古屋　橘たか子

病む兒思へば傷はしう　梭の拍子も物うきと、
母が情の筆の香の、こほれてにほふ玉章や。
繰返し見る夜衣のうち　惡寒ぞ又もおそひよる、
熱に苦しき眸をさげて　なつかしみ見る空の色。
羨しきよ白雲は、まゝに行くらん山の國、
吾は病の囚はれに、ふる里遠く泣かん身か。
わびしう年の移りては　松立つ日をも忘られつ、
春は淋しき病院の、軒端の梅にめぐりきて。
初音ゆかしき鶯や、今朝色の香も立めぐる、
さはれ病の魔の牙の、深う嚙みたる吾が胸や。
骨あらはなる撫肩の、見るにえたへぬ肉の色。

いつか嬉しき床揚の、膝に母と笑みもせん、
梭の拍子も物うきと、又よみ返す玉章や。
春をやせ行く頬の上に涙淋しうながれては、
まくらにかゝる黒髪のみだれて多き恨かな。

(評) 病床の情は動きたり

◎薪賣　美濃　兒島八重子

殘んの月の影さむく、
下りつ上りつ復下りつ
朝薪をこり急ぐ。
身をきる如き山風に、
思ひ亂るゝ鬢の毛の、
重き薪にこらへつゝ。
蔓に岩根に身を支へ、
幾その里を經廻りつ、
夕はるけき市に賣る。
世にも哀れの乙女子が
親や詫しくまつやらむ
はた兄弟や待つやらむ。
重き薪を錢にして、
憂になやみし柔胸に、

氷柱こゑわる山坂を、
かよわき足を血に染めて
花のかんばせ色あせて、
おどろ〳〵の寒慄を、
山又山をたどりきて、
やさしき聲を匂はせて、
燃ゆる誠の思ひをば、
夫や嬉しく待つやらむ、
我家に急ぐ乙女子の、
如何なる戀や思ふ覽、
歌にえしらぬゑまひ有り。

(評) 可憐なる薪賣りに候かな

◎才ケ池　越後　水野やすゑ子

老松影を沈めては、紺碧の色更にこく、
青雲影を浸しては、魚また山に登るらん。
翁かさぐる釣竿も、ともに繪となる才が池。
戀のなやみに襲はれて奇しき思に捕はれて、
樂しさゝやき洩すべくくるしもだえをさむべし
行きつもどりつ幾度かこの池をや回りけん。
眞白にさける睡蓮の、花の二つをそとちぎり。
浪に任せて我が戀の、行衞いかにとトへは、
漣波羅々のあやの上に一つになりしうれしさよ
秋の小春を我が君の、松の木立をカンバスに、
スケッチとらす側に、「君に繪は成り吾に詩、
成る」とたへし吾が戀の紀念も深き才ケ池。

(評) 才は見ゆれど、情のまだはたらき足らざるをたしむ。

〇雲の形　越後　海野幸子

奇しき形の數々や、風の吹くまゝ獅子となり
虎ともなりて或時は、繪筆とる手の惑ひにき。

春はみ山に棚引きて、　盛の花とまがふとも、
夏はそばだつ雲の峰、　其態何ぞむくつけき。
秋は白雲ちぎれては、　鶴の舞ふかと疑はれ、
冬の木立の末に見る、　雲は白髮（しらし）に似たりけり。
魚鱗（うろこ）の雲のかゝりなば　豐けき年の兆とか、
富嶽（みやま）に雲の笠被れば、　明日の天氣は雨と知る。
奇しき姿の數々や、　風の吹くまゝ綿となり、
流れて旗かうすれては　絹の幕か煙（こはり）とも。
もしそれ袖に時雨れては　晴間とてなき若人の、
胸にひそめる憂愁の、　雲の形は何ならん。

（雨評）好詩題今一層の想像を要す

ヽヽヽ〇　　東京　檜皮よし子

夕ばえの空美しゝ、　日は西の方に沈みぬ。
打むれし乙女も去りて　野寺よりうち出す鐘、
たそがれの春の野中を　ゆるやかにひゞき渡れば
紅もゝのひら〳〵散りて　ぬるみたる流れに浮ぶ。
たゞずみて耳をすませば　かなたなるかすみの中を
里人のかへり行くらし　のどかなる聲のもれ來て
おぼろなる月の光は、　はてしれぬ野路をてらしぬ

（雨評）のどかなる春のくれは、一寸見えたり。

ヽヽヽ〇胡蝶　東京　奈良八重子

陽炎もゆる春の日を、　古き城跡の石垣に、
菫たづねて今日もまた　白き胡蝶は訪れぬ。
ひねもす花にねむらむと　思ひしこともあだなれや
つらき人の子手折りてか　我戀ふ花の影見えず。
尋ね〳〵ていさゝ川、　柳のかげにいこふとき、
ゆかりの色もさめはてし　花のむくろは流れ來ぬ。
はかなき戀の運命かな　涙は涸れぬ羽破れて、
花を筏と流れ行く、　胡蝶の夢は醒めざりき。

（雨評）やさしく整ひたるところ、見るべし。

ヽヽヽ〇春の色　大坂　木村春江子

雪解の野山風ぬるみ、　我世の春を粧はんと
春のみ神のめしませば、　めされていでし七色の
小さき神は分れ行く。
野邊も山邊も春めきて、　露も匂へる雨あがり、
春のみ神のめしませば、
森にひそみし紺色の、　神は木立をかいくぐり、
峰にたなびき紫の　色なる神は霞分け、
柳はなれて青色の　神はみ袖の露はらひ、
みどりの神は里川の　ゆるき流を渡るなり。
花を尋ねて舞ふ蝶の、　つばさはなれし黄なる神、
黄金の露の彼方より、　種々色の神見えて、

赤きみ神も遅れじと、
野邊も山邊も春めきて、
太陽の火神のみざ近く、
巳がつとめを語りつゝ、
七ツの神のよりませば、
かの七色の影消えて、
そことしもなくもゆる
かげらふ

(雨評) 苦心したる意匠は見えたれど、詩調の淺きをしむ

、、〇雑題

東京 平塚白百合

有明月の影あはく、
いね心地よき春の夜は、
今あけそめぬうらゝかに
白瀞衣のかつぎして、
今めざめしと美しき、
かすみに浮ける十戸の村
朝けのけぶりゆらくと、
たちのぼるさまほの見えて、
日はあたゝかくのぼるらん、



花をかざして集まりぬ。
露ははやひてまひる頃、
ほゝゑみ給ふ春神に
いざよの春を歌はんと

靜けきわらの家ごとに、
小川に芹つむ人のかげ。
背戸の梅が枝に今日も又、

うぐひすさへざゑこゑしきる。

(雨評) 今一層情と調とをはたらかしなば、はじめて詩趣深き山村の春晩ならむ。

、、〇美濃

黒岩屹てる絶壁の下、
むせぶ早瀬の音も遠く、
堤の上を手を袖に、

小野木梅子

船に八尋の渡場こえ、
守の翁に別れきて、
ひとりしたどる川原路に
踏むや小草はとくかれて
水風さむくふきまけば、
川原撫子花もなく、
狂ふがごとく翻り飛ぶ、
彩翅美しの蝶も尽で、
日光もうすき冬の日に、
砂礫ましろき霜はとけ、
ゑがくに似たる濃みどりの、
色さへ若き姫小松
こゝにかしこに丈そろへ
並びてひくき稚見すがた
生ひ先滑くけがれなき、
自然の戀もこもるらめ。
きさらぎ半ば春淺く、
流れ一すぢ水やせて、
背淵ゆるう澁へては、
かすけき舟子の唄寂し、
南に急ぐ旅人は、

わき目もふらず通ひ來りて、
かへりみすれば、しげり合、
すべりてかへる渡守舟の
往來も暫し絶えにけり。
小松の楫を舟は見えて、
鉢卷頭と棹のかげ。

（選評）今一層の銑錬を要す。

、、○薔薇　三重　北村みつ子

年てふ寛こそいと憎けれ
あせてはかなき思ひ出に、
ぬるゝ涙の紅恨や。
若いの血汐も狂はする。
我に吸はれて我れは泣く。
髮の鹿の子や口紅や、
いく夜寢ざめの枕紙、
若きさかりのまぼろしは、
薔薇の頬美し血の色も。

、○歸らぬ友　福村直江子

嗚呼なつかしき我が友よ、
あな恨めしき寛の跡の、
都びの庭に朝な夕、
君を古鄕に尋ぬれば、
哀哀の情はみちくて、
せき止めあへぬ音が心、
胸も裂くてふ戀しさに、
せめて昔のかたみにと、
君に手向くる人々の、
みどりの色は深けれど、
慕へど此の世に影もなく、
待てど歸らぬ我が友よ。
誰もすぐれし君はしも、
つれて歸らぬ昨年の春。
忍びかれてぞ懷かしき、
小高き岡を君と問き、
只泣き暮ふ涙川、
君はいかにと思しけん、
いとゞ名殘の惜まれて、
かたへに植ゑし姫松は、
なさけの露に昨日今日、
君の御墓日にうすく、
夏季秋冬の折々に、

、○かたみの梅　下野　井上尚子

お庭の梅の花咲いた、
坊の丈ほど成た時、
かあさんは死んで坊ひとり。
お花はかあさんに上げましよう。
お花がおちて實がなつて、
向の花ちやんお竹ちやん、
坊の父さんはこの梅が、
歸つてくるよとおつしやつた。
とうさんまでど歸らない。
梅はとうさんに上げましよう。
それでもかへらぬ其時は、
坊と三人でたべましやう。

、○まどゐ　土佐　秋月廣江子

花咲かば夕をなやみ、
我や夢人や現か、
團欒う胸はつゝめど、
今更を何の恥らひ、
定めてもまどひ心地に、
衣のあやはれがましきに、
夕暮の鐘をかぞへて、
銀燭の輝く邊、
露おかば朝をいたむ、
さまよひの旅路十六。
少女とや乳のふくらみ、
ふくますは誰の運命を。
この春を嘆くの時、
若き血の凍ろとばかり。
人心せまる胸おち。
わが墓となのゝく思ひ。

○　伯耆　錦織さち子

かたる浮世の運命ぞと、
病みほそりたるふところに、
初めて抱くおのが子の、
おもひにまして、只管に、
ゑにしや薄き母の子の、
逝ひて行くよ、百千里、
一度はかならず人の身の、
たゆとふとしもあらねども、
ながく父君のみなさけと、
知るやしらずや、みどり兒の、
うまいの頬のいぢらしさ。
その可愛さは見ぬ前の、
我が身わすれてはくゝみし、
病は終に母が身を、
死どいふつめたき遠き國、
ゆいて歸らぬよみの國、
一人ゆく身はさりながら、
ながく今よりの生ひさきを、

思ふに惜しき命かな、さてもほたしの辛らきかな。
思ひ亂れて今はゝた、涙ながらに見あぐれば、
燈火暗く夜は深けて、我が兒の顔もおぼろなり。
手をくみ合せ胸にあて、わが呼吸つゞくかぎりまで、
いとしき夫とみどり兒の、今より長き春秋を、
たゞ一すぢにいのりつくさん。

○里を出づるとて　東京　高橋牧子

かへり見すれば足引の、山にかゝれる白雲や、
雪氷する家の門にして、母はも泣きておはすらむ、
思へば遠き都路の　暗より暗に果もなく、
いとおほらかにひろごりて、利慾の巷灰に見る。
瞻むにくづるゝ霜柱、母が手織の衣さへも、
山の雫にひたぬれて、わりなく落つる涙かな。
さもあらばあれ山國の、草に埋れむわれならじ、
運命の如何につらくとも、たらちね如何に戀しとも、
日頃望みの學び舍に、三年の學びつゝがなく、
榮譽の冠輝し、歸る日ありと勇みつゝ、
心づよくも住みなれし、故里遠く出づるなり。
頭あぐればかゞやかに、朝の日こそはてりいづれ、
わが鹿島立いかばかり、眼にひるがへる欣びの、
瑞雲なして亂れたり。

○夕暮賦　名古屋　中村奈美子

片うつ涙も望をたち、夕燒の雲がくろひて、
渚に落つる鐘の音、餘韻は長し哀れにも。
凝雲低く夕潮の、沈みて浮きて流れゆき。
宵明星の影清く、東の空に輝けり。
東の空の姉君よ、あまり淋しき夕暮に、
あゝ懐かしとみ名呼べは、反響かすかに尾ぞひく。
ほのかにさすや月の影、涙なき水に紋を織り、
あゝうるはしの姫神と、わが胸高く神に入る。
玄想深く佇めば、月、明星、涙も皆白く、
垂れにし愛の美の神が、いま降りたゝす思ひあり。
島暮れ、山消え、海も暮れ、み空に星の亂れ出で、
人の安眠を送るとき、靜けさ春の夜はきぬ。

○むしろ世を　仙臺　萩野清子

ふきすさぶあらしに、いつか破れたる庭の垣、
わが父の世にまさば、繕ひたるを、この春は、
家は破れ人は逝き、吾が行く末も如何ならん。
他家の子はうれしげに、望みを立てゝ世を行けど、
姉君の御力に、かつ〳〵むくろおとゞひの、
嵐なぎ潮ひく、夜のしゞまの折々は、
只一人望の限り、泣かぬ日はなし、此の頃は。
慕はしの姉君も、今は遠きよその國に。
あゝ、吾れは行く末を、如何にはかなくたどろらん。
むしろ今世を捨てゝ、花なき里にそむかんか。

、、、父母の恩　兵庫　古東壽美子

あゝのどかなる春の海、あゝゆたかなる春の海、
人の心もかくもちて、からき浮世をたどりなば、
あらき波路も何かあらん。己れは多幸多福にも、
幼き時よりたらちねの、甘きみひざの其下に、
春は初花秋の月、夏冬ともになつかしく、

手をとりあひつはらからと、
あゝ其時のたのしさよ。
みつ子の時を初とし、
今更思ひめぐらせば、
春のうしほもたゞならず、
いかに深きも、たとへてん、
あゝ大なりや大なりや、
たのしみあひしも幾度ぞ。
つら〳〵其上かゝなへば、
ふりわけ髪のいたづらや、
み親の恩のいとたかき、
山は高きもはた海の、
言葉もあらぬみいつくしみ。
父のみめぐみ母の恩。

、、、さくら　　兵庫　木村まさの子

春の日かげは、
遠山かすみ
見えし白衣は
降りてのなりし
空の白雲
それかあらぬと
霞やう〳〵
浮きし櫻は
うらゝかに、
かきわけて、
去年の冬
雲影か、
映りてか、
見るうちに、
揺らぎて、
今盛りなり。

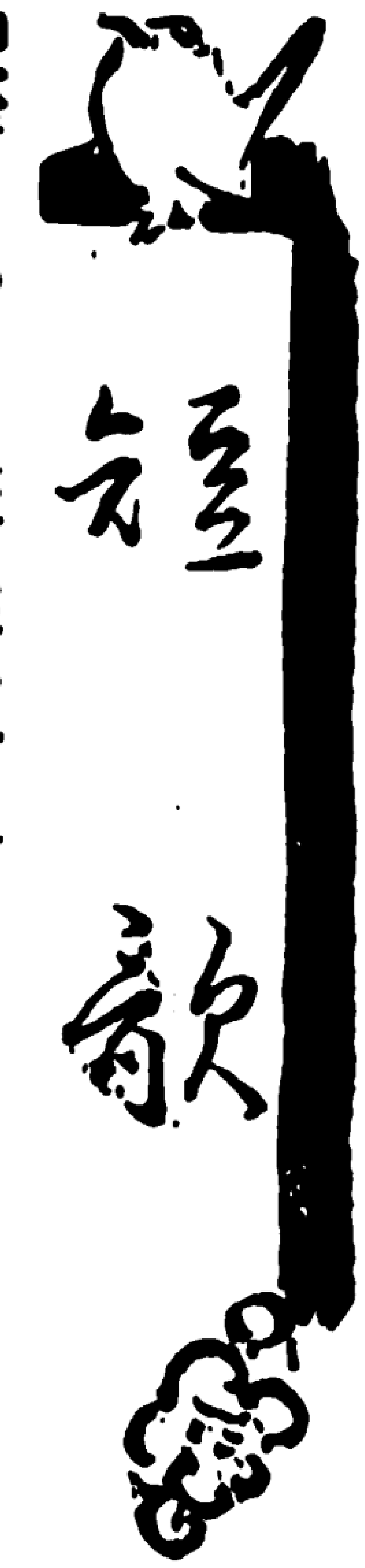
、、、うぐひす　　東京　今泉磯千鳥

金箏な春のみ神の、
七彩の綾衣纏ひつ、
なしゝわが手はフト止みて、
いろ〳〵の空想に翔ける、
行くはそもいづく——故郷。
袖—秩—濕せしわが家、
築山の石にもたれて、
戀しさに足音靜かに、
ソト妹が眼掩へば、
——わが妹の姿も消えて
ホ、ホケキヨ　ホーホケキヨ、
爽すかもそがうまし音に……●
針を上はたは下へと、
——いろ〳〵の空想に耽ける。
わが魂は大空舞ひて、
訣別に瞳うるみて、
淋しげに妹はひとり、
都なるわれ思ふらし。
泣せ皆りぬ飛石つたひ、
アッと叱びて醒めぬ——空想は
金箏の調べも絶えて…………。
〔如月の空麗らかき初春の梅咲く朝
はなれ家の室に籠りて…………〕。

、、、國境の別れ　　伊賀　菊山かね子

大和と伊賀の境にて、
丘にのぼれば故しらず、
人にかくれて切なさの、
得云はぬ胸の苦しさや、
君は來ましぬ我にしも、
つとはなれたる草床に、
現につゞく夢ごゝち、
結ぶ手の脈いとつよく、
ふとあふぎ見てうなだれて、
なくて東の故郷に、
君を思ふとうちつけに、
あゝ寂寞にとらはれて、
終の別れと君まちて、
胸わな〳〵とうちふるふ。
燃ゆる思ひをうちつけに、
わりなう落らし涙かな、
あらぬ物怖はづかしう、
憂の影はせまりけり。
「よく來ませし」の一言に、
熱き血潮の狂ひかな。
別れのきはの言葉さへ、
幾年經なんすくせぞや。
いふべかりしを遅かりき。
猶ほ生くべきか處女の身。





御歌所寄人 小出粲先生選

天

柳　　武藏　香取うめ子

糸柳の二筋三筋折々は
　窓にわたりて下ひる靜なり

地

旅　　岩代　樹口雪子

湊にて別れにし人旅籠屋の
　湯舟のうちにまた會ひにけり

人

越後　岩本芳子

梅をのみめつらむ人にわか里の
　なの花みせむ今のさかりを

佳調

折にふれて　　兵庫　古東靜子

讀者文藝

人里はとほくはなれて松風の
　ふく音寒し峯の一つ家

甲

春宵　　大阪　木村春江子

操る糸の絶間に歌も匂ふなり梅さく宿の朧月夜は

梅　　美濃　兒島八重子

野路にいなゝく駒の聲さへもましりて寒し風のかせ

夢　　埼玉　横田政子

子をおもふ親の心をくみとりてふかき心につくせとぞおもふ

夕鶯　　神奈川　鈴木まつ子

さかりなる梅の林に鶯はくるゝもしらでなきにけるかな

山里の初春　　日向　江夏枝子

山さとの訪ふ人もなき梅の上にひとりゆかしく鶯の聲

柳　　仙臺　荻野清子

吹風になりくゆるゝ青柳の亂るゝ糸に夕日かぎらふ

○　　仙臺　荻野すが子

たをやめのよりて物思ふ欄に横顔寒く夕日さすなり

折にふれて　　兵庫　古東すみ子

いたつきに苦しむ我身のそれよりもかなしかりけり父のみやまひ

○　　美濃　加藤愛子

木の芽煮て友を招かん庭松につもるはかりの初雪もがな

正月　　福岡　みし子

少女子がやり羽子の音もの　どかにてきのふにかはるこの朝けかな

初氷　　横須賀　高橋つれ子

手に取ればあるかなしかの初氷簾を通して稚兒のさけゆく

都の友に　　淡路　湖東壽美子

とひ來ませ波靜なる瀬戸の海鳴門のうづも共にこそ見め

折にふれて　兵庫　古東せい子

機の音となりやよりぞもれ來なりいとしきちごが衣おるらん

旅によめる　岩代　遠藤久子

よこ雲のたちわかれゆく波の上にほの／＼見ゆるあかほしの山

柳　岐阜　平田葉子

根芹つむ少女がかざす繪日傘の繪に長々と柳しだるゝ

○　美濃　小野木梅子

蘆原に霜霧みえて餌をあさる雀の聲も寒き今朝かな

○　名古屋　山根しげ子

鶯のなきつる方にたちよれば梅が香かをり琴の音する

雲雀　神戸　柴山あき子

わか菜つむ少女の歌に合せつゝ雲間に高く雲雀啼くなり

春雨　東京　秋田とし子

みつ色の衣美しき梅の上に絹針のごと春雨の降る

雪中の梅を見て詠ふ　長崎　秋山虎子

寒けさもつむ白雪もたへしのび咲くなる梅にならひてしがな

寒梅　兵庫　木村ますの子

吹く風ははたへを通す寒む空に時を得顔に梅の花さく

○　廣島　鈴森きみ子

宵の雨今朝がた晴れて鶯の露ふみおとす庭の梅が枝

折にふれて　東京　花園百合子

竹かごに花あまた入れて聲のよき花うり少女街の中ゆく

春雨　宮城　山形梅野子

樹々の色まさるを見れば春雨は空の緑りの降るにやあるらん

○　名古屋　中村なみ子

梅の花散りて櫻の花咲けど病みます母は猶臥すして

春雨　名古屋　中村ちよ子

實にもみ寺の鐘に花ちりて夕へ淋しく春の雨ふる

○　名古屋　荒木とみ子

せの君と早朝折りし此の野梅に春は來つれど君はいまさず

柳　東京　島岡みと子

うら／＼と春の日影のさしそひてけふるみどりは柳なりけり

木枯の夜　東京　かれ子

遠く近く赤子の夜泣聞え來てねざめわびしき木枯の夜半

農夫　白河　深谷やす子

たかゝらぬ身にはあれどたにはたに耕す人ぞたふとかりける

新柳　白河　金澤よし子

道のへの畑と見ゆるいとやなぎいとも靜かにうちゆられつゝ

那須野原　白河　會田とよ子

鬼すみしことは過ぎにし昔にて家立ならぶなすの大原

春日野邊　白河　深谷くに子

見渡せばのべの柳もみどりして若菜つむべくなりにけるかな

餘寒　美濃　長縄みの子

春を淺み頰もる風も寒ければ去年のかさねぎそのまゝにして

遠村霞　岩代　菅野和子

ひな歌の遠く消え行く野の末をゆめかとばかり霞こめたり

梅　神戸　梶原京子

鶯の來なかぬにまと一枝を手折りてそなふ御佛の前

鶯　常陸　岡田成子

燈火のあたりを春の心地にて早鳴き出てし鶯の聲

燈　美濃　傍島みゆき子

みほとけをきざむ工が取るのみのひかりも寒し燈火のかげ

霜　美濃　芳翠敏子

しもしろくおき渡したる橋の上たどるも寒きあさぼらけかな

燈　岐阜　長瀬鶴子

たゞ一つ入江にのこるとま船のともし火ほそし夜や更けぬらん

梅　美濃　阿部せき子

白梅紅梅末にさして子等は遊へり寺のうら街

鶯　東京　奈良八重子

いそぐべき旅にしあれど鶯の聲にたゝずむ春の深山路

大津にまかりしとき　美濃　備島曉子

松の月見かへり岩にうすらきて静かに導く朝の鐘なる

梅の盛り　美濃　芳村喜代子

鶯の聲をしるべに來て見れば今を盛りの梅の一樹

思出　美濃　梅田登子

妹と共にかざせし梅が枝も早や一年の昔なりけり

鶯　横須賀　柏原みな子

畑につゞく山添小道雪とけて日かげうらゝに鶯のなく

○　横須賀　高橋ひさ子

いつとなく野山の雪もとけはてゝ春めく草の萌え出てにけり

日暮の花　美濃　芳野萩枝子

夕日さす賤が伏やの小柴垣蜻蛉さまよふ日暮りの花

柳　東京　松原みれ子

けふもまた蝶はそはえて遊ぶなり風にみだるゝ門の柳に

○　東京　平塚白百合子

松うりの聲はるひたり村はづれ峠の茶店にもちつきの音

雪後の月　東京　吉岡龜子

なきわたるからすの聲におき出てはれたる雪を月に見るかな

さるのとしを　東京　河合清子

よのさがは見猿るきか猿いは猿はひとまれよりもまさるなりけり

○　相模　杉義とよ子

梭の音の聞ゆるかたや星ならん桃咲く家に鷄の聲

○　相模　藤原下枝子

淋しきは何にたとへむ消え殘る火鉢につがん炭もなき夜の

摘草　岩代　岸野常子

はからずも君が門まできつるかな星川つゝみ小草つみつゝ

○　岩代　岸野菊子

暮おくるともしの影もおぼろなりかすみにくるゝ小山田の里

○　越後　水野やすゑ子

亂れ散る花を拾ひつゝ白髪の翁眠るよひさごまくらに

○　美濃　杉山藤枝子

木枯の寒き月夜を念佛稱えて霜踏み歸る龍雲寺道

柳　鳥取　淵井かう子

去年にまし姿あてなる糸柳さそふ風になさそはれであれ

折にふれて　東京　白井作子

春風の吹きくるなべにかをるなり軒端の梅や咲きそめにけり

雪中竹　大阪　古川登美子

夜もすがらふり積りける雪ふすまかつきて竹はおきんともせず

柳　京都　船津澄惠子

青柳の下河堤賤の男が釣する竿に春風ぞ吹く

春湖　石見　山根直子

静かなる湖邊を行きかふ舟人の歌ものどけき春の湖かな

乙

我家の春　神戸　しみづ子

縁側の鶯の聲ほがらかに春着仕立つる賤が家長閑

梅　秋田　古瀬惟子

木枯にふきやぶれし柴垣のとくちに咲けり梅の初花

夢　東京　平井靜子

いとし子にそへ乳の夢のはかなくもいとゞ身にしむあかつきの鐘

濱　東京　くれない子

夕潮や月は出たり磯濱に町よりかへる乳母が村道

鷄　下總　中川千鶴子

なくれじと思ふ心にあさなあさなまづ嬉しきはにはとりの聲

○　美濃　杉山靜子

棧の橋かけるとて足場あむ大木曾川に霞棚引く

○　美濃　杉山芳子

路の邊の畦に出てたる小山田の氷もいまだとけぬ春哉

春山路　磐城　木幡きよ子

梓弓春の泊りや花ふゞき月に越へ來る山陰の道

讀者文壇

野霞
草も木もめなはるの野なひとりたゝ我ものがほにたつ霞かな
松山　田村多豆子

朝
ねたるまに心のちりや散にけむすが〱しきは朝なりけり
松山　上原のぶ子

冬の夜古郷の母を思ひて
かけくらき燈の下痴おきて夜縫ふ母の面影の見ゆ
茨城　金澤すゑ子

鏡
品形うつる鏡に人待の心うつらはいかにかあらまし
東京　中村千代子

○
朧夜なあの山こえて海濱の月の松原馬追いてゆく
千葉　金子つる子

柳
雨晴れて堤に長く鈴の音の柳に見ゆる春の色かな
横須賀　渡邊比佐子

○
鶯はあえかなる鳥自からのよき音おもひて首傾け居ぬ
東京　鵜佐輪貞子

病床にありて年を送るとて
いたつきになやみて送る年の瀬のねさめにきゝぬ百八の鐘
長野　北澤千枝子

猿
よにいてゝ袖はふれとも山猿のこのみはしやわすれさるらむ
東京　西村直子

雨中の鶯
春雨に梅の花がさかるしつけゝさも來なきぬやふの鶯
神奈川　飯田榮子

偶吟
梅さきて鳥はうたへと友はやみて春の小窓に思ひ出多き
神奈川　飯田白露子

○
妹と歌がたりする南椽縁に額う春の日の流るゝ
神奈川　服部八重子

馬子
うまの背に赤き毛布をおほはせて馬子行く春の長峯の坂
美濃　花園女史

歌を詠む人
我ながらもたどる山への道すがら歌思ひ居れば日くらしのなく
美濃　芳野富美子

峰
新らしきとなりの倉のひさし影峰がすがけぬ今年の夏より
美濃　芦野紫水子

乙女
こけむしゝ社の前にぬかつける里の少女の愛いらしきかな
美濃　花園まき子

鶯
風もなき雨の窓にうたゝねのふと目覺す鶯の聲
美濃　清川とし子

餘寒
さえかえるけさの寒さに降る雪の春とは見えぬ景氣なりけり
美濃　梅村弘子

霞
消え殘る雪をかむりにいたゝきつけさは霞の衣着にけり
美濃　梅田芳子

梅
榮え行く宮墻のほとり咲く梅の白きは神の大御心かも
山口　村田まつ子

○
時よ來よふたゝび來よとわれ言ひぬお下げに眞赤きりぼん結びし
東京　今泉千鳥

打にふれて
思ひなく悩なく唯に神の日のその夕くれに逝かんとそ思ふ
美濃　目島眞砂子

梅
鶯の聲に障子をあけみれば賤が垣根の梅の花ちる
伏見　寺内ちく子

櫻花
吉野山やへたつ峯を見渡せばゆきかとまがふ山櫻はな
和歌山　植木楽子

旅中の夢
かりそめの夢にも心なやみする旅こそ憂さの限りなりけれ
東京　小山てる子

春郊所見
野へつゞき若草しける川のべに兒牛のたくは母したふらん
白河　川音そめ子

寄人
しらかはの宿もしばしはとひれかし南湖の梅は今なるさかりなり
白河　深谷けい子

谷に花見ゆ
それとても旅の心にめつるかなみ山の谷の花のさかりを
愛知　井口外世子

歸雁
月落ちて霜匂ふ朧月夜歸る雁つら鳴きて過ぎ行く
飛驒　南峰子

字志
うきことも樂しきこともかはるめりわが魂のおきところにて
名古屋　伊東はま子

雪

木々の梢枝もたわゝに積む雪の眞白き上に鴉飛びかふ　　徳島　梅澤さだ子

折にふれて

わらへらの頃さ遊びのなかしきにけふもなかばをまとに暮しぬ　　大阪　礒　俊子

○

筆の林ぬけて硯の海の邊をたどる机の島根閑さよ　　高知　山脇白露子

折にふれて

事毎に愁ひ咲くも喜ふも見る人こゝろのけしめなるらむ　　兵庫　今西操子

○

公達は白駒とめてまろび寢の花野朧思を陽炎のたつ　　岐阜　平田かな枝

冬山家

山肌はたえて淋しくなりにけり四方の景色のしほるれはこそ　　神戸　すい子

○

別れての後の秋なる朧月はみなから物のなつかしき哉　　美濃　加藤里子

初春

ふく風のほかに友なき我が宿もるすかに春はおくれしもせす　　播磨　田淵きさ子

初春

おくれしと雪降る道も迷ひなくかすみそめけり四方の山のは　　播磨　田淵みき子

漁火の妻

日は西の島山かけになりぬれば磯邊にいてゝつまをまつかな　　播磨　田淵ふじゑ子

母

露ふかきはゝその森の鳩すらも子をおもふみちやまことなるらむ　　埼玉　横田やな子

父

ちゝのみのふかき心の山にこそ生し小松の世に出てにけれ　　埼玉　横田秋子

梅

ふかみどり松と竹とにまかせおきてかをりしめたる梅の花かな　　下野　井上俯子



俳句

内藤鳴雪先生選

天

黒髪に湯氣の雫や春の宵　　相模　藤原下枝子

地

春寒く袴破れて酒もなし　　横須賀　三輪やす子

人

寢てもどる脊中の狼や宿の月　　美濃　加藤里子

炭俵提いて明るし雪の庭　　靜岡　大石うめ子
磨き流す米の白きに水温む
胸虫いて戻るや梅の夕月夜　　横須賀　齋藤松代子
暖かう春の雲行く木の間かな
畑打や農學校の生徒共
梅月夜となりの窗に聞きほれぬ　　東京　かれ子
鶯の初音に山のなつかしき　　名古屋　中村千代子
風淡く霞の中に馬子の唄　　愛知　荒木登美子
盆梅の香にうれしさの夜明哉　　名古屋　中村なみ子
永き日の庭に衣ほす女かな　　名古屋　伊東はま子
男の子產みし家に舞ひ込む玄鳥かな

眉を剃る鏡に物の名殘哉
生膽の下に火を焚く霜夜哉
肌寒むの月の戸たゝく女かな
春風に吹かるゝ酒の機嫌かな
伸び過ぎて愚にも見ゆる簾かな
出代や門を出づれば花曇り
古城の礎にしだるゝ柳哉
梅提げて月の野路を諸かな
紅梅や脱ぎ捨てゝある上草履
紅梅の散るや日向の古むしろ
此の山の不動の池や落椿
給維洗ふ薔伯の姿や春の水
睦ましき姉と妹のひなの酒
菜の花の中に路あり里近き
山吹や水に傍ふ家の庭淺き
菜園に遊ぶ日中や春の雪
学菜釣る窓に西日の暖み哉
此島に一つ鳴きけり夕雲雀
鶯のはなればなれや夕嵐
弦音に花のちり來る夕哉
春雨の宿にすさびのざれ繪かな
學寮の灯うつる田や鳴く蛙
朧夜を寺侍の下山哉
春淺山に生ひけり杉の筍
紅梅の背に野邊の月夜かな
徑一つ桃の谷間に入りにけり
有明の白きを見れば櫻なり
桃咲くや水を隔てゝ乳母の里
春の夜やつれなき人を肱枕
春の閨絹行燈の火影哉

美濃　加藤里子
同　八木銀子
同　小野木梅子
神戸　足立ゑい子
同　足立あさ子
岐阜　平田紫子
兵庫　梶原京子
相模　楠木とよ子
長崎　秋山虎子
神戸　今西操子
廣島　鈴森きみ子
山梨　高瀬靜江子
宮城　山形幸子
岐阜　森かん子
高知　山脇白露子
京都　船津澄惠子
相模　篠原下枝子
横須賀　齋藤まつ子
相模　櫻川澄子
同　吉岡艷子

雪解けを鳴く鶯や草の宿
鷺の立てば霜散る椿哉
若菜賣りて濡れて歸る京の町
春雨や朱雀に暮れて祇園町
古市の花散りかゝる小提灯
有明に漂ふ池の櫻かな
江戸の春櫓大皷に明けにけり
梅匂ふ窓にすへけり几
藪入や柳の在所梅の里
黒潮の瀬戸も朧や春の月
人なくて春月の内なる緋桃かな
潮の邊に藁家六七柳かな
菜の花の中に小家や校の音
梅咲きて里に織女のうわさ哉
山吹や垣の外行く女傘
短冊や梅に床しき女文字
新しき風呂の匂も日永哉
磯の香や明け易き夜を漁村の灯
郊行や驢馬の耳吹く春の風
蓮野や街燈に乘りし村童
紅梅の折戸を叩く音かな
淡雪や少し置きる松の梢
春風やサラ〳〵と吹く洗ひ髪
白糸の瀧の千筋や春の風

相模　望月峰子
神奈川　服部八重子
横須賀　渡邊比佐子
同　高橋つね子
同　三輪やす子
東京　千勝ふく子
長門　村田松子
横須賀　柏原美奈子
岐阜　後藤英子
東京　河下靜子
岩代　岸野常子
相模　藤原下枝子
越後　岩本芳子
横須賀　三輪やす子
伊勢　下村紫子
東京　游部てい子
同　川口秋子
同　紫田ふみ子
美濃　兒島八重子

●字數あて披露●

先月七日午後一時より、第一月號にて懸賞募集たる官報字數あての審査を、本社重役及編輯局總員立會の上行ひたり、この解答に就ては、大抵二千字內外のもの多く、出題者も少くも千餘字はあるべしと思ひたるに、圖らざりきこの數

百十三字

の少數ならんとは、而して其結果は

第一等　百十六字　韓國咸興理事廳官舍　岡本常子
第二等　百六字　相州小田原幸町一の百十九新名方　水野けい子
第三等　七十五字　東京小石川區關口臺町七十二　日種富士子
第四等　五十九字　東京京橋區卅間堀三丁目六番地　山部ふさ子
第五等　四十六字　東京市下谷區南稻荷町九十八　若櫻木敏子
第六等　四十五字　横濱市辨天通四丁目八十五番地　鈴木まつ子
第七等　三十二字　東京赤阪區新坂町二十八番地　大濱富子
第八等　二百四十一字　東京芝區高輪臺町四〇渡邊方　吉井よしを
第九等　三百十七字　長野縣更級郡稻荷山町北町　今井ハナ子
第十等　三百廿一字　久留米市篠山町　押山絹子
第十一等　三百五十八字　近江郡須小枝子以下六名
第六十一等　一千五十三字　名古屋　橘多賀子外三百名

●前號繪探し披●

◎正解　(一)鯛の頭(左の袖)　(二)狐の面(左の手より袴にかけたる所にて)　(三)蝶(袴の紐のあたり)　(四)羽子板(美人の頭の上より脊にかけて)　(五)公卿(倒に見て左の端に冠あり、美人の頭のあたり裝束)

右のうち、鯛の頭を魚の頭とし、公卿を法官その他類似の解答ありしは皆及第としても、千餘名の解答ありしうちにて、正解者は僅に左の十三名に過ぎず、即ち例によつて公平なる抽籤を行ひ、それ〲規定の賞品を送呈したり、

第一等　長野縣西筑摩郡大桑村　古瀨隅世
第二等　青森縣下北郡川野澤村齋藤方　川合リク子
第三等　常陸國新治郡土浦町八百五十　岡田萬子

第四等以下の正解答者　●東京　田尻眞子　●同　峰岸ます子　●同　小川ウメ子　●同　柴田たか子　●同　武山みつ子　●滋賀　西田もよ　●同　中村たづを　●同　たけを　●石川　得賀ため　●藤井はる

新刊紹介

和洋裁縫大全

小出新次郎氏著

近時續々浩瀚なる大冊の出版あり、大に讀書界に利せるが、其多くは單に多人數と多年月によりて、多數の頁をつくりたる編輯に過ぎざるが、本書は全篇工藝上の原則に基きて著述したるものにて、家傳の秘術と、自家の工夫を些の惜む所なく、之を三十卷の大冊に詳記したるものなれば、これ等手藝書として空前なると同時に、恐らく絶後なるべき大著なるを信ず、而して此大著は自家の資力を以て出版したるものなるが、其財源は著者の先年著述したる裁縫秘術綱要一冊より得たる利益によれるものなりと、如何に著者の裁縫書が世に歡迎せられたるかを知るべし、因に本書は本月より再版に着手し、極めて輕便なる豫約法によりて、廣く希望者に頒つ由、その方法は發行所に就て聞かれたし、

定價

一冊	前金	貳拾錢
三冊	前金	五拾七錢
六冊	前金	壹圓拾錢
拾貳冊	前金	貳圓拾錢

全國遞送無料

廣告料 五號活字二行廿字詰

	四半頁（十六行）	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	三十五圓
一等	六圓五十錢	十一圓	二十圓
二等	五圓	九圓	十六圓
並等	四圓	七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十一年二月廿六日印刷

明治四十一年三月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社

右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　橋本忠次郎

印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　守岡功

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社

＝振替貯金口座番號＝　壹壹七八番＝

（電話新橋二六九三番）（電話新橋特八八番）

東京高等師範學校教授　文學士松本孝次郎著

家庭に於ける兒童教育

總クロース
菊版二百頁
定價五拾五錢
郵税八錢

本書は**兒童教育專攻家**として教育界に名聲隱なき著者が多年研究せられたる**學說**と**實驗**とに基き**實地家庭**に行ひ得らるゝやう極めて**平易且切實**に談話體を以て**兒童教育法**を說述せられたる者にして世にありふれたる家庭教育書類と全く其の**選**を**異**にせり而も何人にも解り易く容易に**育兒**の**妙訣**を了得するを得べしされば世の父母たる人は子女將來の爲**是非熟讀**せざる可らざるものなり

此書は亦**兒童教育**の任にある**學校教師等**には必缺く可らざる**良參考書**なり

重要目次

◉第一家庭に於ける德育　◉第二家庭に於て起り易き弊害　◉第三兒童の賞罰　◉第四遊戲の價値
◉第五兒童文學　◉第六兒童と自立心　◉第七感情教育　◉第八家庭と園藝　◉第九兒童と言語
◉第十兒童と圖書　◉第十一青年教育の注意　◉第十二男女の兒童　◉第十三小兒室の構造及設備

發行所　東京市京橋區築地二丁目　電話新橋八八、二六九三　株式會社　**國光社**　＝關西大賣捌　大阪市南本町　**積文社**

文部省體操遊戲取調委員

井口あくり　可兒德　川瀬元九郎

高島平三郎　坪井玄道

諸先生共著

第六版

體育の理論及實際

總クロース
菊版五百餘頁
正價　金壹圓參拾錢
郵稅拾錢

目下新式體操書の發刊せらるゝもの其數尠からずと雖ども概ね一個體操家の手に成り單に一部動作の形式方法等を示すに過ぎず其斯學大家の共著に成り學說實地全體を網羅して完全無缺なるは世間唯本書一あるのみ本書は曩に文部省體操遊戲取調委員として調査研究せられたる前記諸先生が其取調報告書に基き教育上生理上の學說及實地演習の動作方式等を詳細(新式基本姿勢は特に詳密に)解說せられたるものにして姿勢動作等には百六拾餘個の木版運動服體操教室等には石版摺着色畫を挿入し丁寧親切に說示しあれば此書を繙く人は恰も諸先生に就て親く教授を受くるが如しされば新式體操に志す人は勿論中學校高等女學校及高等尋常小學校には必一本を備へざる可らず

發行所　東京市京橋區築地二丁目　電話新橋特八八、二六九三　株式會社　國光社

大賣捌所　大阪市東區南本町　合資會社　積文社

國光社發行

島田三郎先生序　小畠幾次郎先生著

腦力増進論

全　正價三拾五錢　送料六錢

沼南島田三郎先生本書の冒頭に序して曰く心身の二者を保養して人始めて其發育を完全にするを得べし、心性を措ひて偏へに身體を說き身體を外にして專ら心性を論ず二者各其半面を語るものにして全局を蓋ふの見解に非ずと、著者夙に茲に見るあり世の青年學生の腦病に罹る者多きを慨し研究を積み推考を重ね汎く專門諸大家を歷訪し其所說を叩き大に悟る處あり遂に此書を作せり、賀古耳科院長、井上眼科院長、中濱回生院長、此木ドクトル、三浦大學教授、岩佐告成病院長、鈴木胃腸病院長等の卓說高論は著者の實驗及び古今に涉れる實地談と共に輕妙快活なる文章に由りて描寫され一讀の下頓に精神の壯快なるを覺ふ蓋し心身の二者を保養するに於て極めて必要なるのみならず一般學生の爲めに無上の清涼劑たるべし

小畠幾次郎先生著

體力増進論

全　正價四拾錢　送料八錢

著者前に腦力増進論を著し世に裨益せしもの少なしとせず更に本書を公にし相俟て心身の完全なる發達に資せんとす由來體質の軟弱なるは我が國民の一大缺點殊に一般學生の通患なり希くは此書に據り研究鍛錬して軀幹長大體力剛健の人と爲り以て戰捷國の民たるに負かざれ

女鑑

明治四十一年三月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

第拾八年第三號

株式會社國光社印刷